

博士論文（要約）

論文題目 句の中核部を形成するハワイ語の機能語
— ‘ana と方向詞を中心に—

氏 名 岩崎 加奈絵

句の中核部を形成するハワイ語の機能語
—‘ana と方向詞を中心に—

目次

序文.....	4
略号.....	5
表・図一覧.....	6
1 はじめに.....	7
1.1 本研究の背景と目的.....	7
1.2 考察対象の性質.....	7
1.2.1 対象言語・ハワイ語について.....	7
1.2.2 ハワイ語の現在の使用状況.....	8
1.2.3 ハワイ語の系統関係に関する議論.....	9
1.3 本研究で用いる手法について.....	11
1.3.1 文献の使用.....	11
1.3.2 比較研究の必要性.....	12
1.4 本研究の位置付けと意義.....	12
1.4.1 ハワイ語の文法研究において.....	12
1.4.2 ポリネシア諸言語の文法研究において.....	13
1.4.3 言語学一般において.....	13
1.4.4 「規範」としての文法記述について.....	14
1.5 全体の構成.....	14
2 ハワイ語の概要.....	15
2.1 音韻.....	15
2.2 語類.....	17
2.3 本研究で用いる用語の定義.....	19
2.3.1 本研究における品詞分類：「動詞」と「名詞」.....	19
2.3.2 機能語の3分類.....	21
2.3.3 「句」の名称と性質について.....	23
2.3.4 「句の中核部」.....	24
2.4 主な統語的特徴.....	25
2.4.1 動詞句構造.....	25
2.4.2 名詞句構造.....	27
2.4.3 動詞述語文.....	30
2.4.4 名詞述語文.....	31
2.4.5 存在文.....	31
2.5 ハワイ語の示す方言差・年代差.....	32

3	先行研究	33
3.1	包括的研究	33
3.1.1	Elbert and Pukui (1979)	33
3.1.2	Schütz, Kanada and Cook (2005).....	34
3.1.3	Hawkins (1979)	35
3.2	その他ハワイ語に関する研究	35
3.2.1	Schütz (1994).....	35
3.2.2	Pukui and Elbert (1986)	36
3.2.3	Hopkins (1992)	36
3.2.4	“Ulukau”	36
3.3	ハワイ語に関するもの以外の論文.....	37
3.3.1	Greenhill and Clark (2011).....	37
3.3.2	Greenhill, Blust and Gray (2008)	37
3.4	先行研究に見られる課題	37
3.4.1	体系性の問題	37
3.4.2	時期の問題.....	37
4	本研究で用いるハワイ語データの性質	39
4.1	コーパスとしたテキスト	40
4.1.1	Judd and Mookini (2003)	40
4.1.2	Beckwith (1951)	41
4.1.3	Ho‘oulumāhiehie (2006)	41
4.1.4	Elbert (1959)	42
4.1.5	Gutmanis (1983)	42
4.1.6	Lowe (1994)	42
4.1.7	Carroll, Lewis, translated by R. Keao NeSmith (2013)	42
4.2	用例整理の各手順について.....	43
4.2.1	用例の抽出.....	43
4.2.2	用例へのラベル付けと用例の選択	44
4.2.2.1	KWIC 索引の作成.....	45
4.2.2.2	Excel でのデータ精査・ラベル付け	48
5	動詞・名詞の周辺要素	51
5.1	句を構成する要素	54
5.1.1	否定辞・決定詞・数	54
5.1.1.1	否定辞	54
5.1.1.2	決定詞	55
5.1.1.3	数.....	57
5.1.2	TA 詞.....	58
5.1.3	使役の「接頭辞」 ho‘o-.....	60

5.1.4	受身のマーカー‘ia	62
5.1.5	後置代名詞.....	64
5.2	‘ana	68
5.2.1	‘anaに関する先行研究の記述.....	68
5.2.2	用例に見る‘ana句.....	71
5.2.2.1	‘anaと他の語の共起関係	73
5.2.2.1.1	‘anaと共起する機能語	73
5.2.2.1.2	‘anaと共起する内容語の具体例.....	79
5.2.3	考察：「名詞化辞」‘anaの冗長性と先行研究の指摘に対する対案	80
5.2.4	おわりに	82
5.3	mai, aku, iho, a’e (「方向詞」)	83
5.3.1	方向詞に関する先行研究の記述.....	83
5.3.2	本研究における方向詞の分析・考察の過程.....	88
5.3.3	mai.....	89
5.3.4	aku.....	91
5.3.5	a’e	92
5.3.6	iho.....	93
5.3.7	用例に見る方向詞の性質.....	93
5.3.7.1	テキストの性質と方向詞の使用頻度.....	93
5.3.7.2	共起する内容語の性質.....	94
5.3.7.3	基準点の交替	97
5.3.8	おわりに	98
6	二つのハワイ語.....	101
6.1	前提	101
6.1.1	ハワイ語・ハワイ語記述の略史.....	101
6.1.2	「自然継承期ハワイ語」と「現代ハワイ語」	102
6.2	‘anaと-ing形.....	104
6.2.1	二つのハワイ語の‘ana.....	106
6.2.2	現代ハワイ語の‘anaと-ing形.....	106
6.3	方向詞.....	108
6.4	おわりに：本章の位置づけ.....	113
7	結び.....	115
7.1	本論にて明らかとなった点.....	115
7.2	今後の課題	116
	参考文献	119
	資料編.....	123

序文

ハワイ語は音の少ない言語である、といわれることがある。また、語には活用がなく、語順こそ日本人の目には珍しいものの、概して「素朴」なシステムであるような印象を受ける人も少なくないだろう。しかし一歩踏み込むと、他のどの言語にもおくれを取らない、複雑な体系がやはりそこに存在する。これは当然のことではあるのだが、世界のあらゆる言語はいずれも等しく人間の認知や思考の結晶であり、等しく難解で、等しく掴みどころのないものであることを実感させられる。本研究は、ハワイ語の文を作れるようになること、という単純明快な目標がスタート地点であり、ハワイ語文の構成要素である句の構造について、その枠組みをつくる機能語に焦点を当てるものである。

本研究を進めるにあたり、博士課程在籍期間を通して丁寧な指導とあたたかな激励をたえず頂いた指導教員の林徹教授、卒業論文執筆から修士課程まで、研究生活のスタートに当たりご指導を頂いた熊本裕名誉教授、東京大学言語学研究室の先生方と学生の皆様、そして、学会でハワイ語をテーマとする発表をする際にいつもコメントを下さり、多くの示唆を与えてくださった塩谷亨教授に心より御礼を申し上げる。

また、日本においてハワイ語が生きている場を実際に体験したいという動機からスタートし、それから10年にも渡りフラのご指導を頂いている田澤富士子先生と、ナー・マモ・オ・レフアマカノエの先輩と仲間たちに、貴重な機会を数多く与えてくださったこと、そして長い目で見守ってくださったことに対して深い感謝の意を表す。

最後に、あらゆる局面において献身的に支え、見守り、味方でいてくれた家族に、最大限の感謝を捧げたい。

2018年5月
岩崎 加奈絵

略号

1 2 3	人称
A	所有・Aタイプ
Ana	‘ana
Cont	内容語
Det	決定詞
Dem	代名詞
Dir	方向詞
du	双数
exc	除外形
Imp	命令
inc	包括形
Inf	不定形
Int	強意（詞）
Loc	位置名詞
Neg	否定
O	所有・Oタイプ
Obj	目的語マーカー
Part	小辞
Pass	受身
pl	複数
Poss	所有形
Prep	前置詞
sg	単数
Sub	主語マーカー
TA	TA 詞（テンス・アスペクトマーカー）

<ハワイ語・例文表記について>

本研究では、注記のある場合を除き、ハワイ語の表記法は現代式の表記法に従っている。従って、長母音を各母音+マクロンで、声門閉鎖音を逆向アポストロフィー (‘) で提示している。原典中では旧表記法の場合も、筆者の判断に基づいて、新表記法に改めたうえで記載している。

なお、グロスと「」内の日本語訳は、注記がない場合は筆者によるものである。

表一覧

- 表 1 ポリネシア諸言語の対応の例
- 表 2 Pukui and Elbert (1965) における語の分類
- 表 3 Elbert and Pukui (1979) における lexical item の分類
- 表 4 Schütz, Kanada and Cook (2005) における part of speech
- 表 5 本研究における品詞分類
- 表 6 動詞句構造
- 表 7 名詞句構造
- 表 8 ‘ana を含む句の構造
- 表 9 コーパスに含まれる資料の性質 (原本発行年順)
- 表 10 動詞句構造
- 表 11 名詞句構造
- 表 12 ‘ana を含む句の構造
- 表 13 先行研究における TA 詞の記述
- 表 14 先行研究における後置代名詞の記述
- 表 15 ‘ana と内容語より前に出現する他の機能語との共起数
- 表 16 ‘ana と内容語より後に出現する他の機能語との共起数 (‘ia は新表記法による資料のみ)
- 表 17 文献別: ‘ana と内容語より前に出現する他の機能語との共起数
- 表 18 文献別: ‘ana と内容語より後に出現する他の機能語との共起数
- 表 19 各機能語-内容語-‘ana の構文で出現数の多い内容語
- 表 20 先行研究における方向詞の記述
- 表 21 コーパス全体における各方向詞の出現回数
- 表 22 各資料における各方向詞の出現回数
- 表 23 各方向詞と共起しやすい語彙と、その主たる意味
- 表 24 頻出語彙と各方向詞の共起関係
- 表 25 自然継承期ハワイ語・現代ハワイ語の物語文における‘ana 出現回数の比較
- 表 26 “Āleka” に見られる‘ana 句に対応する原典の用法
- 表 27 『アリス』章ごとの ‘ana (ハワイ語)・ing (英語) 出現回数
- 表 28 自然継承期ハワイ語・現代ハワイ語の物語文における方向詞の出現回数の比較

図一覧

- 図 1 ポリネシア諸言語の下位分類 (Marck 2000:2)
- 図 2 ポリネシア諸言語の下位分類・Marck の説 (Marck 2000: 3)
- 図 3 KWIC Concordance における KWIC 作成手順 (1) テキストファイル選択
- 図 4 KWIC Concordance における KWIC 作成手順 (2) Option の設定
- 図 5 KWIC Concordance における KWIC 作成手順 (3) キーワードの設定
- 図 6 KWIC Concordance における KWIC 作成手順 (4) 作成された KWIC 索引
- 図 7 Excel でのラベル付け作業例 (1)
- 図 8 Excel でのラベル付け作業例 (2)
- 図 9 ハワイ語およびハワイ語記述の略年表

1 はじめに

1.1 本研究の背景と目的

ハワイ語統語論の研究は、ハワイ大学を中心に、1970年代以降行われてきた。これは、話者のハワイ諸島への偏在や一次資料へのアクセスの難しさなどがあるためであると考えられ、同地域以外での研究はそれほど盛んではないともいえる。

このような状況下で展開してきた研究には、現状次のような問題点がある。

- ①ある程度網羅的・体系的な記述を試みたものは30年以上更新が無い
(ハワイ語文法研究の最新の知見を反映させたものがない)、
- ②節・句の構造について、そこに含まれる個々の要素の研究はあるが、許容される
組合せや出現頻度の高いパターンなどが網羅的に説明されていない、
- ③結果として、ハワイ語の可能な文がどんなものかが掴みにくい
(第一に、ハワイ語の専門家以外にとってどんな言語であるかわかりにくい。
それに加え、家庭やコミュニティでの自然継承が行われず、学校教育を通じて
言語としての活力を保っているハワイ語の状況を考えると、学習のしにくさに
繋がっているため、好ましくない状況であると言える)

これらの問題点を踏まえ、ハワイ語研究に求められること、および本研究の目的は以下のようにまとめられる。

- ①<長期的には>ハワイ語でどのような文(句)が許容されるのかを、体系的に
説明することを通して、ハワイ語の姿をハワイ語研究者以外の目にもわかりやす
く提示すること。
- ②その一環・第一歩として、動詞句・名詞句の構造と、それぞれの句に現われる機能
語のうち、その性質が十分分析されていないものを取り上げて論じること。

主に2点目が、本研究の主題である。

1.2 考察対象の性質

1.2.1 対象言語・ハワイ語について

本稿で扱う対象は、1970年代以降に「教えられる言語」となったハワイ語ではなく、ハワイ語の自然継承が断絶する前(19世紀~20世紀初頭)に使用されていたハワイ語、つまり、ネイティブスピーカーが数多く存在し、言語が自然に継承されていたとみられる、「自然継承期」のハワイ語である(このことについては、第6章で詳しく論じる)。

詳しくは6.1にて述べるが、ハワイに諸外国の勢力が入ってきたのち(はじめはイギリス・アメリカ合衆国等からの商船・捕鯨船の寄港中心、のちには中国・日本・ポルトガル・他の太平洋諸島などからプランテーション労働者が大量に流入)、政治的変動によりハワイ語は衰退の一途を辿った経緯がある。「ハワイ人」人口の急激な減少などいろいろな要因があるが、公教育において使用が禁止されたことは明確な原因といえる。

ハワイ語は現在主にアメリカ合衆国北西ハワイ諸島で使用されており、現在残る最初期の文字記録は、西欧諸国との接触時のもの（西欧側の記録）である（クック船長の訪問時の船員による記録など）。

19世紀初頭以降、キリスト教宣教師が来訪すると、布教のため近隣の言語を拠り所にしつつ書記法・文法などを模索していき、1822年にはハワイ語で使用されるアルファベットリストがはじめて発行された。これをもとに、ハワイ語による聖書や新聞・その他の印刷物が発行されるようになった。もともと口承の文化であり、目に見える形で保存されることのなかったハワイ語が、この時期から手稿や印刷物として残されるようになり、資料の蓄積が本格的に始まった。本研究も、こうして記録・出版された文字資料に基づくものである。

1.2.2 ハワイ語の現在の使用状況

6.1で述べるが、ハワイ語の話者数は歴史とともに大きく変化してきた（松原 2004, 2008 など）。1959年の「ハワイ州」成立時には200人程度と見なされていた（Tabrah 1987）が、復興運動の努力により、話者数は再び増加していると考えられている。

一方、現在のハワイ語母語話者数についてはいろいろな説がある。たとえば Wurm (2007) では2000人となっている。また、2015年にデータが発表された、2009-2013年版の US census¹ では“Speak a language other than English at home”と答えたうち、ハワイ語を使用すると答えた数が26,205人、さらにそのうちで“Speak English less than “Very well””と答えた数が4,280人とされている。

これはその前の回、2006-2008年版の census²の数字がそれぞれ24,042人、2,190人だったことを考えると、ハワイ語を主に使用する話者の数が増えていることを示しているように見える。このことについては、実際に話者が大きく増えたというよりも、以下の事実が関連していると思われる。

ハワイ語は1978年より「州の公用語」というステータスを得ており、また、使用域に関して言えば、近年ではハワイ大学ヒロ校ハワイ語学部博士課程が設置され、2010年には初の博士号が授与されるなど、教育を通じて存在感を増しているのは確かである。政治・社会的にも、1970年代以降のハワイ文化の復興運動により、先住ハワイ人系の住民を中心に、ハワイ人であることの一つの象徴として、ハワイ語を理解できるということを主張する意義も年々増しているといえる。これらの事実を踏まえると、自己申告形式である US census では「話者」数が実態以上に大きくなることが予想されるのである。

さらに留意すべき点として、再活性化が成果を上げる一方で、英語とのバイリンガル話

¹ United States Census Bureau がウェブ上で公開している項目別資料のうち、“Detailed Languages Spoken at Home and Ability to Speak English for the Population 5 Years and Over for United States: 2009-2013”. <https://www.census.gov/data/tables/2013/demo/2009-2013-lang-tables.html> (2017/8/2 アクセス)。

² “Detailed Language Spoken at Home and Ability to Speak English for the Population 5 Years and Older by States: 2006-2008”. <https://www.census.gov/data/tables/2008/demo/2006-2008-lang-tables.html> (2017/8/2 アクセス)。

者が多いことは依然として変わらず、恐らくは今後もそれを覆すのは非常に難しい。ハワイ州の民族的多様性の観点からしても、結局のところ州内でのコミュニケーションは英語を主とするものであり続けられると思われる。

1.2.3 ハワイ語の系統関係に関する議論

オーストロネシア語族・マラヨ＝ポリネシア語派に属する。オーストロネシア語族の下位分類に関する研究は数多くあるものの (Blust 1999, Ross 2009 など)、分岐の仕方に多少のバリエーションがある点を除けば、ハワイ語の系統については「オセアニア諸語」に含まれる「東部ポリネシア諸語」の一言語であるという点で一致している。また、ポリネシア諸語内の系統関係に関する研究も少なくなく、Pawley (1966,1967), Green (1966, 1988) などがある。ここでは一例として、Marck (2000) がこうした先行研究に基づいて作図したもの、および Marck 自身が提示した修正案を以下に挙げる。

(他者の著作物 (図) のため非公開)

図1 ポリネシア諸言語の下位分類 (Marck 2000:2)

(他者の著作物 (図) のため非公開)

図2 ポリネシア諸言語の下位分類・Marckの説 (Marck 2000:3)

ハワイ語と最後に分岐したと言われるマンガレヴァ語とマルケサス語の2つが、ハワイ語ともっとも近い関係にある言語である。いずれもフランス領ポリネシアで使用されている言語であり、Ethnologueによれば、マンガレヴァ語は600人、マルケサス語³はやや多く、合計約8000人の話者を持つという。ただし、記述・研究の点でハワイ語より盛んであると

³ Ethnologueでは、マルケサス語を南マルケサス語・北マルケサス語の2項目に分けているが、ここでは2つの合計の数字を示している。

はいえない。

次いで近い言語では、大きな言語としてはタヒチ語・マオリ語、その他ラロトガ語・トゥアモトゥ語などがあるが、これらは Proto Tahitic に含まれるものであり、言語ごとに程度の差はあるが、ハワイ語との違いが目立つ言語が多い。

1.3 本研究で用いる手法について

1.3.1 文献の使用

現在のハワイ語統語論研究において、最もよく採用されるアプローチである。その理由は以下の3点である。

- ① 母語話者の激減のため、信頼できる母語話者を得ることが困難であること、
- ② 音声記録がごくわずかであること、
- ③ 分析に使用する用例を多く得るためには、比較的多く残されている文字資料を対象にする以外方法がないこと。

①に対しては、母語話者であるかどうかに関係なく、現代人のハワイ語をフィールドワークで調査するという方向性もありうるが、言語教育を通して、特定の文法記述の影響が大きいことが予想される（例えば Elbert and Pukui (1979) のような代表的な研究によると考えられる⁴）。今後の「現代ハワイ語」がどのような変遷を辿るかは興味深い、本研究の目的からは外れる。従って、今回は現代のハワイ語話者から直接データを収集する方法は取らないことにした。なお、近現代におけるハワイ語の変遷については、第6章で触れる。

②については、母語話者の音声資料がないわけではないが、その使用については文献を使用する場合よりもはるかにアクセスに制限があり、分量も限られているため、少なくとも統語論研究においては現実的ではない。

一方、文字資料に関しては、以下のような利点がある。現存するハワイ語の文献には「民話・神話」「新聞（時事問題・コラム）」「行政文書」「チャント」「教材・教科書」等の分野がある。そして現在、幸いなことに、これらハワイ語のテキストにはアクセス可能なものが多くある。ウェブ上で公開されているもの、公刊されているもののように簡単に入手できるものから、博物館・図書館等に保管されている貴重なデータなどさまざまである。ただし、行政文書（および聖書）は政治史的に考えて土台に英語圏の文化の影響があり、いわゆる「ハワイ的」なテキストではないので、扱う際には注意が必要である。

⁴ この点について、予備論文審査において塩谷亨氏より受けた指摘に基づいて追記をする。

現在のハワイ語話者（ハワイ語学習者）にとっては、どのテキストで学んだか以上に、どの教師について学んだかの影響が大きいものと考えられる。教師のバックグラウンドはさまざまであり、テキストを用いるにしても、オリジナルの教材の使用や教え方そのものがそうした背景を反映することの方が、学習者のハワイ語知識への影響が大きい、ということは確かに言えそうである。また、教師によっては“non-native intuition” に基づいた判断を示すこともあるという。本研究において「規範」としての言語記述については 1.4.4 を参照。

1.3.2 比較研究の必要性

前節でも触れたが、ハワイ語の研究において、インタビュー調査をしにくい状況にあることは無視できない問題である。自然継承期のハワイ語を対象とする場合、音声データは殆ど使用できない。記録が分量的に僅かであるため、文法の分析には不十分であるのはすでに述べた通りである。この点を補う意味でも、そしてもちろんどんな言語にも当てはまる一般的な意味でも、通時的研究の一環として、系統の近い言語の文法記述との比較研究を行うことが望まれる。しかし、そのような研究をおこなうためには、文献から明らかになるハワイ語の文法的特徴を整理しておく必要があると考える。本研究は、系統の近い言語との比較研究を直接するものではないが、将来のそうした研究に基盤を提供することができるものとする。

1.4 本研究の位置付けと意義

1.4.1 ハワイ語の文法研究において

2章以下で具体的に提示するが、ハワイ語において、ある内容語が統語的に動詞（動詞句の中核）であるか、名詞（名詞句の中核）であるか判断する際には、共起する機能語が主要な基準である。一方で、そうした機能語それ自体の性質については、ごく基本的な記述や典型的な用法等が示されるに留まり、詳細の未だ不明瞭なところが多い。

例えば、5.2において取り扱う‘anaは、従来「名詞化辞」とされてきた。確かにこの語は、ポリネシア祖語の*-(C)(a)ngaに由来していると考えられ、祖語の段階では名詞化接辞であったと見られている。しかしハワイ語の用例を見る限り、「動作性を帯びた意味をもつ内容語が名詞句のヘッドになるために必須の要素」ではない。2章で示す品詞に対する立場、すなわち、動詞・名詞といった品詞は、語彙のレベルで各語彙素に個別に設定されているのではなく、文や句のレベルでのみ判断できる統語的なカテゴリである、という立場から考えれば、そもそも名詞化というプロセス自体を考える必然性がなくなる。

‘anaの性質を論じるにはむしろ、‘anaを含む句は、そのほぼ全てが名詞句に必須の要素である決定詞・否定辞と共起しているという点に注意すべきである。その理由を、「‘anaと共起しているから名詞であり、そのために決定詞・否定辞が共起している」と考えるか、それとも‘anaの有無にかかわらず統語的に名詞句として振る舞う語はほとんどが決定詞・否定辞と共起するのであり、‘anaは名詞性を示す以外の何らかの機能を担っている」と考えるかについては、慎重な議論を要する。いずれにしても、「名詞化を起こす要素である」とするだけでは‘anaのもつ性質を十分記述したとはいえない。

現在のハワイ語統語論には、‘ana以外にも後置代名詞、方向詞、強意詞 (intensifier) など、十分に解明されていない要素が残されている。こうした状況を考慮し、

- ①各機能語それ自体の性質をより詳らかにすることにより、文法記述の精度を向上させること、
- ②統語論における基本概念である「名詞」「動詞」を判断するための基準となる要素をよりよく知ること

という2つの観点から、機能語について分析・記述を行うことが有意義であると考えられる。

1.4.2 ポリネシア諸言語の文法研究において

ポリネシア諸言語の中には、再活性化の助けなしに現在も話されているとされる言語も、ハワイ語やマオリ語のように再活性化が行われた言語も、そして消滅が危惧されるほどに話者の少ない言語もある。多様な言語環境を持つそれぞれの言語であるが、言語学的研究、特に個別文法記述の点では、言語ごとに大きな開きがあるものの、例えばこの地域の専門誌である *Oceanic Linguistics* に採用される論文数から見た場合、ポリネシア諸言語の研究がオーストロネシアの言語研究の中で活発な方であるとは言い難い⁵。

現時点で使用可能な多くの文字資料があるハワイ語における研究が進展すれば、ハワイ語と類似点の多い他のポリネシア諸言語の記述に対しても示唆を与えるところがあるものと期待できる。

1.4.3 言語学一般において

ハワイ語は、その歴史的盛衰の経緯を考えると、自然継承の断絶期を挟みつつも再活性化にある程度成功した言語の一例として、注目に値する。6章でも触れるが、この断絶の前後にどのような変化が見られたか、あるいは言語教育や言語研究が言語そのものに与える影響がどのようなものでありうるか、などを考える事例となり得る。しかしそのためには、断絶前のハワイ語がどのような言語であったかできるだけ精緻に知ることが必要である。本研究で扱う機能語は、記述とそれに基づく教育において、「英語でいう〇〇に当たる」という形で説明されることが少なからずあった。例えば本論で取り扱うハワイ語の機能語‘anaは、英語における動名詞(-ing形)を対訳とすることが半ば慣習化している(6章で述べる)。このような語は自然継承が行われていた時期のハワイ語の性質と、それが断絶した後教育を通して普及しつつあるハワイ語の性質とを比較するのに適した要素である。そして、このような語・表現・構文等の振る舞いを見ることは、言語学的記述が、継承の現場である教育において参照されることを通して「規範」として作用することを繰り返した結果、言語そのものに対しどのような影響を与える可能性があるのかという問題を考える際の事例として注目に値すると思われる。

⁵ 2008-2017年の *Oceanic Linguistics* 誌 (Honolulu: University of Hawai'i Press) に掲載された論文を見ると、レビューや追悼記事を除く197本中、ポリネシア地域に関する論文は歴史言語学的(再建など中心)のものが5本・音に関する研究が4本で、いわゆる文法記述・分析にあたるものはタヒチ語1本・マオリ語1本の2本のみであった。もっとも、ハワイ以外を発行地とする雑誌・学会誌にはポリネシア地域に関する論文を中心とするものがあるため *Oceanic Linguistics* の掲載数だけがパラメータではないが、基本的に母語話者がいないか話者が少数である言語が多いこともあり、全体として研究コミュニティの規模が大きくはないとは言えるだろう。

1.4.4 「規範」としての文法記述について

ここでは、1.4.3の最後に触れた「規範」という考え方について補足する。

本研究では、1970年代以降にハワイ語を第二言語として学んだ人々や、イマージョンプログラムを通じて「第一言語」として習得した人々のハワイ語を、「現代ハワイ語」として、過去日常的に使用されていた時期のハワイ語と特徴が異なると想定している。こうした人々は、非常に多くの場合において非母語話者からハワイ語を習い、また英語の影響が非常に大きいなど、現代ハワイ語話者特有のバックグラウンドを有する。

そのバックグラウンドのひとつとして、本研究ではハワイ語記述・統語論研究の影響を考えている。学習を進めるうえでハワイ語の使用・文法について何らかの疑問が生じた際、母語話者の直感 (native intuition) に頼れない状況が、言語使用や教育の現場で起こっていることが想定できる。そのときに何を参照するかを考えれば、教師へ質問をする以外には、あるいは質問された教師の側も突き詰めれば、先行研究、特にレファレンスグラマーが有力な候補として考えられる。その意味で、教科書や教師のほかに、多くのハワイ語話者が参照する先として共通するのが、Elbert and Pukui (1979) を代表とする先行研究になるのではないかと考えるものである⁶。「規範」という語・考え方をもって特定の文献を指すものではないが、特に参照される頻度の高いものほど影響力も高くなると考えられる。

こうしたことを踏まえ、英語の影響のみならず、1.4.3で述べたように「規範」もまた環境の重大な一つの要素として、現代ハワイ語話者の文法の在り方に影響を与えているのではないかと、という可能性を考えており、本研究ではしばしばそのことに言及している。

ただし、本研究は教育における規範の存在自体やその重要性に対し批判的・否定的な見方をするものでは一切ないことを注記しておく。語学学習としてはむしろ規範は重要な指標であり、学習を継承の要とするハワイ語では特に必要とされるものである。

1.5 全体の構成

2章では、本研究の対象言語であるハワイ語について、音および統語上の性質を概観する。3章では、ハワイ語統語論研究の主要な先行研究を挙げ、その成果を紹介するとともに、問題点についても指摘する。4章では、議論において使用するハワイ語のデータについて、出典・各文書の性質・用例整理の手順などを提示する。5章では、本論文の主眼である、句の中核をなす各要素についての記述・分析を行う。1節では種々の要素の概説、2節では‘ana、3節では方向詞について、それぞれ取り扱う。6章では、視点を変え、本研究がデータ元とした文献におけるハワイ語と、現代ハワイ語との比較を通じて、ハワイ語における文法研究（文法記述）の影響について考える。7章では、本研究で明らかになった点、今後の課題として考慮すべき問題を改めて提示する。その上で、ハワイ語の言語状況に鑑み、統語論の記述が何を重視しどのように進んでいけばよいか、について簡潔に述べる。

⁶ 実際、20世紀後半のハワイ語記述では、現時点で分析が不十分であるという事情からであるが、「従来の用例に従うことが望ましい」という記述が見られた (Elbert and Pukui 1979:95 など)。

2. ハワイ語の概要

本章では、主に先行研究に基づいて、議論に関係する点を中心にハワイ語の情報を概観する。また、2.3節では、ハワイ語の品詞および句の分類について本研究における筆者の立場を明示する。この節については、先行研究の紹介の範囲を越えるものである。

2.1 音韻

一般的なハワイ語の説明においては、ハワイ語においては、「音」の数を 13 とすることがある (Hopkins 1992 など)。しかしこれは表記に使用されるアルファベットの数を示したに過ぎず、実際には母音に関して長短の区別や二重母音を認めることができるため、「音素」は次のようにまとめられる。

母音	短母音	/ i e a o u /
	長母音	/ ī ē ā ō ū /
	二重母音	/ iu ei eu ae ao au ai oi ou āi āu āe āo ēi ōu /
子音		/ p k [ʔ] h m n l w [v~w] /

以上のように、単純母音が長短合わせて 10、二重母音が 15、子音が 8 存在する。

注目すべき点としては、母音の長短の別が挙げられる。短母音との区別が表記されるようになったのは比較的最近のことだが、ミニマルペアも存在する。

(2-1) 'aina	「食事 (する)」	「拒否 (する)」
'āina ¹	「土地、大地」	
(2-2) kau	「置く ; 季節 ; チャント etc.」	
kāu	「あなたの」	

なお、二重母音とは別に、後に言及する音節構造の特徴 (開音節のみからなり、母音のみの音節もある) から母音連続も出現する。ただし、表記上では区別がなく、本研究においても特に書き分けるなどはしていない。

一方、子音については数が少なく、特徴的な事があるとすれば歯音および歯茎音がないことが挙げられる。通時的な観点からすると、子音に関しては、祖語からのハワイ語への変化の過程で t は k に変化し、また k や h など複数の子音が声門閉鎖音に変化したと考えられ、近縁の言語との対応関係も研究が進んでいる。詳細は省くが、特に顕著な対応を示す例を表 1 に挙げる。

¹ 出現頻度の高い語を例示したが、“'aina”で表記される可能性のある単語は他にもあり、Pukui and Elbert (1986) には aina (sexual intercourse), 'aina (meal ; rejected), 'ainā (sore aching; stiffness), 'āina (land, earth), 'a'ina (crackling; an explosive sound) の 5 語が掲載されている。

表1 ポリネシア諸言語の対応の例

	ハワイ語	タヒチ語	マオリ語	トンガ語	サモア語
鳥	manu	manu	manu	manu	manu
カヌー	wa'a	va'a	waka	vaka	va'a
家	hale	fare	whare	fale	fale
空	lani	ra'i	rangi	laŋi	laŋi
男	kāne	tāne	tāne	(taŋata)	tāne
女	wahine	vahine	wahine	fefine	fafine

子音で注意すべきなのは声門閉鎖音である。声門閉鎖音は他の子音と分布に差はなく、語中以外にも現れ、語頭の声門閉鎖音の有無によるミニマルペアもある。しかし、語頭、特に文頭では声門閉鎖音が調音されているかどうか分かり難くなること、また初期の記述ではしばしば声門閉鎖の有無について揺れがあったり、そもそも子音としてみなされないこともあったりと、文献を対象とする研究においては難しい問題を引き起こす。

音節構造は (C) V の開音節が基本だが、表記には反映されないものの、母音音素の間に渡りが現われることもあり、その場合 (子音 /w/ とは別の) 接近音 [w] や [j] が挿入される。本来これは子音ではなく表記にも反映されないが、母音と母音の間に w を入れる表記と入れない表記が並立する例が、この音のあらわれとして特に昔のテキストでは見られる。例えば kauila と kauwila 「カウイラ (原生木の種類)」、uala と uwala 「さつまいも」などがある。なお、y に対応する表記がないためか、[j] の出現は文字記録からは分かりにくい。それでも、i/e と a の間に見られるという記録があり (Elbert and Pukui 1979:13)、iā 「目的格マーカー・接続詞などの i のバリエーション」の短母音と長母音の間で顕著であると記述されている。

次にアクセント規則に関しては Elbert and Pukui (1979:16-21)、Schütz, Kanada and Cook (2005:xvii-xviii, 4-5) などが「アクセント単位」(stress groups (Elbert and Pukui 1979)あるいはmeasure (Schütz, Kanada and Cook 2005)などと称される)を設定して説明している。

アクセントが音声的にどのように実現するかについては、強勢 (stress)、長さ (length)、ピッチ (pitch) を用いて説明ができる (Schütz, Kanada and Cook 2005) 等とされている。これらをまとめると、アクセント規則の概略は以下のようになる。

- ① stress group は多くが 2 音節から成り、それ以外は 1 音節または 3 音節のいずれかである、
- ② 1 つの stress group の中では強勢は 1 つのみであり、stress group の最後から 2 番目の音節または長母音に強勢が置かれる、
- ③ 1 語が複数の stress group から成る場合、最後の stress group の強勢が第一アクセントになる。

語より上のレベルのアクセント、句や文のアクセントについては Elbert and Pukui (1979: 18-21) が説明しており、句や文も語の場合と同じく第一アクセント（および場合によっては第二アクセントも）を持つが、どこに置かれるかの予測はできない。また、Schütz, Kanada and Cook (2005)では意味内容に応じての変化（対比・新情報など）に触れている。

アクセントに関する現時点での結論として、基本的な「単語のアクセント」「句のアクセント」（および文のイントネーション等）は概ね説明できるが、単語・句・文というように、長くなるほど説明が困難なようである。またインタビュー調査が困難であることもあり、十分な研究・記述がされているとはいえないのが現状である。

これはアクセントだけでなく、ハワイ語の音声・音韻研究全体に言えることである。音声録音データは存在するが限定的であること、母語話者のインタビュー調査が困難であるため、検証したい事項についても追加調査を行うことが難しいことから、ハワイ語研究の中でも、音声の研究は盛んではない。ただし、先行研究の記述から、地域差の存在が明らかになっている。特に k と t の交替が有名であるが、その他にも、母音の同化や、l と n のバリエーションが一部の地域で見られることが、Elbert and Pukui (1979) で触れられている。

2.2 語類

ハワイ語の語をもっとも簡潔に分類する方法は、句のヘッドになることのできる「内容語 (base と呼ぶことも)」とヘッドになることのできない「機能語 (marker とも)」とに区分する方法である。例えば Pukui and Elbert (1965:xix-xxvi) では、以下のように語を分類している。

表 2 Pukui and Elbert (1965) における語の分類

Words	Minor Words	Pronouns
		Demonstratives
		Possessives
	Numerals	
	Interjections	
Major words		
Particles	Substantive markers of case	
	Plural markers	
	Verb Makers of aspect, mood and tense	
	Conjunctions	
	Nondetermining particles after words	

Words のうち major words が語彙の大半であるとする一方、対をなす名称の minor words はいわゆるクローズドクラスであり、“root”に当たるような基幹となる要素を含まないものであり、自立できないものが大半である、とされている。ただしその下位分類として示されているのは代名詞・指示詞・所有形であり、特徴としては機能語的なものではあるが、

次に見る *particle* に含まれる *clitic* やテンス・アスペクトマーカ―に比べれば、意味機能的にも自立性が見られるし、音節数も *particle* より多い。そのためか、表記上も分かち書きされる要素である。

一方、*particle* については、単独で発話されることがなく、*clitic* や動詞・存在詞 (*substantives*) のマーカ―などを含むが、接尾辞とは区別されるもの、などと特徴を述べている。詳細は省くが、こちらがいわゆる典型的な機能語であり、また意味機能の点では確かに *minor words* に比べより自立性が低いように感じられる。そして一方で、これらもまた *minor words* の場合と同じく、大半は分かち書きされるものであり、その点では確かに接尾辞と区別される。表記上分かち書きされるかどうかは著者や書かれた年代により多少の揺れはあるが、現存するハワイ語テキスト資料で大きな違いがみられるわけではない。ハワイ語表記法を確立するなかで分かち書きをするか否かをどう決定したかの基準や経緯について、明確な記述は管見の限りないため推測になるが、接尾辞か *particle* かは音声上の特徴によって区別ができた可能性がある。

しかし、Elbert and Pukui(1979:43)では、*lexical item* の分類を以下のようにまとめている。

表3 Elbert and Pukui (1979) における *lexical item* の分類

Nouns	
Verbs	
Noun-verbs	
Substitutes	Pronouns
	Demonstratives
	Possessives
	Interrogatives
Prepositions	
Conjunctions	
Numerals	
Interjections	
Idioms ²	

これらのうち、オープンクラスであり内容語に相当するのが上から3つ、残りはクローズドクラスである。名詞と動詞のほかに、“*verbs, commonly used as nouns without the nominalizer ‘ana’*” とされる *noun-verb* をおく点が Elbert and Pukui (1979) の特徴である。

より新しい見解として、Schütz, Kanada and Cook (2005) では“*part of speech*”の項目(p.155)で表4のようなアウトラインを提示している。はじめに *Base* と *Marker* の2つに区分している点では、Elbert and Pukui (1965) の方に近い。また、動詞をとるトピックの数で分類している点も特徴的であり、動作動詞と状態動詞を並行的に説明することができる点

² この *idiom* は、“*words not otherwise classifiable*” (Elbert and Pukui 1979:43) と定義されるものであり、一般的な意味でのイディオムとは指すものが異なる。

で体系性が高くなっている。ただし、固有名詞を有生性で分類することがどの場合に有用となるか、conjunction がどのような点で classifying なのかなど、分かりにくい点も残る。

表 4 Schütz, Kanada and Cook (2005) における part of speech

Bases	Nouns	common	
		proper	animate
			inanimate
	locative	place names ³	
	Verbs	active	one-topic
			two-topic
		stative	one-topic
			two-topic
		locative	
		existential	
Markers	personal	pronouns	
		possessives	
		demonstratives	
	classifying	articles	
		directional	
		prepositions	
		conjunctions	

2.3 本研究で用いる用語の定義

本節では、前節までに紹介した先行研究を踏まえ、本研究の議論において使用する用語のうち、注記が必要であると思われるものや、先行研究とは異なる意図をもって使用するものについて、筆者がどのような意図で使用しているかを明らかにする。

2.3.1 本研究における品詞分類：「動詞」と「名詞」

本研究における品詞分類は以下のようにまとめられる。

³ Part of speech の項 (Schütz, Kanada and Cook 2005: 155) では表 4 のようになっているが、place name の項 (Schütz, Kanada and Cook 2005:163) では“inanimate proper noun”と書かれている。

表 5 本研究における品詞分類

レキシコンのレベルで語彙に設定されているといえるもの		統語的なラベル
語	内容語	
	機能語	動詞
		名詞
		名詞句でのみ現れるもの
動詞句でのみ現れるもの	テンス・アスペクト マーカー ムードマーカー	
それ以外のもの	代名詞 方向詞 受動マーカー 強意詞 接続詞 間投詞	

以下でそれぞれについて説明していく。

まず内容語についてだが、いずれの先行研究でも、内容語の下位分類については複雑さが見られる。

Elbert and Pukui (1979) によれば、内容語の大半は動詞・名詞の 2 種で成り立っている。この 2 分法では、他の言語で一般的な品詞（形容詞・副詞・助動詞など）は動詞に含まれている。形容詞・副詞については記述上わけてもよいが、意味的な関連性を持つ動詞としての用法を併せ持つことが多いため、本研究でも、特に区別が必要な場合にのみ「形容詞的用法」等と記述するに留める。従って、問題は「動詞」と「名詞」の区別に絞られる。

文や句のレベルで見た場合、句に含まれている内容語が動詞・名詞のいずれであるかは、周囲の環境から判断することができる。一方、語単独の場合、すなわち辞書・レキシコンのレベルでは、動詞・名詞のいずれであるか、あるいはいずれでもあるか、について、全ての語についてそうした判断をするのは困難であると思われる。

また、しばしば指摘される点だが、Elbert and Pukui (1979) が名詞や動詞とは別に noun-verb を設定していることに現れているように、動詞用法も名詞用法も有する語が、ハワイ語の内容語に多いのは事実である。一方で、動詞として使われることがほとんどである語、名詞として使われることがほとんどである語も、やはりそれぞれ存在する。

こうしたことを考えれば、むしろハワイ語の先行研究における語の分類法では、Pukui and Elbert (1965) がもっとも言語事実に即している。内容語（彼らの言う major words）に対してそれより先の分類を敢えて明示せず、機能語 (particle) の定義を行う段階で動詞・名詞などの語を使用する方法である。

以上を踏まえ、本研究でも「動詞」「名詞」という用語を必要に応じて使用することとするが、これは「統語的なラベル」であり、各語彙素が個別に有する特徴ではない。

機能語はいずれも語ではあるが、機能語だけで文や句を作ることは、非常に特殊な場合（イディオムの使用）を除けばできないため、自立性が低いと考えられる。すべて closed class だが、意味の点で内容語に近いものもあれば、文法機能の表示だけを行うものもある。こうした機能語の間に見られる相違は、祖語からハワイ語に至るまでのいずれかの段階で、機能語が内容語から文法化によって生まれた結果である。ただし、今回対象とするハワイ語の共時態においては、基本的に内容語から明確に分けられると考えられる。

2.3.2 機能語の3分類

本論の議論において重要となる機能語については、分布の特徴から以下の3つに分類することができる。本論では考える。

①名詞句にのみ現われるもの

前置詞

‘o (主格)
 i/iā (対格・場所など)
 ma (場所「〜で」「〜へ」)
 ā (「〜まで」)
 a (所有「〜の」)
 o (所有「〜の」)
 me (「〜と」)
 mai (「〜から」)
 e (「〜によって」)
 ē (呼格)
 na (所有「〜の」)
 no (所有「〜の」)
 pē (「〜のような」)

冠詞

[Det Cont]

ka/ke (定冠詞)
 he (不定冠詞的な使われ方をする要素)
 nā (定冠詞・複数)

複数(plural)マーカー	[Cont pl] [pl Cont]	mā (人物に使用「～たち」) mau nā ⁴
‘ana	[Cont Ana]	
所有 ∅型	[Cont Poss]	o/a NP (前置詞のものと同じ。NPは所有者) o‘u/a‘u (1sg), ou/au (2sg) など代名詞との融合形
k-型	[Poss Cont]	ko/ka NP (NPは所有者) ko‘u/ka‘u (1sg), kou/kau (2sg) など代名詞との融合形
n型	[Poss Cont]	no/na NP (NPは所有者) no‘u/na‘u (1sg), nou/nau (2sg) など代名詞との融合形 *∅型・n型の一部は前置詞とも考えられるため、上の「前置詞」欄に no / na, o / a が含まれる出現位置はさまざまである
数詞		
位置名詞	[Prep Loc]	loko (「～の中」) waho (「～その外」) lalo (「～の下」) luna (「～の上」) waena (「～の間」) mua (「～の前」) hope (「～の後」) kai (「(～の) 海側」) uka (「(～の) 山側・内陸側」)

②動詞句にのみ現われるもの

テンス・アスペクトマーカー [TA Cont] ua (Perf), e (Imperf), i (Perf), ke (Inf/ Imperf)⁵

Eg. ‘a‘ole **e** ‘ai **ana**
Neg TA EAT Part 「食べていない」

ムードマーカー [Mood Cont] e (Imp),
mai (Neg Imp)

⁴ nā は冠詞でもあり、後続する内容語 (名詞) が複数であることを示す。

⁵ これらのマーカーは、それ単独で使われるほか、文頭以外 (否定辞の後ろ、または関係節構造を作る場合) に現れるときは、nei, ana, ala, lā (いわゆる後置代名詞) のいずれかを「動詞」の後に伴い、それら全体でテンス・アスペクトを表示する形をとることがある。詳しくは表 13 を参照。

③それ以外のもの（両方の句で現れるもの・句に含まれず単独で現れるもの）

両方の句で現れるもの：代名詞、方向詞、‘ia（受身マーカ）

単独で現れるもの：強意詞、接続詞、間投詞

機能語では、レキシコンのレベルでの各語の性質と、統語的なラベルとを分けて考える必要はない。

注記しておくべきと思われるものは、代名詞と位置名詞、強意詞である。

代名詞には音形の点でもふるまいの点でも様々な種類があり、全ての代名詞が同じような分布を示すわけではない。また、特に人称代名詞の分布が内容語（名詞）と共通している点が多いことから、内容語に含める立場もありうるが、本研究では代名詞が **closed class** であり、普通名詞よりも文中でより前に来る傾向があるという特殊性や、一部前置詞との融合形を有していることなども考え併せ、機能語に含めることとした。

位置名詞は、主に前置詞と組み合わせることにより、「～の前・後・中・外・上」などの位置関係を表す際に使用される一群の語である。名詞句の中核部となれるなど、名前の通り名詞的なふるまいを見せ、固有名詞などと近いことから、内容語に含める可能性も等しくあり得るが、やはり **closed class** であることや、決定詞を必要としないことを考え、本研究では機能語の一類とした。

強意詞 (**intensifier**、強調辞とも) はその振る舞いがあまり明らかでない要素である。文字通り、典型的には直前の要素を文中で意味的に際立たせる役割を持つといえ、後置代名詞の後に置かれ、強意詞同士が共起する場合の語順も決まっているという (Elbert and Pukui 1979: 100-104)。ただし何をもって強意詞とするか、「直前の要素」は句の主要部のみを指すのか、あるいは句などもう少し広い単位全体を含むのかなど不明な点も多い。今回は考察対象としないが、さらなる考察の余地がある類である。

2.3.3 「句」の名称と性質について

本研究では、動詞句・名詞句・‘ana 句の3つをハワイ語に認められる「句」とする。以下で、それぞれについて説明する。

動詞句は、典型的には文において述語（述部）として機能するものである。テンス・アスペクト・ムードを示すマーカが句に含まれていれば、その句は動詞句であると判断することができる。

名詞句は文において、主に主語（主部）や述語（述部）・目的語として機能するものである。決定詞や複数のマーカなどが句に含まれていれば、その句は名詞句であると判断することができる。

名詞句に含めるかどうか、判断が分かれる要素としては前置詞がある。用例を見る限り、名詞句が主語・述語のいずれとして使用されるとしても、決定詞の前に何らかの機能語（仮に小辞とする）を伴うことが多い。先行研究でもしばしば使用される用語である「小辞」が、具体的に前置詞なのかその他のマーカなのかは、研究によりその定義には多少揺れ

がある。ただし位置的に決定詞より前にくることが、また決定詞の前に来る小辞としてまとめられるものは、基本的に複数個現れることができないということを考えると、前置詞と小辞が一つのカテゴリをなしていると考えて不都合はない。よって本論では、前置詞と小辞とを区別せずに、すべて「前置詞」と見なすことにする。そして、この前置詞は名詞句の内容語の前にのみ現れることから、名詞句の構成要素と考える。

以上より、本研究の議論において基本的な単位は、動詞句と名詞句の 2 つとする。ただし、本研究では名詞句の中に、さらに「‘ana 句」という下位分類を設けることにする。

強調しておくが、‘ana 句は名詞句・動詞句とはレベルが異なるカテゴリであり、その句全体が果たす統語的機能を指す名称ではなく、「内部に機能語の‘ana を含む句」であることを指している。

2.3.4 「句の中核部」

本節では本研究の題目にも含まれる、「句の中核部」⁶という考えについて明確にする。

句の中核が何であるかという問題に答えるには、句の統語的性質を決めているのが、句中のどの要素であるかに注目する方法がある。

前節で触れた通り、基本的にはある句が動詞句・名詞句のいずれとして働いているのかは機能語から判断される。この観点からは、句の統語的性質を決めている要素は機能語であり、機能語が句の中核であるといえる。またこの場合、いわゆる名詞句を決定詞句、いわゆる動詞句を TA (テンス・アスペクト) 句などと呼ぶこともできる。

また、句に必要な要素が何であるかに着目することもできる。

ごく一部の例外⁷を除いて、機能語は単独で句を形成することはできない。それらが付加される先、ぶらさがることのできる要素として、句は最低 1 つの内容語を要求する。他方、名詞は冠詞や所有形など何らかの前部要素を必要とするものの、それ以外の機能語は必須ではなく、また動詞については完全に内容語単独で句を形成することができる。このことから、内容語は句にとって必要不可欠な要素であり、よって内容語が句の中核である、という主張ができる。

よって、以下のようにまとめられる。そもそもの前提が異なることによる違いであるため、統一されていれば本質的にはどちらをとっても構わないものといえる。

①中核＝句の統語的性質を決定するもの ならば 中核＝機能語

②中核＝句の必要不可欠な要素 ならば 中核＝内容語

⁶ 統語論においては、句の核となる要素に言及する際、一般には「主要部」という語が用いられる。しかし本研究においては、そもそも何が句の中心的な要素なのかを、ひとまず範囲をハワイ語に限定して考えるところからスタートし、Elbert and Pukui (1979: 41) の中核要素という区分を踏まえて「中核 (部)」という用語を使用した。本研究の立場からは、ハワイ語の句の主要部は内容語にあたりと考えられるが、詳しい議論は今後の課題とする。

⁷ 例えば方向詞 mai を単独で使用し、「来い！おいで！」のような意味で命令文のように使用することができるなど、定型的な表現に限られる。

本論文では第二の立場、すなわち句の必要不可欠な要素を中核と考える。ハワイ語研究がこれまで慣例として名詞句・動詞句のような名称を使用してきたことに加え、機能語だけでは句を形成できないことから、「中核」という用語を適用するのは内容語の方が適していると考えられることを重視するためである。

「中核」に関連する先行研究の記述として、Elbert and Pukui (1979: 41) では句構造を「前置要素 (preposed elements)」「中核要素 (nuclear elements)」「後置要素 (postposed elements)」の3つに分けて説明している。このうち本研究における意味での「中核」は nuclear elements に含まれている。もっとも、Elbert and Pukui (1979) は名詞・動詞以外に代名詞・指示詞・所有形式・疑問形式も nuclear のひとつと考えている。また、名詞句における複数接辞や呼格、その他の複合要素・修飾語等までを全てまとめて「中核要素」としており、こうした「中核要素」の中でどれが特に中核である、とは明確には述べていない。

この定義に比べると、本論における「中核」は nuclear に対応しつつも、Elbert and Pukui (1979) が nuclear と見なすもののうち、名詞・動詞の2つのみの中核であるという点では、より狭い範囲にのみ適用される用語であるといえる。

なお、句の統語的性質を決定する役割は非常に重要なものであり、機能語が「周辺的」なものである、とみなすことも適切ではない点に注意すべきである。特に、名詞句では必須の要素である決定詞、動詞句では TA 詞が、それひとつで句が名詞句であるか動詞句であるかを定めることができる。本研究でいう「中核」は、あくまで句にとって必要不可欠な要素であることのみを含意することを強調しておきたい。

以上を反映させ、本研究では名詞句・動詞句またはその両方の中で使用される機能語を、「内容語とともに（動詞・名詞）句の中核部を形成するもの（＝句の構造を作り上げる要素）」とみる。単独で現れる closed class の接続詞・強意詞・間投詞などとの差別化も、これにより提示できるものとする。

2.4 主な統語的特徴

2.4.1 動詞句構造

動詞句は文において述語として働く。動詞句の中核として働くものを、Elbert and Pukui (1979) では以下のように分類している。

自動詞

他動詞 2 種 deliberate (voluntary): hana 「働く、～する」、inu 「飲む」、nānā 「見る」

spontaneous (involuntary): makemake 「望む、～したい」、

no'ono'o 「考える、思う」、'ike 「見る」

状態動詞

Loa'a 状態動詞：項の取り方が特殊な一群の動詞をさす。

Schütz, Kanada and Cook (2005) は次のように全く異なる分類法をとっている。

行為的 (active): 項が1つのもの、項が2つのもの
 状态的 (stative): 項が1つのもの、項が2つのもの
 場所的 (locative), 存在的 (existential)

さらに現代語辞典の Māmaka kaiao (Kōmike Hua‘ōlelo, Hale Kuamo‘o, ‘Aha Pūnana Leo 2003) では、用語のハワイ語化も含め次のように分類する。

hamani (transitive verb)
 hehele (intransitive verb)
 ‘a‘ano (stative verb)

ただし、この分類に関しては“following the definition of the word in English”とあるためハワイ語独自の分類というよりは英語との対応関係に近い見方をしているといえる。

これらの先行研究によれば、動詞句中に現れ得る様々な要素の並びは以下のようになる。
 なお、以下の表6から表8は、塩谷 (1999: 53, 74) による表、および Elbert and Pukui (1979) 5章~7章の記述に基づき、筆者が項目数や名称を中心に編集を行ったものである。

表6 動詞句構造

否定辞	TA 詞	内 容 語	結 合 目 的 語	修 飾 語	受 身 マ ー カー	方 向 詞	後 置 代 名 詞	強 意 詞	主 語	直 接 目 的 語	間 接 目 的 語	そ の 他
∅	∅	※ ²	∅	∅	∅	∅	∅	∅		∅	∅	∅
‘a‘ole※ ¹	ua		※ ²	※ ³	‘ia	aku	ana	nō		i NP	i NP	※ ⁴
	e					mai	nei	nō ho‘i				
	ke					a‘e	ala	など				
	i					iho	ai					
mai							lā					

※1 否定辞の直後に、主語に当たる人称代名詞や強意詞がくることがある。

※2 さまざまな語が入る。

※3 この箇所には、同カテゴリ内の要素であれば、同時に複数個出現可能。

※4 時・場所を表す句など。

以上の表のうち最低限必要と考えられるのは中核となる内容語で、それ以外の出現は任意である。

この表では動詞句を捉える際に関連深い要素である主語・直接目的語・間接目的語や、時・場所を表す句の来る位置を示しているが、これらは前置詞が表出した形の名詞句により表されるものであり、動詞句には含まれないものとして、破線で示している。

なお、内容語を1スロットとしたが、この前後の位置には、厳密に言えば接辞としてさ

らに細かく分析され得るものが来ることがある。Elbert and Pukui (1979) でいう Causative の接頭辞 ho'o-、名詞化の接尾辞-na がそれにあたる、ただし、語彙化しているものも少なくなく、本論文では注記の無い限り、接辞を語基から独立した要素とせず、接辞が付加された形を1語とみなして内容語の位置に含めて扱うものとする。

結合目的語とは、動詞の直後に置かれ、主に目的語に対応するもの（動作の対象）を表すもので、一種の複合動詞を作るものである。厳密には目的語以外のものもこの位置に来ることがあり、内容語を修飾する修飾語の一種として考えてもよいが、対応する「目的語が独立して現れた場合」の文が想定できるため、やや特殊な例ではある。

(2-3) 'a'ole i inu pia
 Neg TA DRINK BEER 「ビールを飲まない」

Cf. 'a'ole i inu i ka pia
 Neg TA DRINK Obj Det BEER 「(その) ビールを飲まない」

2.4.2 名詞句構造

名詞句の核になる要素のことについて、Elbert and Pukui (1979) では、さまざまな指示物を持つ語があること（人・場所・モノの名前）を示しているが、Noun の下位分類を特別示してはいない。

Schütz, Kanada and Cook (2005) では3つに分類する。

Common

Proper (生物/無生物)

Locative

現代語辞典 Māmaka kaiao (Kōmike Hua'ōlelo, Hale Kuamo'o, 'Aha Pūnana Leo 2003) では、動詞と同じく用語をハワイ語化しつつ、2分類している。

kikino (common noun)

i'oa (proper noun)

名詞句の構造もまた、動詞句の場合と同じく語順が明確に決まっており、同じスロットにある要素同士は重複して実現することはない。また、実現が義務的なのは決定詞と内容語だけで、それ以外の出現は任意である。よって最小の場合は「決定詞+内容語」であり、このパターンがよく見られる一方、全てのスロットの要素が同時に実現することは稀である。具体的な構造は以下の通りである。

表7 名詞句構造

前置詞	決定詞	複数	内容語 ※1	修飾 語	受身	方向詞	代名詞	強意詞 ・修飾 名詞句
否定辞								
(∅)	(∅)	∅		∅	∅	∅	∅	∅
‘o	ka/ke	mau		※ ²	‘ia	aku	nei	nō
i/iā	nā					mai	ala	nō ho‘i
ma	kēia					a‘e	lā	など
ā	kēlā					iho		※ ²
a	kēnā							
o	nei							
me	ua							
mai	ia							
e	ko NP (Poss)							
ē	ka NP (Poss)							
na	he							
no	kekahi ⁸							
pe								
‘a‘ohe								

※1 基本的には内容語が来るが、代名詞の一部と、位置名詞が来ることもある。

ただしその場合、他のスロットの要素の出現に制約があり、決定詞は共起しない。

※2 の箇所では、同カテゴリ内の要素であれば、同時に複数個出現可能である。また、結合目的語に当たるものが来る可能性もある。

なお、いわゆる行為名詞が内容語の位置に来た場合、動作主を所有形で、目的語を後続する名詞句（前置詞 i によりマークされる）で示すことがある。また、受身マーカーが置かれるのも行為名詞の場合であり、おおむね「～されること」のような意味で使用される。

また、一般に動詞句に似た内部構造を持ちながら、全体としては名詞句として働くものとして‘ana 句がある。これについては5章での考察対象であるため詳細は省くが、構造を以下に示す。

⁸ 冠詞の ka/ke, 代名詞、所有形の一部や kekahi など、この決定詞のカテゴリの中に含まれるもののうち定性を有していて k-の形を持つ語のことを総称して k-words と呼ぶことがある(Elbert and Pukui 1979:153)

表 8 ‘ana を含む句の構造

前置詞	決定詞	複数	内容語	結合目的語	修飾語	受身マーカー	‘ana	方向詞	代名詞	強意詞・修飾名詞句	主語	直接目的語	間接目的語	その他
否定辞														
(∅)	(∅)	∅	※ ¹	∅	∅	∅	∅	∅	∅	∅	∅	∅	∅	∅
‘o	ka/ke	mau	※ ¹	※ ¹	※ ²	‘ia	‘ana	aku	ana	nō,	o NP	i NP	i NP	※ ³
i/iā	nā							mai	nei	nō				
ma	kēia							a‘e	ala	ho‘i				
ā	kēlā							iho		など				
a	kēnā									※ ²				
o	nei													
me	ua													
mai	ia													
e	ko NP													
ē	(Poss)													
na	ka NP													
no	(Poss)													
pe	he													
	kekahi													
‘a‘ohe														

※1 さまざま語が現れる。

※2 この箇所では、同カテゴリ内の要素であれば、同時に複数個出現可能。

※3 時・場所を表す句など。

‘ana は一般に名詞化辞とされ、句の中のどこに来るかを記述する際に動詞句中に置かれるとされることもあるが、実際には‘ana が含まれる場合は決定詞と共起し、‘ana を含む句は全体としては名詞句として機能している。

ただし、動作主は動詞句の場合と異なり、決定詞に含まれる所有形（いわゆる k-タイプ所有形）、または‘ana 句のあとに来る別の名詞句（所有形の ∅ 形で現れる）のいずれかにより示される。これは名詞句の場合も同じだが、名詞句においては、どのような内容語が句の核になっても動作主や被動者を付加することができるわけではなく、行為名詞句に限られるため、表 8 の破線部のような、目的語名詞句が後続する形を典型的な構造としては提示できない。

一方、‘ana 句の場合は基本的に行為に関係するものになるため、自動詞でない限り目的語名詞句を後続させることができる。よって、ana 句の構造を示す際には、目的語名詞句の位

置を破線で示した。この破線は、句の構成要素とは言えないが、核となる内容語と意味的に関係が深い要素であり、置かれる位置もおおむね決まっているものであることを示している。

‘ana の機能などの具体的な議論は 5 章で行う。ここでは、‘ana を含む句は、目的語名詞句との共起などの点で動詞句に近い構造をもつ一方、統語的には名詞句に相当するため、句の内部構造と、句全体としての統語的振る舞いとの間に不一致が見られるものであると指摘しておくに留める。

2.4.3 動詞述語文

ハワイ語の文は、述語が動詞句であるか、名詞句であるかにより 2 種に大別される。

VSO を基本語順とするハワイ語では、動詞が述語になる場合 2.4.1 で挙げた構造の動詞句が文頭に来る。その後任意で主語が続き、さらに目的語が後続するが、主語は文脈により判断できる場合には省略可能であることが多く、また目的語についても同じく文脈情報から判断できる場合は省略可能である。

以下のいくつか用例を示す。なお、動詞句を[]で示す。

(2-4) [Ola nō] wau me ku‘u makuahine,...

LIVE Int 1sg Prep Poss.1sg MOTHER

「私は私の母と生きる…」 (Elbert 1959:9)

(2-5) [ho‘i a‘e la] nā kūpuna o Kawelo

RETURN Dir Dem Det GRANDPARENT Poss.O K.

i Wailua [e noho ai,] ...

Prep W. TA LIVE Dem

「カヴェロの祖父母はワイルアに戻ってそこに（孫を連れて）住んだ」

(Elbert 1959:33)

(2-6) [nīnau mau aku la] ‘o Kawelo iā Kamalama

ASK EVER Dir Dem Sub K. Obj K.

「カヴェロは静かにカマラマに尋ねた」 (Elbert 1959:75)

統語的にもっとも単純な文は動詞一語のみで成り立ち、複雑なものに関しては表 6~8 で見たような語順で、同スロット内で重複しない範囲で諸要素が同時に数多く出現することになる。

2.4.4 名詞述語文

ハワイ語は名詞述語文を作ることができる。この場合でも述語として考えられる名詞句は基本的に動詞句と同じく文頭にくる。

典型的な名詞述語文にはコピュラ動詞に相当するものはない。簡略化すると、NP₁とNP₂が順に置かれ、NP1=NP2の関係を示すもの(2-7)と、NP2がNP1の一種である、というような文(2-8)とに大別される。

Hopkins(1992)では、前者を equational、後者を class inclusion という2つのラベルで説明している。呼称はどうか、①‘o NP1で始まる文と、② he NP1で始まる文の2種類があり、意味に違いがあるのは確かであり、別の構文として捉えるのがよい。

いわゆる名詞述語文にはそのほか(2-9)に示したような所有文など、コピュラ文に相当するもの以外のものもある。

以下の例文では[]内が名詞句である。

(2-7) [‘o ke kumu ‘ōlelo Hawai‘i] [kēia kānaka].

Sub Det TEACHER LANGUAGE H. Dem MAN

「この男性が(例の)ハワイ語の先生だ⁹」 (Hopkins 1992: 15)

(2-8) [he keiki ikaika loa] [‘o Kawelo] [ma ka ai ‘ana], ...

Det CHILD STRONG VERY Sub K. Prep Det EAT Ana

「カヴェロは良く食べる子供だった (lit.カヴェロは食べることに於いて強力な子だった)」

(Elbert 1959: 33)

(2-9) [He hana hou] [kāna] i laila.

Det JOB NEW Poss.A.3sg Prep THERE

「彼はそこで新しい仕事がある」 (Hopkins 1992: 98)

2.4.5 存在文

動詞述語文・名詞述語文とは異なるものとして、「存在文」を挙げることができる。

(2-10) Aia ka puke ma ka pākaukau

THERE’S Det BOOK Prep Det TABLE

「テーブルの上に本がある」 (Hopkins 1992:75)

(2-11) Eia ia‘u ke kī o ke ka‘a!

HERE’S Prep+1sg Det KEY Poss.O Det CAR

「ここに車のカギがあるよ！」 (Hopkins 1992: 214)

⁹ このタイプの場合、基本的には、特定の誰か・クラス等にとっての先生であることが想定され、「この男性」の属性を説明する場合であれば He NP 文が使用できると考えられる。

基本的に aia が「～がある」というような「存在」を示し、主語は存在するモノをさす名詞句である。その後ろに場所が続く。eia は特に存在物が話者の近くにある時に使用される形式である。

aia 及び eia を、Pukui and Elbert (1986) は idiom とし、Schütz, Kanada and Cook (2005) は動詞の特殊な分類としている。本研究では典型的な動詞句構造を取らないことから、これらの語が動詞であるかどうか判断はせず、動詞述語文・名詞述語文とは別のタイプの文として、存在文があることを示すにとどめる。

2.5 ハワイ語の示す方言差・年代差

2.1 で音韻について説明する際に触れたが、Elbert and Pukui (1979:23-27) によれば、主に音についてバリエーションがあるとされている。しかし、Schütz, Kanada and Cook (2005:5) も述べているが、基本的には年月を経るにつれ、ハワイ語のバリエーションはかなり減じており、残る資料も少なく、音のバリエーションに関する研究はあまり行われていない。

記述や話者が現存することから、現在知られている標準変種のハワイ語とは異なる方言変種としてよく言及されているのはニイハウ方言である。面積は狭く人口も少なく、そして文化的特異性があるなど、状況が他の島々とは大きく異なる。このような事情が、ニイハウ方言の特殊性を際立たせているが、そのことは他の地域にバリエーションがない・過去にもなかった、ということを示唆しているわけではない。

音における差異は、現在ではチャントなどを島ごとに比較することである程度わかる面もあるかもしれないが、元々どの程度の差があったかに関して直接知る方法はなく、不明なままの点が多い。

語彙における差異も多少ある、として Elbert and Pukui (1979) は事例を紹介しているが、挙げられている数は多くない。

ハワイは元々文字文化を持たない口承文化の社会であり、言語的特徴の、話者の年齢による差や使用されていた時代による差を導き出すには現時点で使用できる資料の幅では狭い。

また、ハワイでは統一王朝成立 (1795) から、ワイキキ(1年間)・ヒロ(7年間)・ホノルル(9年間)・カイルアコナ(8年間)・ラハイナ(25年間)・ホノルル(48年間)、と頻繁に王都が移動している。各地でのハワイ語は多少なり違いがあったことが考えられるが、ラハイナやホノルル以外の初期の王都が短期間で移動していることもあり、どの地域のハワイ語をもって標準変種としたのかは判然としない。

本論文では扱うハワイ語の範囲は、基本的に 19～20 世紀を中心に、筆記言語に採用された変種、いわば標準ハワイ語である。筆記文化をもたらした欧米諸国の宣教師などの記述者たちや王朝の為政者たちが、どの地域の変種を標準的とみなして採用したか、また文体による違いがあったかなどの詳細は現時点ではわからない点が多いことを注記しておく。

本研究では、話者の年齢による差・話されていた時代による差については考えず、ごく一部、20 世紀末～21 世紀の「現代ハワイ語」と呼ばれるものを除き、すべての文献をひとつの同じ共時態に属するものとしてとして扱う。

3 先行研究

3.1 包括的研究

いわゆる「レファレンスグラマー」に当たるようなものでは、初期のものとして Chamisso (1837), Andrews (1854), Alexander (1864) などがある。Chamisso (1837) は古い年代のハワイ語記述には珍しく宣教師ではない筆者により書かれたものであり、かつ 79 ページとまとまった分量を持つものとして、ハワイ語文法書の出発点とみなされることもある著作である。Andrews (1854) は、英語の文法知識を前提とするところはあるが、それまでのハワイ語文法記述の試みでしばしば見られたような、ラテン語のパラダイムを適用するやり方とは異なるアプローチにより書かれ、さらに翻訳聖書に偏らない資料を取り入れた。Alexander (1864) は宣教師の一家に生まれ、幼少期からハワイ語を聴いて育った背景をもつ筆者が、ハワイおよび他のポリネシア言語の先行研究の恩恵を受けつつ書いたものである。

これらの研究は書かれた時期が早く、したがってハワイ語が日常に使用されていた時期に書かれたものであるという点で非常に重要な文献であるが、現代言語学的な立場からハワイ語の音韻・文法が網羅的に扱われ、また現在のハワイ語学の基礎となっているのは、Elbert and Pukui (1979) である。

3.1.1 Elbert and Pukui (1979)

ハワイ語の言語学的な研究として代表的かつ包括的といえるほど広い現象を扱っているものとしてはほぼ唯一のものであり、ハワイ語に言及する際には必ずと言っていいほど引用される研究である。元々は同著者による辞書 (3.2.2 参照) の第 1～第 3 版に収録されていた記述を、独立した文法書に発展させた研究である。

Elbert and Pukui (1979) の特筆すべき点が多いが、特に

- ① 現代言語学の知見に基づき¹、ハワイ語がどのような言語であるかを網羅的に記述しようとしていること
- ② ハワイ語話者のもとで育ち、ハワイ語およびハワイ文化に造詣が深く、多くの著作や記録を残している著名な人物である Mary Kawena Pukui が著者の一人であり、母語としてハワイ語を知る人々のコメントが随所に記載されていること

があげられる。前者は上で挙げたそれ以前の研究とこの研究とを画するものであり、後者については特に母語話者が激減した今となつては非常に意義深いものである。

Elbert and Pukui (1979) では、音 (音素・ストレス・ピッチ・方言変種による差異など)

¹ Elbert は Preface において、(出版当時の) 最新の言語学の術語を使用していない、と断っている。恐らくこれは主に生成文法理論のことを指しているのではないかと思われる。Elbert は 20 世紀初頭生まれで、欧・米の高等教育機関で学位を取得し、長年ハワイ大学に在籍してポリネシアの言語研究に携わってきた研究者であり、構造主義言語学の基礎的な考え方が背景としてあるものと考えられる。ただし、Elbert がこの研究で試みているのは、特に文法記述に関して、特定の理論に基づくというより、ハワイ語のテキスト・日常会話・話者 Pukui のハワイ語知識を対象とする、データ指向の (記述的) 分析である。

から、動詞（下位分類・動詞と共に起するマーカー・動詞接辞・句末に置かれる諸要素）、名詞（代名詞・複合による語形成・qualifier）、前置詞（各種前置詞の意味・用法）、決定詞、数詞、接続詞、と品詞ごとに詳細な記述を進めている。

一方で、「文」については序盤で定義しているが、それ以降で触れられるのは、巻末の数ページでやや複雑な構文の分析例を提示するに留まる。そのため、全体を通して、句より大きい構造についての詳細は述べられていない。

Elbert and Pukui (1979) は優れた研究であるが、不十分な点もちろん存在する。特に、

- ① 細かい記述の一方で全体が見えにくい
- ② 事実の列挙に近い箇所が少なからずあり、分析的な記述としては物足りない

などが挙げられる。もっとも、いずれもこの研究が現代言語学的なハワイ語研究の出発点であることを考えれば無理からぬことであるという面がある。また、第二点については筆者が殆どの場合において自覚的であり、さらなる分析を必要とする、と記述している。こうした事情から、不十分さがあるとしても、Elbert and Pukui (1979) 自体の重要性は損なわれない。

それでも、ハワイ語文法研究・ハワイ語教育とも、今後もこの研究を基盤として進められることになると考えられる現状では、体系性を持つものや、より新しい知見・分析を取り入れたレファレンスグラマーが望まれている状況である。

3.1.2 Schütz, Kanada and Cook (2005)

言語学一般の進展にも関わらず、ハワイ語レファレンスグラマーは前節で触れた Elbert and Pukui (1979) の大幅な改訂や後発する他の研究がなく、長らく内容面の更新が行われていない。

この間に発表された各個別研究の知見を活かし、簡潔にはあるが Elbert and Pukui (1979) 以降の進展を反映したものが Schütz, Kanada and Cook (2005) である。この研究の著者の一人である Kenneth William Cook は近年ハワイ語統語論の研究を数多く発表している研究者である。

この研究の形式は、章ごとに品詞や統語の各テーマを論じるいわゆる「文法書」の形式ではなく、“verb”, “k-possessive” などの文法事項や “nei”, “apōpō” などの具体的語彙項目の意味・用法を一括して見出し語とし、それらについての記述がアルファベット順に並べられている「小辞典」形式のものである。

一つずつの項目は記述がごく簡潔になされており、これ自体でレファレンスグラマーとして十分であるとは言いがたいが、項目によっては、Elbert and Pukui (1979) 時点で分析・記述が不十分であった箇所について、より詳しい見解や新しい分析を述べているものもある。そのため、現時点でのハワイ語研究に際しては参照すべきものといえる。

3.1.3 Hawkins (1979)

タイトルが *Hawaiian sentence structures* となっていることからわかる通り、ハワイ語の文の構造についての研究であり、ハワイ語に関する事象を全般的に記述する目的のものではない。ただし、ハワイ語の文がどのような構造であるかは、Elbert and Pukui (1979) ではそれほど扱われなかった点であり、同時期に発表された Elbert and Pukui (1979) を補うといえる。その点に加え、ある程度まとまった分量と内容を持ち、かつ現代言語学の観点から記述されている研究としてここで挙げた。

この研究では Fillmore (1968)² を理論的ベースとしているところに特徴があり、当時の理論に基づいた解釈を要する部分もあり、基本的な句構造を冒頭で挙げている。

S → MOD^PROP

PROP → PRED^ARG

MOD → (t/a) (Q)ⁿ (CP)ⁿ n: more than one possible

PRED → VP

CP

CP: a cover symbol for AP/IP/OP/SoP/GP/LP/BP/VP

ARG → CP

CP → PREP NP

S

NP → Det^N (PN) (Mod)

VP → V (PN)

こうした理論的背景を持ちつつ、ケースマーカーとしての前置詞、動詞の下位分類、動詞文の構造（接辞 *ho'o*-の役割）、非動詞（主に名詞）文の構造、また複雑な構造として、特に埋め込み構造・主題化 (topicalisation)・疑問文等の構造分析、などを取り上げている。

3.2 その他ハワイ語に関する研究

3.2.1 Schütz (1994)

ハワイ語の言語史および言語研究史として代表的なものである。

西洋との接触以降、記録に残っている様々な文献や、正書法、出版関係の事項まで取り扱っており、ハワイ語がどのように西洋と接触し、どのような経緯・形式で記述され、さらにどのような時代的・社会的背景において出版されたかを詳細に述べた研究である。

ハワイ語の記述・研究の流れを理解するには非常に有用である。

² 'The Case for Case'. In : E. Bach and R. T. Harms, eds. *Universals in Linguistic Theory*, 1-88. New York: Holt, Rinehart and Winston.

3.2.2 Pukui and Elbert (1986)

ハワイ語の辞書としては最も規模の大きいものである。これは改訂版で、同著者の 1957 年のものが増補されたものであり、ハワイ語—英語、英語—ハワイ語双方向の項目がある。改訂・増補が数回繰り返されており、1986 年版には音声や表記法についての短い解説があるが、過去の版には文法記述が付されていたものもあり、それがのちの Elbert and Pukui (1979) に発展した経緯がある。

ハワイ語見出し語が約 30000 語、英語見出し語が約 12500 語掲載されており、ポリネシアの言語の辞書としては最大級のものである。

3.2.3 Hopkins (1992)

ハワイ語の教科書として代表的なもののひとつである。言語は英語で、ハワイ語の初等文法を学ぶための内容を含んでいる。

現在ではハワイ語の教科書は子供向けから一般向けまで多様なものがあり、またハワイ大学でも Hopkins (1992) のほかにも初等文法のテキストとして *Nā Kai 'Ewalu* (Kamanā and Wilson 2012) のシリーズもあるが、広い層に使用されているという点ではやはり Hopkins (1992) が群を抜いていると思われる。

3.2.4 “Ulukau”

URL : <http://ulukau.org/>

Ka Haka 'Ula O Ke'elikōlani: College of Hawaiian Language と ALU LIKE, Inc. による、ハワイ語に関する様々な資料を閲覧・検索できるウェブサイトである。英語 - ハワイ語間の辞書は、辞書ポータルサイトから Andrews (1865), Andrews and Parker (1922) などの古い辞典、3.2.2 で紹介した最大のハワイ語辞典 Pukui and Elbert (1986) や、現代語辞典 *Kōmike Hua'ōlelo*, Hale Kuamo'o, 'Aha Pūnana Leo (2003) 、地名辞典 Pukui, Elbert and Mookini (1974) および Clark (2002) を同時に検索できる。その他にも、絵本から長編小説までの種々の読み物、新聞データベース、聖書、歌詞事典、地名辞典など、利用できるコンテンツは非常に多様であり、オープンアクセスのデータベースとして高い価値を有する。

収録されているデータは、資料ごとに形式の差は多少なりあるが、基本として「原典の画像データ」「テキストデータ」があり、それに加え「表記法の変更が加えられたデータ」「英対訳」が付されているものもある。

本研究においても、最大の辞書である Pukui and Elbert (1986) と、コーパスとした Judd (2003) の電子版が収録されているため、それらの検索・参照のために使用した。

3.3 ハワイ語に関するもの以外の論文

3.3.1 Greenhill and Clark(2011)

<https://pollex.shh.mpg.de/>

Greenhill SJ & Clark R (2011). POLLEX-Online: The Polynesian Lexicon Project Online. *Oceanic Linguistics*, 50(2), 551-559.

ポリネシアの諸言語の比較辞典であり、当初は1960年代、Bruce Biggsにより開始されたデータベースであったのが、現在ではウェブ上で更新され続けているものである。

2017年7月時点で67言語のデータ、約5000の再建形、約64000のreflexを含むとされている。本論でも、機能語の祖形に言及する際に参照している。

3.3.2 Greenhill, Blust and Gray (2008)

<https://abvd.shh.mpg.de/austronesian/>

Austronesian Basic Vocabulary Database

3.3.1で言及したPOLLEX onlineと同様、ウェブ上で閲覧でき、日々更新されているデータベースである。太平洋地域で使用されている約1480言語について、基礎語彙約210語を掲載している。

なおBlustはこのほかにも、*Austronesian Comparative Dictionary*のweb edition (Blust and Trussel 2013)を公開しており、こちらも引き続き更新中である。

3.4 先行研究に見られる課題

3.4.1 体系性の問題

個別研究により少しずつ改善してはいるが、今後の課題として積み残しになっている点が少なくなく、未だ重要な要素（頻出する機能語など）に関しても、その使用規則や機能の詳細に不明瞭な点が散在している。また、記述がある程度なされているものでも、用例・語例をリスト的に並べるにとどまり、分析が加えられていない箇所も目立つ。

母語話者のほぼいない現状、これまでの知見をもとにどれだけハワイ語の運用能力を得られるか、あるいはそうした能力を教育により向上させられるかは難しい点であり、ハワイ語の維持という観点からも改善が望まれる。

3.4.2 時期の問題

ハワイ語の文法研究（統語論研究）は現状あまり盛んとはいえないが、Elbert and Pukui (1979)後も継続して行われているのもまた事実である。

単独のテーマを扱う論文が非常に重要なのは確かであるが、特にハワイ語の研究状況にそ

れほど詳しくない層が手に取る可能性の高いレファレンスグラマーが Elbert and Pukui (1979) 以降無いこと、そのため Elbert and Pukui (1979) を更新・補完する後発の知見を含んだレファレンスグラマーが存在しない現状は好ましいとは言えない。40 年の経過を前にする現在、更新が望ましい。

4 本研究で用いるハワイ語データの性質

本研究では、比較的入手がしやすく、かつ一定の分量のあるテキスト資料をもとに、分析に用いるコーパスを作成した。

刊本を元に著者自身が手作業で入力した場合がほとんどだが、Judd and Mookini (2003) だけは公開されたテキストデータを用いた (4.1.1 参照)。ただし誤記等の修正¹は著者が行った。

本研究で用いるテキスト資料を選択する際に考慮した条件は主に以下の点である。

- ① 連続的な内容を持ち、まとまった分量があること
- ② 原典を持たない（翻訳でない）こと
- ③ コーパス全体として見た際に、内容が出来る限り多様になること
- ④ 利用可能な英対訳があるものを優先すること

非文字言語であったことから、現在記録が残っていて、かつ公刊されているテキストの年代的幅はそれほど広くない。また、内容の多様性についても、①②の条件を考えると民話・神話に偏りがちである。しかし、これはハワイ語テキスト資料全体にかかる制約によるところが大きいと解消が容易ではない。そこで、このような偏りがあることに留意しつつ利用することにする。

上述の通り内容面は出来る限り多様化させるようにと意図しているが、英語等の影響を受けにくいテキストという点で、

- －行政文書・法律文書など、外来語・外来の概念（主に欧米圏）の下地があるもの
- －聖書（翻訳のため）

を今回は除いている。また原本発行時代の制約については、本論で対象とする自然継承期ハワイ語にあわせてある (1 章参照)。

主たる検索対象の文書の分量は、延べ語数で約 15 万 7000 語である（なお、必要に応じて参照した追加資料を併せると、延べ語数で約 16 万 8100 語となる）。

表記法の時代による変化およびバリエーションがあるため、資料によって同じ語が異なる表記をされることがある。そのため、以下の表では表記法についても情報を付している。

¹ 誤字のほか行番号の振り方などで一貫性のない部分が見られた。

表9 コーパスに含まれる資料の性質（原本発行年順）

発行年 (原本発行年)	タイトル	著者・编者	ジャンル	のべ語数	表記法	
2003 (1838)	Anatomia	Judd, G. P. and Esther T. Mookini	初等 医学書	約 19000	旧表記	
1951 (1889)	The Kumulipo: a Hawaiian creation chant	Beckwith, M. W.	チャント (詠唱文)	約 9100	旧表記	
2006 (1905-1906)	Ka mo'olelo o Hi'iakaikapoliopele (冒頭~151 頁)	Ho'oulumāhiehie	神話	約 92200	新表記	
1959 (1916-1919)	Selections from Fornander's Hawaiian antiquities and folk-lore	Samuel H. Elbert	神話 ・ 民話	約 20000	旧表記	
1983	Nā pule kahiko	Gutmanis, June	チャント (詠唱文)	約 16500	旧表記	
補 足 資 料	1994	‘O LILI‘UOKALANI	Lowe, R. Hasegawa	伝記	約 4500	新表記
	2012	Nā Hana Kupanaha a ‘Āleka ma ka ‘Āina kamaha‘o	Carroll, Lewis, translated by R. Keao NeSmith	物語	約 36000	新表記

4.1 コーパスとしたテキスト

4.1.1 Judd and Mookini (2003)

Anatomia, 1838 を元に出版されたものである。

1835 年の American Board からの依頼があり、医師である Gerrit Parmele Judd により、ハワイ語で書かれた医療に関するテキストで、背景には、医療・解剖学に関する教育を行う目的があった。基本的には身体・部位の特徴の解説が多くなっている。

テキストの種類の違いを意識して、ある程度まとまった分量を持ちつつ、民話等でないものとして含めた。

本章冒頭で触れた通り、電子テキストファイル化に際し、データベース Ulukau に収録されているバージョン²をベースとして使用し、抜けや誤植と思われる点を書籍版で補足した。

² Ulukau: The Hawaiian Electronic Library, *Anatomia*. <http://www.ulukau.org/elib/cgi-bin/library?c=anatomia01> (2017/8/22 アクセス)

4.1.2 Beckwith (1951)

The Kumulipo: a Hawaiian creation chant.

ハワイの創世に関する神話にはチャントとして伝えられてきたものがあり、Beckwith (1951) にその成立背景、本文についての解説などと合わせて掲載されている。解説部は除き、チャント部分のみを含めている。

文字記録として最も知られているチャントはハワイ王国の国王となったカラーカウア王による手稿であり、その他手稿でも他著者によるいくつかのバージョンや関連資料、またそれらに基づく出版物がある。Beckwith (1951) はそうしたものの間に見られるバリエーションにも言及している。なお Beckwith 以外の英語対訳は部分的なものも含めると他にもあるが、なかでもカラーカウア王の後継者で王国最後の王でもあるリリウオカラニによるものが有名である。

内容上、古代からの系統 (genealogy) を示す性質をもつことから、固有名詞の羅列のみである部分も多く含まれているが、同程度に文の体裁をとる場所も多く、この部分にはハワイ語の文や句の特徴が表れているものと考えられる。

4.1.3 Ho 'oulumāhie (2006)

Ka mo'olelo o Hi'iakaikapoliopole.

ハワイの民話の中でも有名な女神、ヒイアカイカポリオペレの物語である。姉にあたる女神ペレから命じられて、恋人・夫であるロヒアウイポのところへ赴く旅に始まり、この件に関する姉妹間での確執が原因で起こる様々な事件が紹介される。

Hawai'i Aloha 誌に、1905年7月15日から週ごとの連載で同年11月24日まで、1905年12月1日からは日刊の Ka Na'i Aupuni 紙で月曜から土曜までその続きが掲載され、1906年11月30日に物語が完結した (Ka Na'i Apukuni 紙では、物語の序盤が6月1日~10月17日の間同時に再掲載されていた)。2006年版の編集では、Ka Na'i Aupuni 紙が底本になっており、読めない箇所等では適宜 Hawai'i Aloha 紙掲載版や Kuokoa Home Rula 紙の再掲載版、Ka Hōkū O Hawaii 紙等を参照している。

現代版の編集にあたり表記が現代表記に改められているが、パラグラフや歌のナンバリングなどは原本にできるだけ忠実なままにしてある (そのためチャントに付されたナンバーの重複などがあるが、訂正はされておらず、新たに通しでの数字を掲載しているなど、編集上の工夫が行われている)。ダイアクリティックの付加は、非母語話者ではあるがハワイ語に造詣の深い Puakea Nogelmeier 氏が中心となり、複数名により合議のもと行われており、信頼性を有するものと考えられる。ハワイ語版に合わせ、同氏が翻訳を行った英語版もあるが、以下にあげる Elbert (1959) と異なり完全な別冊になっている。

基本的に3人称文で語られるが、読者に向けて書き手が呼びかけを行ったり、一度本筋からそれて解説を加えたりなど、一部メタ的な文もある。

本文は453頁あるが、そのうち内容的に区切りのよい151頁までをコーパスとした。

4.1.4 Elbert (1959)

Selections from Fornander's Hawaiian antiquities and folk-lore.

表題通り、Abraham Fornander によるハワイ語での民話等のコレクションから、数編を著者が抜粋したものである。出典元の Fornander collection は、ハワイ文化の記録・保存を現在でも活発に行っているビショップ博物館から、“Memoirs of the Bernice Pauahi Bishop Museum of Polynesian ethnology and natural history”のシリーズの第4, 5, 6巻として発表されている。発行年代は1916年から1919年となっている。

Fornander は1860~1870年代に複数人のハワイ人による記録を残す作業を始めたとされ、具体的に名が挙がっているのは S. N. Kamakau, S. Haleole, Kepelino Keauokalani だが、民話等の収集詳細はあまり知られていない。前書きにおいて、インフォーマントは誰か、どこ出身者だったのか、年齢、どのような経緯で話すことになったか、彼らにとって物語にはどんな価値があったか、どの話が最も好まれていたのか（それはなぜか）、物語を「真実」と思っていたか、何を面白い点だと思ったか、各物語の採集をしたのは誰か、などが不明であることが記されている。

使用した抜粋版は、Elbert による。編集に際して挿絵が加えられ多少ずれはあるが、基本的には左ページにハワイ語、右ページに英対訳が掲載されている。

本研究ではこのうち冒頭3編（Iwa, Punia, Kawelo をそれぞれ主人公とする物語）を対象としている。

4.1.5 Gutmanis (1983)

Nā pule kahiko.

様々なソースから集められたハワイのチャント（詠唱）文を、祈りの目的（治療や加護など）や対象（様々な神、霊的存在など）によってまとめて紹介したものである。

Gutmanis (1983) 自体には、出典・バリエーション・固有名詞の脚注や祈祷内容のジャンルについての解説など、英語による記載が多く掲載されているが、コーパスにはハワイ語による祈祷文の部分のみを含めている。

4.1.6 Lowe (1994)

‘O LILI‘UOKALANI.

リリウオカラニ女王の伝記。読み物として書かれた、平易なテキストである。書かれた時期が新しいため、必要な場合に参照する補足資料とした。

4.1.7 Carroll, Lewis, translated by R. Keao NeSmith (2013)

Nā Hana Kupanaha a ‘Āleka ma ka ‘Āina kamaha ‘o.

新しく発表された、Alice’s Adventures in Wonderland の翻訳である。

英語の原文からの翻訳であることに加え、ごく近年に翻訳されたものでもあり、

4.1.6 と同じく補足資料にとどめている。

このテキストは、英語の原文が存在する点で他の資料とは大きく異なる。本研究では、現代ハワイ語の性質の分析のため、6章でのみ使用している。

4.2 用例整理の各手順について

4.2.1 用例の抽出

作業の流れとしては、

(1) 4.1 で挙げた資料を電子テキストファイル化

(2) KWIC Concordance 5 for Windows³を使用し、

ー延べ語数

ーワードリスト（全出現語彙リストと各語彙の出現回数）

ー分析対象となる要素の KWIC 索引

ー同じく分析対象となる要素の共起語彙リスト

などを作成

(3) Microsoft Excel などに上のデータを移し、ラベル付け作業に移行

ハワイ語資料にはインターネット上で検索できる電子テキストデータベースがあり、新聞記事などを中心に検索ができる。ただし分野の偏りがあることや、形式上リスト化に手間がかかることもあり、補助的に使用する程度にしている。

また、品詞情報等のタグ付けがされた電子テキストデータベースは、今のところまとまった形で提示・公開されているものはない。

本論文で使った「電子テキストファイル」は、各文献資料を手入力し、テキスト形式 (.txt) にしたものである。ただし Judd and Mookini (2003) については電子公開版があるので、製本版を参照して手直しを加えたものを用いた。したがって、公開版とは細部において一部同一ではない（テキストの内容自体は同じになっている）。

今回用いたテキストにも、タグ付け等は行っておらず、その都度分析対象とする要素に着目して必要な部分のみをリスト化、情報の付加などを行っている。

表 9 には表記法の項を設けたが、今回対象とする機能語のように、出現数が多く、かつ音節数の少ない要素の識別において、この表記法の違いの問題が重要になる場合がある。

旧表記法と新表記法の違いは、主に

① 旧表記法では、長母音記号 (ː) が使用されない

② 旧表記法では、声門閉鎖音 (ʻ) の記載がない

という 2 点である。ただし、特に近い意味を持つ対になっている語がある場合など、区別されることが望ましい特定の語においてのみ声門閉鎖音を表記するテキストもある。

³ 塚本聡 氏作成。参考文献欄を参照のこと。

例えば代名詞の、ia と受け身マーカ-の‘ia、後置代名詞とされる ana と名詞化辞とされる‘ana などは、‘ (声門閉鎖音を示す記号。ハワイ語では ‘okina と言う) の有無のみで異なるため、旧表記法では同形となる。文中における位置などにより、ほとんどの場合は識別可能である。ただし、ある語がどの用法であるかを識別する手掛かりとして ‘okina の有無が重要になる場合がある。さらに、‘okina がないと、文中での機能の判別が難しくなるケースもある。

本研究のメインコーパス (補足資料を除いたもの) では、新表記法のテキストは 1 種のみである。新表記法テキストの電子テキスト化の際には、長母音を大文字に、声門閉鎖音はシングルクォーテーションマークに置き換えて入力している。長母音を母音の複数表記にする方法もあり得るが (例えば ā=aa など)、母音連続の場合との区別がしにくいため採用しなかった。

一方、旧表記法のテキストについては元テキストのままの入力である。識別については、必要が生じた際に各用例の環境を確認し判断を行っている。

なお、分ち書きの仕方にも年代や筆者によってバリエーションが見られることに注意したい。今回の対象テキストに見られるバリエーションのうち頻度の高いものは、

‘oia — ‘o ia

ihola, maila, a‘ela, ihola — iho la, mai la, a‘e la, iho la

などである。前者は 3 人称単数代名詞の主語であるが、主格マーカ-の‘o と代名詞 ia を分ち書きする場合と、一語として表記する場合がある。後者は方向詞と代名詞の la の組み合わせだが、セットで使われることが多いため、一語として表記することがある。このほかにも、位置名詞と前置詞を一語として表記するか分ち書きするか (ilalo と i lalo) などがある。

また、受身マーカ-は接辞形を持つとされるが、後に述べるように接辞が付加された形が語彙化していると考えるのが妥当なものと、それほど定着はしていないとみられるものがあり、接辞形を使う場合と独立形 (分ち書きされるもの) を使う場合との条件の違いなども明らかになっていない。今回はこの状況を踏まえ、分ち書きされているもののみを受身マーカ-としてカウントした。

4.2.2 用例へのラベル付けと用例の選択

分析に際しては、KWIC 索引をもとに、その都度必要と思われる項目を立てて情報を手作業で付加した。

上述のように同音異語や表記法の問題があることから、機械的に抽出するには限界があり、基本的にはどの項目も一例ずつ文脈を確認しつつ、情報付加とノイズ除去を行った。

作業工程を、方向詞 mai を具体例として提示する。

4.2.2.1 KWIC 索引の作成

上述の「KWIC Concordance 5 for Windows」を使用し、KWIC 索引を作成する。テキストデータを設定し、また検索時のオプションとして、シングルクォーテーションマークが“separator”と認識されないよう、words definition から除く。

以下の例ではテキストファイルとして全テキスト統合版を使用しているが、状況に応じ、表記法別のファイルや各テキスト別のファイルごとに作成した場合もある。

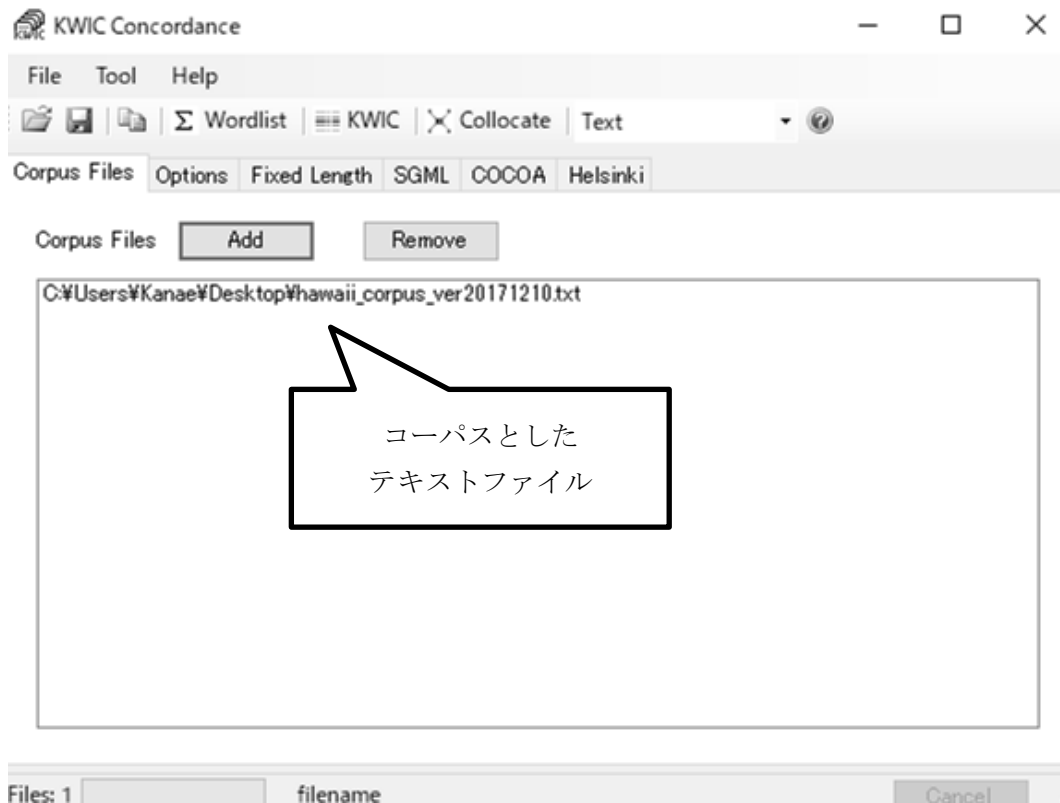


図3 KWIC Concordance における KWIC 作成手順 (1) テキストファイル選択

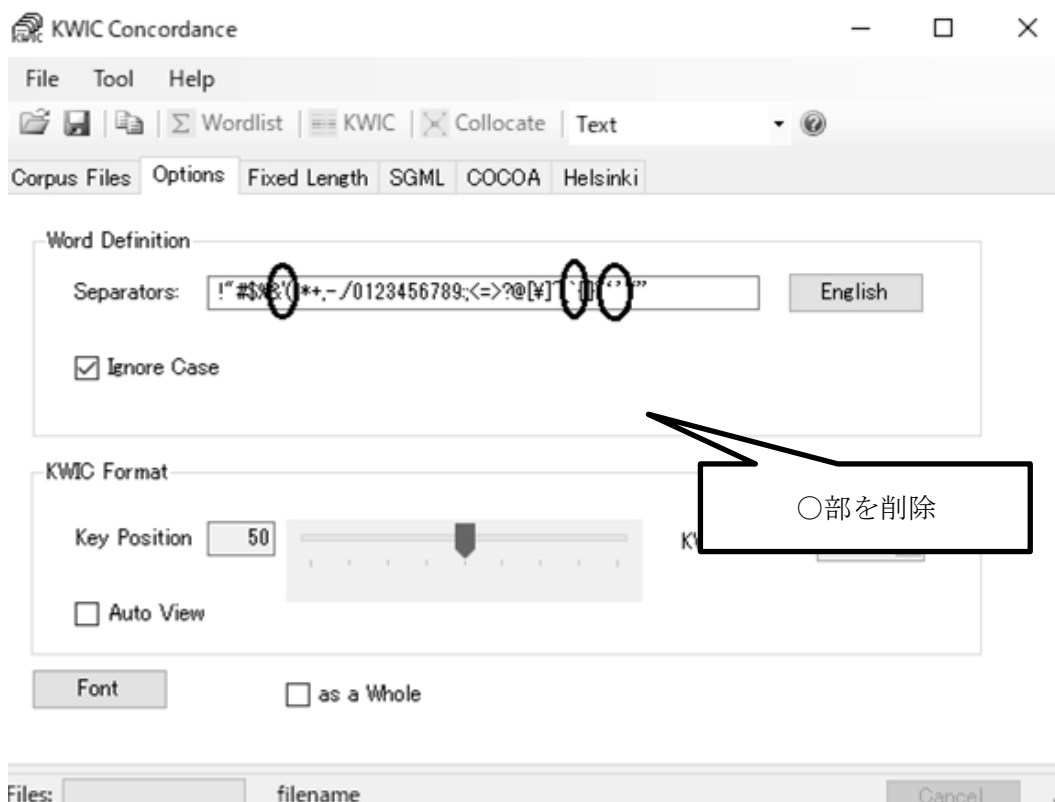


図 4 KWIC Concordance における KWIC 作成手順 (2) Option の設定

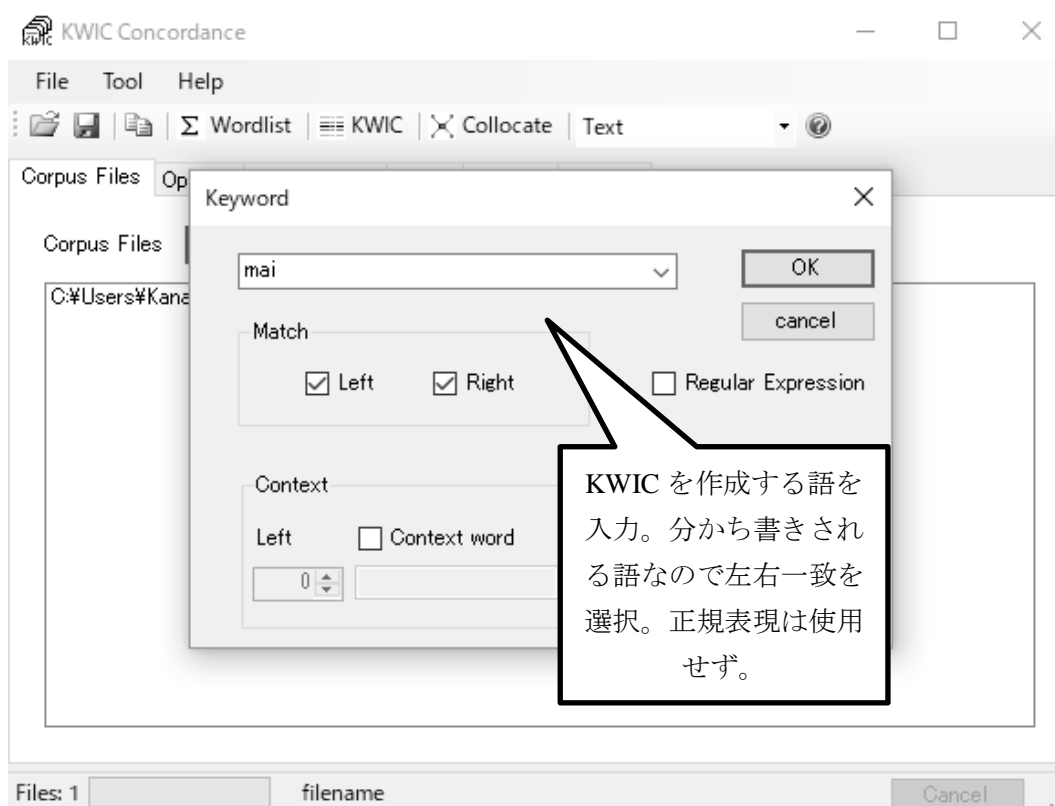


図 5 KWIC Concordance における KWIC 作成手順 (3) キーワードの設定

KWIC - hawaii_corpus_ver20171210.txt

File Copy Font Line C:\Users\Kanae\Desktop\hawaii_corpus_ver20171210.txt

File	line	Left	Key	Right
hawaii_corpus_ver20171210.txt	6144	imea, a mai ia wahi aku hO'ea kAua i nA kohala. a	mai	laila aku, holo kAua no mau. 'AnO, e ku'u aikA
hawaii_corpus_ver20171210.txt	7160	lei hala. ua hele mai nei nO ho'i kAKou mai puna	mai	a hO'ea i kohala, a hO'ea mai nei kAKou i nei 'A
hawaii_corpus_ver20171210.txt	5634	mea e kiola hou aku i kahuna imu, na ke ahi e 'ai	mai	a pau. no laila kAhea 'ia aku nA hoa 'ai a kAKou
hawaii_corpus_ver20171210.txt	7609	aku ai a lohe ua wahine nei, i ia wA 'o ia i huli	mai	ai a pane maila iA h'i'ia, "ae, hele maila nO
hawaii_corpus_ver20171210.txt	7511	ei i ka pau nui 'ana aku o nA wa'a i AKou i 'ike	mai	ai e lana ana, i ka ho'i 'ana mai ia wahi aku. '
hawaii_corpus_ver20171210.txt	4415	e pU me 'oukou ma kA 'oukou huaka'i," i kama'ilio	mai	ai 'o papanuioleka, a laila, pane akula 'o h'i'ia
hawaii_corpus_ver20171210.txt	354	akee, hoomakaukau i na mea a pau a Kawelo i kahea	mai	ai, hele aku la a kau i luna o ka waa, a holo ak
hawaii_corpus_ver20171210.txt	7411	la i kO IA pOloli 'ina'i pU me ka waimaka IA e uE	mai	aloha 'ino nO E, i ka pau 'ana a'e o kEia kau a
hawaii_corpus_ver20171210.txt	3299	malamanui he anu ko'u i kO hiki 'ana mai e aloha	mai	aloha nO E 'o 'oe ia, e ku'u hoa i ka lehua 'ula
hawaii_corpus_ver20171210.txt	3285	e h'i'ikapoli 'ano'ai wale ke kipa malihini 'ana	mai	aloha, 'eA. a laila, pane akula 'o h'i'ia, "ai
hawaii_corpus_ver20171210.txt	14498	u ali'i O kahi i waiho ai ka hua olelo Elieli kau	mai	'Amama. Ua noa. o ke au i kahuli wela ka honua
hawaii_corpus_ver20171210.txt	788	kakahiaka nui, ike aku la lakou ia Keolewa e lele	mai	ana i luna, a o ka puu hoi o Kalanipuu e au mai
hawaii_corpus_ver20171210.txt	229	aa pono aku la ke koi i ko ianei mau lima, e huki	mai	ana keia lilo. Kahea na luahine." He aihue ka kei
hawaii_corpus_ver20171210.txt	6115	mai ai 'o kekahi po'e kAnaka, 'oiai iAKou e hele	mai	ana ma ia wahi, a 'ike nui ihola i nei 'e'epa e
hawaii_corpus_ver20171210.txt	5481	pUhenehene 'ana, aia ka pono a mAnalo ka imu e 'A	mai	ana. i ia nene'e nui hou 'ana iho a iAKou, ua
hawaii_corpus_ver20171210.txt	4800	oho pi'o lani, pi'o mai ke aloha e pele E e aloha	mai	e aloha a'e i ka pili kua, i ka pili alo o kAua
hawaii_corpus_ver20171210.txt	3298	i ka pali o malamanui he anu ko'u i kO hiki 'ana	mai	e aloha mai aloha nO E 'o 'oe ia, e ku'u hoa i k
hawaii_corpus_ver20171210.txt	3281	i i ka ua anu o mahina he anu ko'u i kO hiki 'ana	mai	e aloha mai e aloha nO E welina 'oe, e h'i'ikapo
hawaii_corpus_ver20171210.txt	3282	u o mahina he anu ko'u i kO hiki 'ana mai e aloha	mai	e aloha nO E welina 'oe, e h'i'ikapoli 'ano'ai w
hawaii_corpus_ver20171210.txt	4644	a ola loa nO hele ana ke aka o ka 'uhane a ho'i	mai	e ho'i e komo i ka hale, 'o mauilola ka hale o k
hawaii_corpus_ver20171210.txt	2640	na 14 'o 'Isaia. auE kou hA'ule 'ana mai ka lani	mai	e ka hOkU loa, ke keiki a ke kakahiaka ua kua 'i
hawaii_corpus_ver20171210.txt	12882	kela a me keia la 8-2 E o'u mau kia'i mai ka po	mai	E nana ia mai ka hale o kakou Mai luna a lalo Ma
hawaii_corpus_ver20171210.txt	12844	ola. E ola i ka noho hale, E ola i ke kanaka kipa	mai	E ola i ka haku-'aina E ola i na'i'i Ola ke ola
hawaii_corpus_ver20171210.txt	7458	ana ho'i ua aloha IA eia mai au a he hoa e aloha	mai	e uE kAua. a i lawa nO a pau kEia kau 'ana a hi
hawaii_corpus_ver20171210.txt	7591	ka lau weuweu ola i ka pua mau'u e mAlei E aloha	mai	e uE kAua. he mAhele 'oko'a a'e nO kekahi o kEi
hawaii_corpus_ver20171210.txt	478	welo o ke nai ana o Aikanaka i na makua o Kawelo	mai	Hanamaulu e. Ma keia nai ana o Aikanaka i na ma

Totals: 2411 Auto View Cancel

図 6 KWIC Concordance における KWIC 作成手順 (4) 作成された KWIC 索引

以上の作業より出来上がった KWIC 索引は、行数・左列終部要素・右列始部要素などでソートできる。今回の作業では、基本的には右列の要素でソートした。また、mai には機能の似通った maila という形式もあるため、これも別シートで同時に作成した。

4.2.2.2 Excel でのデータ精査・ラベル付け

File	line	Left	Key	Right	移動の種類	用法
hawaii_corpus_ve	1522	kuahiwi ko ia nei hO'ailona, a 'o ka 'ai i ka i'a	mai	ke po'o a ka hi'u ko ia nei kAnAwai,hi'iaakapu'e		前置詞
hawaii_corpus_ve	1596	ola 'o ia iO'huanui, a laila, iA kilauea iki, a	mai	laila aku, kA ihola 'o ia (pele) i kEia kilauea e		イディオム
hawaii_corpus_ve	1625	A paia a pau o ka hale lau i a pele e moe ana, a	mai	ia wA mai nO i kaulana ai 'o puna, he 'Aina paia		前置詞
hawaii_corpus_ve	1696	ke kani 'ana o ua mau pahu nei, akA, ua 'onipa'a	mai	i kahi ho'okahi, a ho'omaopopo a'ela kEia, no ia		前置詞
hawaii_corpus_ve	1832	au iA 'oe he kama'Aina au no kEia mau mokupuni, a	mai	noho na'e 'oe a moloA ke ne'epapa aku au i nA 'ul		否定命令
hawaii_corpus_ve	2065	e mAkou mai ka buke mai a j.w. nAihe o kohala, a	mai	ka buke mai ho'i a d.k. wai'ale'ale. a he mAhele		前置詞
hawaii_corpus_ve	2403	ai kAU i kUJamu mai nei he mau mo'o? ke waha 'A	mai	nei 'oe iA kilioekapua a me kalamainu'u he mau		前置詞
hawaii_corpus_ve	2860	'oskaikalani 'anapa i ka honua naue ka honua pa'a	mai	ka honua honua nui a kAne 'o ka honua i kapakapa		前置詞
hawaii_corpus_ve	2894	nA mana like 'ole o ka mo'olelo o hi'iaka e pa'a	mai	nei i kekahi po'e, a pEia nO i nui ai nA mAhele o		前置詞
hawaii_corpus_ve	2898	Eia "aulani" o hi'iaka, e like me nA mea i loa'a	mai	iA ia mai kekahi po'e kAkau mo'olelo kahiko mai,		前置詞
hawaii_corpus_ve	2915	a'e nei, a inA he mau ho'oponopono kekahi e loa'a	mai	ana iA mAkou no kekahi o ia mau mele, a laila, e		前置詞
hawaii_corpus_ve	3012	mAKa'ika'i ma hilo aku nei, a hO'ea i hAmAkua, a	mai	laila aku hO'ea i nA kohala. "I maila 'o wahine'		イディオム
hawaii_corpus_ve	3069	eIe 'oe "kA' a'ole paha auane'i 'olua e loa'a	mai	ia'u?" wahi a wahine'O ma'o i nInau mai ai. 'emo'		前置詞
hawaii_corpus_ve	3084	ai e hele pU 'o ia me lAua i ka mAKa'ika'i. loa'a	mai	nO ua mau wAhine malihini nei iA ia ma kahi nO An		前置詞
hawaii_corpus_ve	3090	a kakali mai nei nO ho'i ko'u pohihihi iA a loa'a	mai	'olua ia'u, a no laila, e nInau aku ana au iA 'oe		前置詞
hawaii_corpus_ve	3207	po'i wai, a e ki'i aku 'oe i lau 'ape." ua loa'a	mai	kEia mau mea iA hi'iaka, a kUkulu ihola ia i ke p		前置詞
hawaii_corpus_ve	3323	a ke hele ho'i a mahiki a'e ka lA, ua hala 'oko'a	mai	ho'i iA mAkou he kaola lO'ithi o ka hele 'ana, a k		前置詞
hawaii_corpus_ve	3357	ihola me kEia, ma muli o kekahi ho'AKAka i loa'a	mai	iA ia mai kekahi kanaka kahiko o pu'uepa, kohala		前置詞
hawaii_corpus_ve	3360	i i kEia wA no ka 'Apana o ko'olaupoko. ua loa'a	mai	iA ia kEia ho'AKAka a'ela a me kekahi mau ho'AKAK		前置詞
hawaii_corpus_ve	3618	kou iho 'ana ma kEia wahi aku a hO'ea i hA'ena, a	mai	laila a'e ho'i, hO'ea i waiAkea. 'o ke alanui o k		イディオム
hawaii_corpus_ve	3715	A wahine'O ma'o, a pane akula, "auhea 'oe, e pa'a	mai	'oe i ku'u pAU nei. e pa'a 'oe a pa'a, a mai pa'		前置詞
hawaii_corpus_ve	3716	a'a mai 'oe i ku'u pAU nei. e pa'a 'oe a pa'a, a	mai	pa'a ho'ohemahema, o lilo auane'i 'oe i ka wai 'u		否定命令
hawaii_corpus_ve	3722	i loko o ka ulu lA'au, mai kEia pe'a a kEia pe'a,	mai	uka a kai ke olo pihe o kEia mau leo. 'a'ole nO h		前置詞
hawaii_corpus_ve	3726	i'oki 'ia e kUkulukukui a me kapuakoai'a. "e pa'a	mai	'oe a pa'a i ku'u pAU." wahi a hi'iaka i pane ma		前置詞
hawaii_corpus_ve	3941	alihini kEia mai uka lilo mai mai ka uka wa'awa'a	mai	o puna no puna ho'i au i hele mai nei a pA'ie'ie		前置詞
hawaii_corpus_ve	3947	a kEia wahi mai, e kEnA wahine ho'okano. ho'opa'a	mai	'oe i ka hele mai ma kEia wahi, he make nO kou ho		前置詞
hawaii_corpus_ve	3966	ua lele maila ka lihihihi lehua a kokoke e loa'a	mai	nA maka o hi'iaka, 'o ia nO kona manawa i kauoha		前置詞
hawaii_corpus_ve	3974	'o hi'iaka a kama'ilio akula i ke aikAne, "e pa'a	mai	'oe i ku'u pAU, a hahai mai nO 'oe ma hope o'u.		前置詞
hawaii_corpus_ve	4121	aka i kahi luhine o uka o naliuli e 'ai i ka i'a	mai	ke po'o a ka hi'u a he mea 'oia'io 'o kahi kAn		前置詞

図7 Excel でのラベル付け作業例 (1)

mai ではシンプルな方向詞としての用法のほか、同音異語として前置詞や否定辞がある。また方向詞と見なすかどうか判断しにくいイディオムもあるため、それらを用法として付加した。また、移動を表す場合には、どのような性質の移動であるかを分類し、記載するためのコラム (列) も設けている。

移動の性質はもちろんのこと、同音異語についても、形態や後ろに来る可能性のある内容語などの、形の面で機械的に識別することができないため、ほぼ全ての例について、一例ずつ用例を見、文脈を踏まえて判断する必要がある。

こうした作業を見るべき特徴・要素 (語) ごとに行った。例えば、mai についてはもうひとつ、'ana の分析のため、'ana との共起関係を見るためのシートも作成した。

No	文献	line	Left	Key	Right	'ana=1
1	3 FS	160	pau, ninau mai o Iwa: "Heaha kau huakai o ka hele	ana mai	? Wahi a Keaau. "He mau leho na'u, ua kiina mai e	1
2	7 FS	229	launa aku kuu lima, oka haha wale aku kai" la noe	ana mai	a na luahine a kokoke loa pono aku la ke koi i k	1
3	21 FS	478	ka ikaika o Kawelo i Kauai. O ke kumu o keia kii	ana mai	ia Kawelo, o ke pai ana o Aikanaka i na maku o K	1
4	14 FS	581	ane mai Kauai mai." Heaha ka olua huakai o ka hiki	ana mai	i Oahu nei?" I mai na makuakane." I kii mai nei ma	1
5	11 FS	611	hine." Heaha ka huakai a kuu kaikamahine o ka hiki	ana mai	o ka poeleele, o ke kua lapu o ke aumoe nei la e	1
6	18 FS	630	"Heaha ka huakai nui a kuu kaikamahine o ka hiki	ana mai	. o ke ahiahi poeleele, o ke kua lapu o ke aumoe	1
7	19 FS	647	. ia." Heaha ka huakai a kuu kaikamahine o ka hiki	ana mai	? I aku ke kaikamahine." I kii mai nei ua i ke koi	1
8	12 FS	992	hewa, he ai i kalo moa, he ole loa ka hoi ka holo	ana mai	nei me Kawelo. Ua pau ka aina i na koa, o ke aha	1
9	17 FS	1016	? "O Kamalama ka hai mua ana mai i kai, i ka pae	ana mai	i uka, o Kawelo ka keia ope nui e waiho nei." Kai	1
10	16 FS	1168	a a kani no.) A ike o Kawelo ia Kauahoa e iho mai	ana mai	ka puu mai o Nounou, nui launa ole, malu ka la i	前置詞
11	10 HI	1924	i nA kiai' malkan o ko 'oukou mokupuni nei e hele	ana mai	nihoa mai a ho'ea i kua'i nei." eia 'o kilioe ma	TA
12	4 HI	4544	oa ihola no 'o ia ua ho'i aku no ua lei aloha nei	Ana mai	ka huakai hele Ana i ho'olA'au ai. kAhea maila i	削除
13	9 HI	5152	iaka a ike akula he IA'au 'ahakea ka IA'au e moe	ana mai	kEia 'ao'ao aku o ke kahawai a kau ma kEIA 'ao'ao	TA
14	5 AN	8004	nao kakou i ka lokomaikai o ke Akua, i kona haawi	ana mai	i ka waiu na ke keiki ma ka hanau ana: a hiki mai	1
15	15 AN	8248	akamai na io kuokoa i ka lakou hana, mai ka hanau	ana mai	. aka, aole e ike pono na io kokua i ka wa kino ho	1
16	22 AN	9159	a holo hou ke koko ma ke ake mama. Pela ka hoike	ana mai	o Hareve, aole nae i apoia e na kanaka naauao ia m	1
17	13 AN	9188	ao hema, a loa i na puka eha o na aakoko, e komo	ana mai	. mai ke ake mama. E haha hoi ka lima maloko o ka	TA
18	1 AN	9206	puuwai a me ka poi ana a puni ke kino. I ka iho	ana mai	o ke koko elelele, mai ke poo, a me na lima mai, a	1
19	6 AN	9206	na hoi mai na wswae, a me ka opu mai, a me ka hoi	ana mai	o kona koko iho, mai ka puuwai mai, ua hui pu ia	1
20	2 AN	9212	pu. E haha oe i ka pana ma ka pulima, oia ka lele	ana mai	o ke koko, no ka upa ana o ka opu hema. A i ka wa	1
21	20 AN	9253	kana mea e hana? noloko mai o ke koko. I ka hoi	ana mai	o ke koko elelele, mai na naau mai, a hele i ka pu	1
22	8 AN	9269	ki ke puka aku, ulu ia i pohaku nui no ka hui mau	ana mai	o ka puna maloko o 5* ka mimi. O ke kaa ana o u	1
23	23 FS	1015	? "O Kamalama ka hai mua	ana mai	i kai, i ka pae ana mai i uka, i Kawelo ka keia	1
24						2

図 8 Excel でのラベル付け作業例 (2)

ここでは、旧表記の場合の‘ana は ana とだけ表記されるため、“ana mai”と “ana mai”の 2 種類の KWIC 索引を作成し、その“ana mai”の ana が‘ana として機能しているものかどうかを確認している。‘ana であれば 1 を入力、実際にはそうでないものが含まれたため、その場合は別の機能をラベルとして入力するか、判断が付きにくい場合も「削除」等のラベルで該当する例ではないことを一旦マークするようにした。これもまた、文脈を見ずには判断できない要素である。

先述の通り、今回分析にあたって見たデータのうち、形態や前後の内容語等で機械的に判断出来たものはほとんどない。よって、前置詞・TA マーカーの i のように、多様な用法を持つ上に出現頻度も高い語など、本研究の範囲では扱いきれなかったものもある。それについては、5 章でその旨を記載してある。

5 動詞・名詞の周辺要素

この章では、動詞句または／および名詞句中に現れる機能語を取り上げ、分析する。その際すべての要素について詳細に取り上げるのではなく、5.2 では全体としては名詞句として働く句にのみ出現し、従来の記述では名詞化辞とされてきた‘ana について述べる。そして5.3 では、動詞句・名詞句(‘ana 句含む)のいずれにも頻繁に現れる方向詞の aku, mai, a‘e, iho について述べる。そして5.1 では、それら議論の中心となる要素に先立ち、その他の周辺要素をまとめて取り上げる。

ハワイ語の句構造については2章で触れたが、参照の利便性のため以下に表を再掲する。なお、全ての表に関係する事項として、内容語には接辞として分析されうるものが付加されることがある。代表的なものとして、Elbert and Pukui (1979) でいう Causative の接頭辞 ho‘o-、名詞化の接尾辞-na があるが、それぞれ後の項で触れる。

以下に示す表は Elbert and Pukui (1979) および塩谷 (1999) に基づき、筆者が項目数や名称を中心に編集を行った。

表 10【=表 6】 動詞句構造

否定辞	TA 詞	内容語	結合目的語	修飾語	受身マーカ	方向詞	後置代名詞	強意詞	主語	直接目的語	間接目的語	その他
否定命令												
∅ ‘a‘ole ※ 1	∅ ua e ke i	※ 2	∅ ※ ²	∅ ※ 3	∅ ‘ia	∅ aku mai a‘e iho	∅ ana nei ala ai lā	∅ nō nō ho‘i など		∅ i NP	∅ i NP	∅ ※ ⁴
mai												

※1 否定辞の直後に、主語に当たる人称代名詞や強意詞がくることがある。

※2 さまざまな語が入る。

※3 この箇所には、同カテゴリ内の要素であれば、同時に複数個出現可能。

※4 時・場所を表す句など。

表のうち最低限必要と考えられるのは句の中核となる内容語で、それ以外の出現は任意である。また、この表では動詞句を捉える際に関連深い要素である主語・目的語や、時・場所を表す句の来る位置を示しているが、これらは動詞句の中核部ではないものとして、破線で示している。

以下に動詞句の具体例を挙げる。下線部が一つの動詞句である。

(5-1) Mai poina ‘oe…

NegImp FORGET 2sg

「忘れるな」 (Hopkins 1992: 135)

(5-2) … ke hele mai nei.
 TA MOVE Dir Dem
 「【今】 来ている」 (Ho‘oulumāhie 2006: 75)

(5-3) ‘a‘ole i kāhea ‘ia ‘o Hi‘iaka mā…
 Neg TA CALL Pass Sub H. pl
 「(ヒイアカたちは) 呼ばれなかった」 (Ho‘oulumāhie 2006: 130)

表 11 【=表 7】 名詞句構造

前置詞	決定詞	複数	内容語 ※1	修飾語	受身	方向詞	代名詞	強意詞・修飾名詞句
否定辞								
(∅)	(∅)	∅		∅	∅	∅	∅	∅
‘o	ka/ke	mau		※ ²	‘ia	aku	nei	nō
i/iā	nā					mai	ala	nō ho‘i
ma	kēia					a‘e	lā	など
ā	kēlā					iho		※ ²
a	kēnā							
o	nei							
me	ua							
mai	ia							
e	ko NP (Poss)							
ē	ka NP (Poss)							
na	he							
no	kekahi							
pe								
‘a‘ohe								

※1 基本的には内容語が来るが、代名詞の一部と、位置名詞が来ることもある。

ただしその場合、他のスロットの要素の出現に制約があり、決定詞は共起しない。

※2 の箇所では、同カテゴリ内の要素であれば、同時に複数個出現可能である。また、結合目的語に当たるものがある可能性もある。

表のうち最低限必要と考えられるのは句の中核となる内容語と、決定詞または否定辞であり、それ以外の出現は任意である。以下に名詞句の具体例を示す。下線部がひとつの名詞句である。

(5-4) he keiki ikaika loa 'o Kawelo...

Det CHILD STRONG VERY Sub K.

「強い子ども」(Elbert 1959: 33)

(5-5) ka he'e nalu mai o kekahi po'e kāne,

Det SURF/SLIDE WAVE Dir Poss.O SOME pl MAN

「波乗り」(Ho'oulumāhiehie 2006: 108)

(5-6) kekahi mau wahi 'ē a'e

SOME pl PLACE DIFFERENT Dir

「別のいくつかの場所」(Ho'oulumāhiehie 2006: 2)

また、名詞句の下位分類として'a'ana 句がある。

表 12【=表 8】 'ana を含む句の構造

前置詞	決定詞	複数	内容語	結合目的語	修飾語	受身マーカ	'ana	方向詞	代名詞	強意詞・修飾名詞句	主語	直接目的語	間接目的語	その他
否定辞														
(∅)	(∅)	∅		∅	∅	∅	∅	∅	∅	∅	∅	∅	∅	∅
'o	ka/ke	mau		∅	※ ¹	'ia	'ana	aku	ana	nō,	o NP	i NP	i NP	※ ²
i/iā	nā							mai	nei	nō				
ma	kēia							a'e	ala	ho'i				
ā	kēlā							iho		など				
a	kēnā									※ ¹				
o	nei													
me	ua													
mai	ia													
e	ko NP													
ē	(Poss)													
na	ka NP													
no	(Poss)													
pe	he													
	kekahi													
'a'oha														

※1 の箇所では、同カテゴリ内の要素であれば、同時に複数個出現可能。

※2 時・場所を表す句など。

上の表のうち、「直接目的語」「間接目的語」「その他（時間・場所を示す表現など）」は動詞句構造に示したものと同じふるまいを見せるようであり、‘ana 句になったからマーカーが変わるなどの統語的振る舞いの変化を示すことはない。ここでは主語を含め、表 10 と同じく、意味的に関連深く共起もしやすいが、‘ana 句の中核部ではないものとして、破線で示している。

‘ana は一般に名詞化辞とされ、句の中のどこに来るかを記述する際に動詞句中の要素として説明されることもあるが、実際には‘ana が含まれる場合は決定詞と共起し、全体としては名詞句として機能している。つまり、‘ana を含む句は、動詞句に近い内部構造を持つ一方、統語的には名詞句に相当するものである。

以下に具体例を示す。下線部がひとつの‘ana 句を示す。

(5-7) ka ‘ōlelo ‘ana 「言うこと」 (Ho‘oulumāhiehie 2006:8)
 Det SAY Ana

(5-8) wahi a Hi‘iaka i pane mai ai me
 SAYING Poss.A H. Prep REPLY Dir Dem Prep
ka ho‘omau ‘ana mai nō ho‘i i ke kama‘ilio ‘ana,
 Det CONTINUE Ana Dir Int Obj Det CONVERSE Ana
 『(略)』とヒイアカは話を続けて答えた (Ho‘oulumāhiehie 2006:100)
 (lit. ヒイアカは話すことを続けながら返事をして言った)

次節では ‘ana と方向詞を除き、それぞれの句を構成する要素を、前から順に見ていくことにする。それぞれについて例文も提示するが、その際、コーパスに見られる例を優先した。ただし、一部コーパス中の例ではわかりにくいもの等は、先行研究に見られる文献から引用しているものもある。

5.1 句を構成する要素

5.1.1 否定辞・決定詞・数

5.1.1.1 否定辞

否定辞は、先行研究 (Elbert and Pukui 1979) などによれば 名詞句では‘a‘ohe、動詞句では‘a‘ole の形である。‘a‘ohe は冠詞的役割を果たす一方、基本的に前置詞と共起しないため、名詞句の前部要素としては特異なふるまいを示すものである。一方、‘a‘ole は動詞句で先頭に来る要素であり、後続する TA マーカーは文中で現れる形をとることになる。

本研究で用いるコーパスでは‘a‘ohe が 216 例、‘a‘ole が 478 例出現し、上で述べた先行研究の予想と食い違う等の例は特に見受けられなかった。

(5-9) **‘a’ole i kāhea ‘ia ‘o Hi’iaka mā...**

【=5-3】 Neg TA CALL Pass Sub H. pl

「(ヒイアカたちは) 呼ばれなかった」 (Ho‘oulumāhiehie 2006: 130)

(5-10) **‘a’ohe kupua nui a laua e maka’u ai...**

Neg KUPUA BIG Poss.A 3du TA FEAR Dem

「彼らが恐れるクプア¹はいない」 (Ho‘oulumāhiehie 2006: 90)

なお否定辞にはもうひとつ、修飾語（後置否定詞）の‘ole²がある。否定辞の性質を明らかにするにはこれを含めて全体を見る必要はあるが、今回は議論の対象から除外する。

また、動詞句構造の中にある mai は否定命令のマーカである。コーパスでは 52 例出現した。

(5-11) **mai hookoko ke aku ‘olua**

NegImp APPROACH Dir 2du

「お前たちは近付いていってはいけない」 (Elbert 1959: 51)

5.1.1.2 決定詞

決定詞には以下のような語がある。機能と、それぞれの例文を示す。

ka/ke 定冠詞 (a, e, o, k の前で ke、それ以外の場合は ka の形をとる。しかし、a, e, o, k 以外の前でも ke が現れることも、わずかながらある。)

nā 定冠詞、複数のモノがあることを含意する。

kēia 指示詞 (近称)

kēlā 指示詞 (遠称)

kēnā 指示詞 (中称)

ia 指示詞 (この・あの・前述の “aforementioned”)

ua 指示詞 (前述の “aforementioned”)

nei 前置代名詞 (Pukui and Elbert (1986) の nei の項は以下のように記述している : “Proposed nei seems to carry both favorable and pejorative emotional connotations”. なお、同形の後置代名詞 nei は 5.1.5 参照。)

¹ “Demigod or culture hero, especially a supernatural being possessing several forms” (Elbert and Pukui 1986, kupua の項)

² ‘ole を含む例を以下に示す。

‘O ia ka hopena o ka hele ‘ole ‘ana e ho‘olohe lipine.
Prep 3sg Det CONSEQUENCE Poss Det GO Neg Ana Prep LISTEN TAPE
“That’s the consequence of not going to listen to tapes.” (Hopkins 1992: 185. グロスのみ筆者による)

- ko NP 所有形式・O形。NP までを含めた全体で決定詞と見なす。人称代名詞の所有に関しては特別形があり、それらも同じ位置にくる。
- ka NP 所有形式・A形。NP までを含めた全体で決定詞と見なす。人称代名詞の所有についてはO形と同じ。
- he 不定冠詞とされることが多い。ただし、文中での出現位置に制約があり、代表的な用法は名詞述語文の文頭と、所有文（～は～を持っている）の被所有物の前に置かれる場合である。
- kekahi 冠詞の一種とされる。ke+kahi（1、1つ）と分析できる。some や another, certain など対訳テキストでは様々なものが対応するが、ka/ke などに比べれば定性を示す度合いは低いように思われる。

(5-12) **Hānau Kumulipo i ka pō, he kāne**
 BORN K. Prep Det NIGHT Det MAN
 「夜にクムリポ、男性が生まれた」(Beckwith: 187)

(5-13) **he nui ke kuleana o nā iwi**
 Det BIG Det RESPONSIBILITY Poss.O Det BONE
 「骨の【体における】責任は大きい」(Judd 2003: 91)

(5-14) **ho'i a'e la nā kupuna o Kawelo i Wailua...**
 LEAVE Dir Det GRANDPARENT Poss.O K. Prep W.
 「カヴェロの祖父母はワイルアに移った」(Elbert 1959: 33)

(5-15) **paeaea hou a'ela 'o Hi'iaka i kēia kau**
 CHANT AGAIN Dir Sub H. Obj Dem CHANT
 「ヒアカはこの歌を歌い直した」(Ho'oulumāhiehie 2006: 150)

(5-16) **Make kēlā koa, koe 'o Moomooikio,**
 DIE Dem SOLDIER REMAIN Sub M.
 「その戦士が死に、モオモオイキオが残った」(Elbert 1959: 89)

(5-17) **He mau pua nani kēnā.**
 Det pl FLOWER BEAUTYFUL Dem
 ‘Those (near) are pretty flowers.’ (Hopkins 1992: 6. グロスのみ筆者による)

(5-18) **no ka pāpa'u o ia mau wahi**
 Prep Det SHALLOW Poss.O Dem pl PLACE
 「その場所の浅さのために」(Ho'oulumāhiehie 2006: 2)

(5-19) **ua huli a'ela ua mō'īwahine nei o ke 'ahi**
 TA TURN Dir Dem QUEEN Dem Poss.O Det FIRE
 「火の女王は振り返った」(Ho'oulumāhiehie 2006: 3)

(5-20) **nei 'āina**
 Dem LAND
 “this [fine] land” (Pukui and Elbert 1986: 264。グロスのみ筆者による)

(5-21) **me ko lākou mau mākua mai nō ho'i**
 Prep Poss 3pl pl PARENT Dir Int
 「彼らの両親と一緒に」(Ho'oulumāhiehie 2006: 138)

(5-22) **'o kā lākou mea i 'ike**
 Sub Poss 3pl THING/ONE TA SEE
 「彼らが知っていたこと【は...】」(Ho'oulumāhiehie 2006: 138)

(5-23) **he ho'opunipuni kēia hana a Punia**
 Det DECIEVE Dem ACTION Poss.A P.
 「プニアのこの行為は【壺を】だますことだった」(Elbert 1959: 15)

(5-24) **ua 'ōlelo 'ia ma kekahi māhele o nā kau...**
 TA SAY Pass Prep SOME PIECE Poss.O pl CHANT
 「歌のとあるバージョンは…と言われている」(Ho'oulumāhiehie 2006: 140)

内容語の前に出現する頻度の点では、ka/ke、所有形、k-指示詞が多く、反対に nei、ia などはそれほど頻繁には現れない。

5.1.1.3 数

ハワイ語の場合、代名詞を除けば、名詞の数の標示は必ず行われるものではない。

表中の「複数」の位置（決定詞の後、内容語の前）以外でも、5.1.1.2 で触れた定冠詞（複数）の nā や、内容語の後ろに置き、人物の場合に限るが「～とその仲間たち」のような意味を示す際に比較的高頻度で使用される mā を使用して複数性を表すことは可能である。また、ごく一部の語彙には形による単複の区別があることもある（単数 kanaka 「人」と複数 kānaka など）。

- (5-25) **nānā akula ‘o Hi‘iaka mā i ua kuahu lā**
 LOOK Dir Sub H. pl Obj Dem ALTAR Dem
 (AND FOLKS)

「ヒイアカと旅の供はその祭壇を見た」(Ho‘oulumāhiechie 2006: 128)

- (5-26) **kulu ihola kona mau waimaka**
 FLOW Dir Poss.3sg PL TEAR

「彼女の涙は零れ落ちた」(Ho‘oulumāhiechie 2006: 127)

しかし実際、複数個・複数人と考えられる場合でも、複数マーカーが使用されていないことは少なくない。先に触れた *mā* のように複数のなかでも中心人物が明確な場合以外、あるいは単純に複数であることが重要であり明示したい場合以外は、文脈上判断できるケースが多いこともあり、使用の必然性が低下するものと考えられる。よって、ハワイ語全般において、何らかの形でマークされていれば複数であることが確定するが、複数がマークされていない（決定詞 *ka/ke* が使われている、*mā* や *mau* が句中にない）場合は、その句の中核である内容語が単数か複数かを判断することはできない点に留意する必要がある。

5.1.2 TA 詞

TA 詞は、動詞句中にのみ出現する要素である。先行研究では、ハワイ語は活用をしないとしており、動詞文における時制については、テンス・アスペクトマーカーを用いることで表すといわれる。実際にこれらが表すものがテンスなのかアスペクトなのかについては議論の余地があり、次に紹介する先行研究でも見解が分かれている。本研究では、どの機能語が具体的にどのようなテンスやアスペクトをマークするのかについては立ち入らない。テンスやアスペクトに当たるものをマークする要素として、仮に TA 詞と総称する。

先行研究における代表的な記述は以下の表の通りである。文頭に来る場合とそうでない場合で形が異なるのが基本である。

またそれ以外に、先行する名詞句を修飾する節を作ることができ、現在のハワイ語教育テキスト (Hopkins 1992 など) においては関係節構造として説明される。なお、関係節中に主語がある場合には前方照応の要素として *ai* が必要になり、関係節中に主語がない場合はこの *ai* が不要なため、表中ではカッコで示してある。

表 13 先行研究における TA 詞の記述

位置	TA詞と動詞 の位置関係	Elbert and Pukui (1979)	Schütz, Kanada and Cook (2005)
文頭	ua V	アスペクトマーカ― perfective/inceptive	アスペクトマーカ― ³ active verb の場合 : completion stative verb の場合 : change of state
文中	i V		
名詞修飾 (関係節) 強調構文	i V (ai)		
文頭	e V ana ⁴	アスペクトマーカ― imperfective	アスペクトマーカ― incomplete
文中	e V ana ⁴		
名詞修飾 (関係節) 強調構文	e V (ai)		
文頭	ke V nei ⁴	テンスマーカ― present	アスペクトマーカ― incomplete (indicate an action happening in the present)
文中	e V nei ⁴		
名詞修飾 (関係節) 強調構文	e V ana ⁴		

e V ana と (k)e V nei について、Elbert and Pukui (1979) が前者を未完了のアスペクトマーカ―、後者を現在のテンスマーカ―であるとしている一方、Schütz, Kanada and Cook (2005:56) はいずれもアスペクトマーカ―の incomplete としている。そのうえで、e V ana は意味上「現在進行中のこと」「過去進行中であったこと」「これから起こるであろうこと」を指すことができ、(k)e V nei は現在起こっていることを指すとしている。

e V ana と ke V nei の用法がオーバーラップして見えるが、ke V nei は未来のことを表現するには使用されないとなっているため、e V ana よりやや意味の範囲が狭いと説明することがある (Hopkins 1992:125-126)。

(5-27) ua komo ihola ka hilahila i loko o lāua
 TA ENTER Dir Det SHAME Prep Loc Poss.O 3du
 「彼らは恥ずかしさで一杯になった (*lit.* 彼らの中に恥ずかしさが入ってきた)」
 (Ho‘oulumāhie 2006: 51)

³ このほか、“words that normally function as nouns but behave like verbs”とも共に使用すると述べている。

⁴ これらのパターンについて、Elbert and Pukui (1979) では、動詞の後ろに来ることのできる要素は共通であるとして、nei・ana・ala・lāの4語を挙げている。ただし頻度はやはり表に挙げた形が高いと考えているようである。今回のコーパスでは、確かにalaはあまり現れず、lāはそれに比べれば多いもののやはりnei・anaよりはこの構文での出現数は低いといえそうである。

- (5-28) **ma kēia kūlana hana lā, ‘a‘ole i kūpono**
 Prep Dem PLACE ACTION Dem Neg TA PROPER
 「この場合には、適切でなかった」(Ho‘oulumāhiehie 2006: 117)

- (5-29) **i ‘ane‘i i ho‘onoho ai ‘o Pele i kekahi o kona mau kaikunāne**
 Prep HERE TA SET Dem Sub P. Obj SOME Poss.O
 Poss.3sg pl BROTHER
 「ペレが兄弟のうちのひとりを置いたのはここだった」(Ho‘oulumāhiehie 2006: 2)

- (5-30) **E lawe ana au iā ‘oe**
 TA TAKE Dem 1sg Obj 2sg
 「私がお前を連れていこう」(Elbert 1959: 15)

- (5-31) **pehea ho‘i e hiki ai ia‘u ke pale a‘e**
 HOW Int TA CAN Dem TO+1sg Inf RESIST Dir
 「どうして私に逆らうことができるだろうか」(Ho‘oulumāhiehie 2006: 117)

- (5-32) **ke moe nei nō olua?**
 TA SLEEP Dem Int 2du
 「お前たち二人はまだ寝ているのか？」(Elbert 1959: 29)

- (5-33) **‘o Hi‘iakaikapoliopole ka mea nona kēia mo‘olelo e pane‘e ‘ia aku nei**
 Sub H. Det ONE Prep+3sg Dem
 STORY TA PUSH FORWARD Pass Dir Dem
 「【読者に】提供されるこの物語はヒアカイカポリオペレについてのものである」
 (Ho‘oulumāhiehie 2006: 1)

- (5-34) **hō‘ea i kahi a Hi‘iaka mā e kali ana nona**
 ARRIVE Prep PLACE Poss.A H. pl TA WAIT Dem Prep+3sg
 「ヒアカたちが彼女を待っているところに戻った」(Ho‘oulumāhiehie 2006: 117)

5.1.3 使役の「接頭辞」ho ‘o-

接頭辞 ho‘o-は、単独で語をなすものではなく、本研究では2.4.1で示したように、基本的に今回対象とする時期のハワイ語では、接辞は生産的に使用されていないとみなしている。ただし、ho‘o-は他の接辞に比べれば生産性が高く、ハワイ語の語形成において重要な要素

である。そのため、ここで言及しておく。

ハワイ語において数少ない、生産性の高い接辞であり⁵、Elbert and Pukui (1979:76) は主な機能を Causative/Simulative (deliberate transitive verb を作るもの) としている。また、Schütz, Kanada and Cook (2005:76-77) も同じく Causative (“prefix, which changes the meaning of a stative verb X to ‘cause to be X’”) と Simulative (“...changes the meaning of X to ‘act like X’”) を基本として挙げている。

(5-35a) Ua peku ‘o Kale i ke kinipōpō.

TA KICK Sub K. Obj Det BALL

‘Charles kicked the ball’

(5-35b) Ua ho‘opeku ‘o Kale i ke kinipōpō.

TA CAUSE-TO-KICK Sub K. Obj Det BALL

‘Charles deliberately kicked the ball’

(Elbert and Pukui 1979:77)

語幹になりうる内容語の性質は多様で、Elbert and Pukui (1979) の分類でいえば状態動詞に限らず、動詞全般、名-動詞 (Noun-verb) のいずれでもよいという。

ただし、ho‘o-がつくことによる語の意味変化の仕方に予測のつかない場合や、ho‘o-がついても意味変化が起こっていないかのように見える場合があることも述べられている。

形態的には、付加される語による交替⁶があり、ho‘- (e,a,o,まれに i,u で始まる語幹)、hō‘- (i で始まる語幹の一部)、ho- (声門閉鎖音+長母音を含む語幹、または「名詞化接辞」の-na が付加されている場合)、hō- (声門閉鎖音+短母音、または1~2つの長母音をもつ語幹) が挙げられている。

ハワイ語辞書 (Pukui and Elbert 1986) においては、基本的には本論で接辞として挙げているものと異なり、ho‘o-のついた形は独立した項目ではなく、付加される語の項目に意味・用法・用例が記載されている。そのため、例えば hele “to go” に ho‘o-がついた ho‘ohele “to set in motion” は hele を参照することになる。この扱いから、ho‘o-がハワイ語において「接頭辞」として強く意識されていることが伺える。

⁵ Causative/Simulative の hā- や Qualitative/Stative の mā- などもっと多くの接辞を認める立場があり (Elbert and Pukui 1979:65, 80)、語形成について通時的に考えればそうした接辞のようなものがあつたと考えるのは妥当である。しかし、今回コーパスとしたデータと、辞書 (Pukui and Elbert 1986) を参照すると、本論で「接辞」として紹介している受身の-(C)(i)a、名詞化の-na、ho‘o-のほかは辞書編纂、あるいはその基礎となったハワイ語母語話者の知識やハワイ語テキストの記録が成立した時点で、接辞が付加された形が語彙項目として定着しているとみなされていると想定できる。もっとも、辞書においては、-(C)(i)a や-na の付加された形には扱いに揺れがあるため、今後慎重にその他の「接辞」として挙げられた形態素を確認することで状況が変化する可能性はある。

⁶ 一般向けの教科書ではこうした接辞があることと大まかな機能を述べるにとどめることが多いが、Kamanā and Wilson (2012:46) のように後続する音による異形態の出現規則を教えるものもある。一方、意味の多様さの可能性にはあまり触れていない。

5.1.4 受身のマーカー ‘ia

受動性を表現するには主に 2 種類の方法があるとされ、そのうちのひとつが、内容語の後に受身マーカーを置くものである。

(5-36) **Ua ‘ike ‘ole ‘ia ke keiki.**
 TA SEE Neg Pass Det CHILD
 「その子は見られなかった」 (Elbert and Pukui 1979:83)

(5-37) **e lawe ‘ia mai ana e ou mau kahu, ...**
 TA BRING Pass Dir Dem Prep Poss.2sg pl ATTENDANT
 「あなたの付添人により持ってこられる【スカートは...】」
 (Ho‘oulumāhiehie 2006:33)

(5-38) **nā mea ‘ai a pau o loko o ka imu**
 Det THING EAT ALL Poss.O Loc Poss.O Det OVEN
i ka lawe ‘ia mai a...
 Prep Det TAKE Pass Dir AND...
 「全ての食べものがオープンから運ばれてきて...」 (Ho‘oulumāhiehie 2006:99)

もう一つの方法は、‘ia のように単独の語を用いるのではなく、接尾辞が内容語に付加され、内容語の指す行為を受動化するという方法である (Elbert and Pukui 1979:83-86)。

(5-39) **kau-lia, ulu-a/ulu-hia, holo-kia**
 SUSPEND-Pass POSSESSED⁷-Pass SLIDE-Pass

接尾辞形 -(C⁸)(i)a はある程度生産的とされているが、付加された形がすでに語彙項目として定着しているとみられているものも多い。また、接尾辞がついた語にさらに独立形の‘ia が後続する例もあるとされている。実際に、これに当たると思われる用例はコーパス中に見られた。

(5-40) **‘Ai-na ‘ia ke aku e lākou.**
 EAT-Pass? Pass Det BONITO Prep 3pl
 「そのカツオは彼らに食べられた」 (Elbert and Pukui 1979:85)

⁷ Pukui and Elbert (1986) によれば ulu は intransitive verb とされるが、“possessed by a god”や“inspired by a spirit...”のような対訳を提示されている。ここではそれに従っているため、受身の接尾辞が付く前から-ed が付いているグロスで正しい。

⁸ 現れる子音は、h, k, l, m, n。

(5-41) **me kona ulu-hia pū ‘ia ‘ana**
 Prep Poss.3sg INSPIRED-Pass? TOGETHER Pass Ana
 「彼女がインスピレーションを受けた (こと)」 (Ho‘oulumāhiechie 2006:130)

先行研究ではあまりはっきりと言及されていないが、‘ia は動詞句だけでなく名詞句でも使用される。本研究で使用したコーパスのうち、‘ia の検出・識別のしやすい新表記法のテキストに範囲を限定して用例数を調べたところ (延べ語数 9 万 2215 語)、受身マーカーの用例は 507 例見つかった。内訳を見ると、動詞句中に 421 例、名詞句中に 86 例出現しており、名詞句には‘ana 句 22 例が含まれているが、それを差し引いても名詞句中での使用頻度がそれなりに高いことがわかる。

また、‘ia の付加される共起頻度に着目し、以下に 3 回以上‘ia と共起した内容語を、共起回数が多い順に示す。これらの語は、基本的にはそれ自体の出現頻度が高い語であり、また受身という性質上、他動詞が中心である。例外は‘ō‘ia 「水没する」で、全体で 17 回しか出現していない語だが、この語は必ず‘ia を伴って出現した。ただしこれらは皆出現している場面が同一であり、状況に偏りがある。

(5-42) hō‘ike 「見せる」 ‘ōlelo 「言う」 ‘ike 「見る」 ‘ō‘ia 「水没する」
 kapa 「呼ぶ」 ki‘i 「得る・呼ぶ」 lawe 「取る・運ぶ」 ‘ai 「食べる」
 hea 「(名を) 呼ぶ・うたう」 ho‘opuka 「言う・主張する」
 ho‘omākaukau 「準備する」 kā 「打つ」 kāhea 「呼ぶ」 lohe 「聞く」
 kālua 「焼く」 mālama 「守る・気に掛ける」 pā 「得る・掴む」
 pa‘a 「固める・得る」 ‘ae 「肯定する」 hāpai 「運ぶ・支える」
 hele 「行く・来る」 ho‘okō 「満たす・実行する」
 ho‘onoho 「住む・設置/配置する」 ho‘oulu 「育つ・かきたてる」 hūnā 「隠れる」
 kū 「立つ」 pūlumi 「掃く・(敵を) 排除する」 hā‘awi 「与える」
 hana 「はたらく・する・作る」 holehole 「剥く」 ho‘olaha 「広める」

一方、他の機能語との共起だが、動詞句・名詞句それぞれ、受身かどうかに関わらず頻出である TA 詞や冠詞などが偏りなく出ている。

また、上で触れたが、受身のマーカー‘ia で未だ記述が不十分な点は (接尾辞形が受身を示す要素だと仮に認めるとした場合)、接尾辞形との共起関係や使い分けである。ha‘ina 「言う」の-na、haua 「捧げ(られ)る」の-a、uluhia 「(神などに) インスピレーションを受ける」の-hia などが受身を示す接尾辞だと分析されうるものであり、本研究の範囲では、数は少ないがこれらが‘ia を伴う例は確かに見られた。ただし、例えば uluhia を例とすると、そもそも語幹の ulu 自体が辞書では “inspired by” と定義されており、実際にどのような統語的操作が行われたのか判然としない。他の語も同様に、辞書の定義の正確性の問題もあるため、接尾辞形と独立形のマーカー‘ia が共起する場合の議論には更なるデータが必要である。以上を踏まえ、本研究では、関連し合う語の形との比較から、何らかの接尾辞の付加

という過程はどこかの段階で経ていると考えるが、その接尾辞がどのような機能を有するか、例えば実際に先行研究の通り受身を示すかなどについては更なる考察を要するものとするに留める。

5.1.5 後置代名詞

どの句構造でも最も外縁部に位置するのがいわゆる「後置代名詞」とされる一群である。ここでは一つにまとめているが、呼称やグループに含まれる要素には、先行研究ごとにバリエーションがみられる。なお、一部はすでに TA 詞の構造に含めて触れている。

Elbert and Pukui (1979) では \emptyset -demonstrative として *ala*, *lā/-la*, *ana* の 3 つが挙げられ、また *ai* や *nei* も後置詞として挙げられている。Pukui and Elbert (1986) の記述、および Schütz, Kanada and Cook (2005) の記述を合わせると、それぞれは主に以下のような機能を持つと考えられる。

表 14 先行研究における後置代名詞の記述⁹

		Elbert and Pukui(1979), Pukui and Elbert (1986)	Schütz, Kanada and Cook (2005) ¹⁰
ala	主な機能・特徴	代名詞: ‘there’ (lā や-la のバリエーション)	代名詞: ‘there’ -lā/la のバリエーションだが、方向詞に後続しない点で異なる
	名詞句	文学では ua N ala の形で頻出する	<左記への言及>
	動詞句	進行相のマーカである ke V X の X に入ることができる	関係節中の前方照応マーカになる
lā/-la	主な機能・特徴	代名詞 kēlā(that), pēlā (like that)などの後部要素にあたる lā は歌のリフレインなどに使用される(意味は特に持たない) la は方向詞に付加される例が多い	代名詞: ‘that’ kēlā(that), pēlā (like that)などの後部要素にあたる aku, mai に la がつき、narrative におけるアスペクトマーカを形成する
	名詞句	ua N lā (aforementioned)の形で頻出する	ua N lā の形で出現する
	動詞句	ke V X の X に入ることができる	V の後に現れる
ana	主な機能・特徴	代名詞: 動詞に後続し、single event であることを示す	動詞マーカの種類 (代名詞としては見ていない)
	名詞句	<Pukui and Elbert (1986) に名詞句中の用例がある>	Hawkins (2003) の見解として、名詞である“life-stage” words (keiki 「子供」など)と共起するほか、一部の若い話者には non-verbal predicates の ana の共起が見られる <左記への言及>
	動詞句	最もよく見られるのは e V ana (imperfective) の構造である	e V ana (incomplete) を典型とする <“single event”を指すといわれるものを別項として立てているが、両者の関係の有無は不明瞭としている>

⁹ 明文化されていないが、挙げられている用例などから判断されることがある場合、<>内にて補足した。

¹⁰ 基本的には Elbert and Pukui (1979), Pukui and Elbert (1986)を引いており、一部修正や追記がある。そのため一部の語・用法について、“see EP” (Elbert and Pukui 1979)などとするのみで詳細に言及がない場合もあり、表中「左記への言及」とあるのはそうしたケースをさす。

ai	主な機能・特徴	“linking or anaphoric particle”	前方照応マーカー
	動詞句	名詞に後続する動詞句構造（関係節構造）として、e V ai や i V ai の形で現れる	基本的には補語に refer し、関係節構造の一部として現れる e V ai 構造では、nei, ana, ala, la と置き換え可能であるとされる
nei	主な機能・特徴	代名詞	代名詞：‘this’ 前方照応マーカー
	名詞句	ua N nei (this aforementioned) の形で現れる 名詞や方向詞に後続し、「過去」の意を示すこともある 名詞・代名詞に後続し、affection を含む「この」の意を示す 名詞に先行する場合、好ましき・軽蔑性の両方を示す	ua N nei の形で現れる 名詞・代名詞に後続する際、affectionate sense をもつ 名詞に先行する場合、共起する語の性質により好悪いずれかの感情的なコンテキストをもつ 方向詞や時を表す名詞に後続し、「過去」を表す
	動詞句	ke V nei (present) の形で現れる	ke V nei の形で現れる 関係節構造で現れる (e V nei)

以下に後置代名詞の各用法の例を挙げる。それぞれ、(5-43) は動詞と ala の例、(5-44) は動詞と lā の例、(5-45) は動詞と ana の例、(5-46) は動詞と ai の例、(5-47) は名詞と nei の例である。

(5-43) ke 'ike ala 'o Hi'iaka i ke kanaka u'i maori
 TA SEE Dem Sub H. Obj Det MAN PRETTY TRUE
 「ヒイアカは本当に美しいその男性を見て…」 (Ho'oulumāhiechie 2006: 147)

(5-44) ke lohe lā nō 'o Hi'iakaikapoli i ia mau kama'ilio
 TA LISTEN Dem Int Sub H. Obj Dem pl TALK
 「ヒイアカはこの会話を聞いていて…」 (Ho'oulumāhiechie 2006: 30)

(5-45) E lawe ana au iā 'oe
 【=(5-30)】 TA TAKE Dem 1sg Obj 2sg
 「私がお前を連れていこう」 (Elbert 1959: 15)

(5-46) **pehea** **ho'i** **e** **hiki** **ai** **ia'u** **ke** **pale** **a'e**
 【=(5-31)】 HOW Int TA CAN Dem TO+1sg Inf RESIST Dir
 「どうして私に逆らうことができるだろうか」 (Ho'oulumāhie 2006: 117)

(5-47) **ua** **huli** **a'ela** **ua** **mō'īwahine** **nei** **o** **ke** **'ahi**
 【=(5-19)】 TA TURN Dir Dem QUEEN Dem Poss.O Det FIRE
 「火の女王は振り返った」 (Ho'oulumāhie 2006: 3)

5.2 ‘ana

この節では機能語‘ana について考察する。この語の由来だが、ポリネシア祖語 (Proto-Polynesian) における祖形は-(C)(a)nga と考えられる (Chung 1973)。Chung (1973:651) によれば、これは動詞に付加される名詞化接辞 (nominalizing suffix) であったという。

ハワイ語の場合、この祖形が接辞形-na と「分離形」‘ana とに分岐しつつ両者とも名詞化に関わる役割を引き継いだと推測されるが、二つの形の間には統語的・意味的な違いがあるとされている (Elbert and Pukui 1979: 80-81, Schütz, Kanada and Cook 2005:136 など)。接辞から分離形へ、という変化は文法化の方向としては稀であるが、現時点ではこの流れが妥当な見方である。接辞形と分離形の違いで分かりやすいものとしては、間に修飾語など他の語が挿入できるかどうか挙げられる (5.2.1 参照)。

本研究の分析においては、独立した語とみなされる分離形‘ana を対象とし、「語」の一部として解される接辞形は基本的に対象外とした。

5.2.1 ‘ana に関する先行研究の記述

Elbert and Pukui (1979:79-83) では‘ana は主に post-verbal の位置に現れる要素であり、先行する語を名詞化する機能を持つ particle として説明されている。出現する位置が同じく動詞のうしろで、‘ana 同様に名詞化の機能を持つ接尾辞形-na と比較されている。

両者の、1 語と見なされるかどうか以外の主な違いは、「修飾語に後続されるか否か (-na 形は可能、‘ana は不可能。修飾語は、ここでは名詞化された語彙を修飾することを指しており、‘ana であれば修飾語を置くとするなら‘ana の前に来ることになるため、確かに後続はしない)」ということが挙げられている。そのほか、意味の違いについては、次のように説明している

“The semantic difference is that -na words usually designate a single act or object (Alexander [1968:25] calls it “the result or the means of the action... [rather than] the action itself”), whereas the combination verb + ‘ana usually represents an ongoing process, frequently translated into English by the present participle.”

(Elbert and Pukui 1979:80)

接辞形はさておき、‘ana の記述をさかのぼると、名詞句中の‘ana を「現在分詞 /-ing 的」とみなす分析が、Andrews (1854) に提示されている。Andrews (1854) では、まず ana は現在分詞の構文 (e V ana) の一部であり、英語の現在分詞-ing に対応するもの、としている。ただし、この研究では声門閉鎖音を (少なくとも表記法上は) 認めていないため、新表記法における ana と ‘ana が区別されず、ひとつの語 (語彙素) として扱われている可能性がある。したがって、Andrews が、V ana に決定詞が前接することで名詞的に扱われるものがある、として例示している ana は、新表記法での ‘ana の用法にあたると思われる。ana

と ‘ana とは、このように出現位置が異なるため、別の語であると考えられる分析が良い¹。そもそも両者は「動詞句構造の一部」と「名詞句構造の一部」という別の領域での話である。

Hopkins (1992) はハワイ語の教科書のなかでも最も広く知られるものであるが、この ‘ana を名詞化辞として導入している (a nominalizing particle that turns verbs into nouns describing actions)。

以上述べてきたように、‘ana は PPN 由来の要素で、ハワイ語では独立した文法要素「名詞化辞」である、とする説明が広く認められている。

ただし、この説明には問題点もあり、すでにいくつかの先行研究でも指摘されている。特に問題点となるのは、以下の3点である。

- ① 明らかに動詞と見なすことのできる多くの用例を持つ内容語²が ‘ana なしに「名詞化」³されていると見なせる場合がある、
- ② 明らかに名詞と見なすことのできる多くの用例を持つ内容語に ‘ana が後続する例がある、
- ③ ハワイ語には、すでに第 2.2.3 節で説明したように、語単独では動詞か名詞かを判断できない単語が多い。

これらについて、具体的な指摘を以下で説明する。

Hawkins (1992) は、‘ana を含む名詞句が目的語になるという条件下⁴では、名詞化辞である ‘ana は省略されうるが、「名詞化」というプロセスが存在した痕跡として、決定詞が残ることがある、としている。結果として本来 ‘ana がある方が自然である場合にも、「決定詞＋内容語」だけが文に現れることになる。

また、同研究は品詞に関して、動詞・名詞の区別がないとはしないものの、動詞・名詞のどちらとして現れる用例が多いとすることができない語彙素が多いとしている。このようなハワイ語の品詞認定に関する難しさを指摘している一方で、そうした動詞・名詞のどちらとも判断できない語彙素が名詞として使用された場合は「名詞化」ではない、とも述べている。このため、Hawkins (1992) の記述に基づいても、名詞化が起きている・起きていないを判断することは困難である。

塩谷 (2000) では、‘ana が付加されることが予期される場合、つまり名詞化が起こるであろう場合にも実際には付加されないまま名詞として使用される例が多いこと、また Elbert and Pukui (1979) を引き、明らかな名詞に ‘ana が付加された例があることを挙げている。

¹ 語学教科書である Kamanā and Wilson(2012:127)は、TA の構えである e V ana との混同について、“This confusion is based on English “-ing” sometimes being equivalent to “e – ana” and sometimes being equivalent to “ka’i (筆者注：いわゆる「前部要素」) ”-‘ana.”と述べており、実際現在の学習者の大半は英語話者であり、英語に基づいて考える回路が形成されている。なお、この影響はおそらく現在の話者に限ったことではなく、文字記録の文化は英語(等)の外国語の影響と初めから無縁ではないため、英対訳の干渉は常に配慮すべき点である。6章でも類似の問題に触れる。

² 本研究の立場では、2.2.3 で提示した通り、内容語はレキシコンのレベルでは動詞・名詞とは決められていない。それでも語によっては、名詞としての用法が優勢であるとみなせるもの、動詞としての用法が優勢であるとみなせるものもある。この(1)(2)ではそうした語彙素を指している。

³ 仮に、名詞化というプロセスがあると考えた場合である。

⁴ なお、この条件が妥当なものであるかは現時点では不明である。

その Elbert and Pukui (1979) は、nominalizer でありながら名詞に付加される例もある、として次のような例を挙げている。

- (5-48) **ka ‘āina ‘ana**
 Det LAND Ana
 ‘the giving/or forming or distribution/ of land’ (Elbert and Pukui 1979: 80)

この‘āina は「土地」を意味する語である（名詞用法の方が多いためであり、Pukui and Elbert 1986 の辞書項目においても名詞とされている）。しかし、先の例では英対訳を見る限り、「土地」に関係する動作をも‘āina 一語に含まれていることになる。

最終的には‘ana 句全体で名詞として働いているので、もし‘ana が名詞化辞であるという立場に固執するならば、まず最初に、本来名詞である‘āina が形態的変化を伴わずに動詞化され、その後、動詞となった‘āina が‘ana により名詞化された、ということになる。つまり、「名詞→動詞→名詞」というプロセスを経ていることになる。

この例について、Elbert and Pukui (1979: 80) は、

“[...] after words commonly used as nouns, ‘ana seems to give a verblike meaning to the noun head, which of course remains a noun.”

と説明を添えている。日本語で対応を考えてみると、いわば「土地-する(-こと)」のような語が作られ、それに何らかの意味で土地が関わってくる動作、という意味が与えられたことになる。文脈情報がない用例であるため詳細は不明だが、文脈により解釈可能であれば、こうした名詞から動詞への品詞転換が生じた可能性があることが示唆されている。

もしこれが動詞・名詞を相互に品詞転換する要素であるといえれば興味深いですが、そもそも‘āina ほど名詞句の中核としての用法が支配的である内容語は多くない。今回のコーパスを見ても、この仮定を裏付けるデータは得られなかった。Elbert and Pukui (1979) 以降の他の研究でも、類例などは見られない。

さらに、別の問題点として、Schütz, Kanada and Cook (2005:21)は‘ana の有無のみ異なるミニマルペアを挙げ（ただし出典が不明）、‘ana 句と非‘ana 句とで意味上の違いがあることを指摘している。

- (5-49) **Ua nānā au i ka hula o kēlā hālau.**
 TA WATCH 1sg Obj Det HULA Poss.O Dem HĀLAU
 ‘I watched the hula (style) of that hālau.’
Ua nānā au i ka hula ‘ana o/a kēlā hālau.
 TA WATCH 1sg Obj Det HULA Ana Poss.O/A Dem HĀLAU
 ‘I watched the hula dancing of that hālau.’

(Schütz, Kanada and Cook 2005:21。グロスのみ筆者による)

これまで述べてきたことを踏まえると、本研究では先に述べた通り、品詞は文の中でのみ判断されると考えている。よって、「名詞化」、言い換えれば「もとは動詞であるものを名詞として扱うようにする」というプロセスそのものを考慮せずとも、‘ana は、ある語が名詞として振る舞っているときに共起する要素である、とのみ考えればよいといえる。つまり、‘ana は名詞句の中にのみ現れる要素である、と規定するわけである。

ただし、そのように言い方を変えたとしても、結局のところ‘ana の分布上の特徴を指摘しただけで、その性質を十分に明らかにしたとはいえない。実際にどう使用されるか、使用できない条件があるか等を明らかにしなければ、‘ana は任意性の高い要素である、ということしか言えておらず、記述としては不十分である。

先行研究をもとに、‘ana の分析の出発点を確認するならば、それは以下のようにまとめられる。

- ①通時的には Chung (1973) で触れられているような、名詞化接辞に由来するものであると考えてよい
- ②本論の対象とする時期のハワイ語において、共時的に見れば「‘ana が必要／不要」、あるいは「‘ana の使用が望ましい／望ましくない」基準が不明瞭である

5.2.2 用例に見る ‘ana 句

前節で述べた先行研究の状況を受け、以下では具体的な用例を材料として‘ana の性質に関する考察を進めていく。本節では、初めに、先取りも含めつつ、筆者による‘ana の分析をどのように進めたかの過程を提示し、その後コーパスより得られた具体的なデータを示す。

岩崎 (2009) では、本研究でいう自然継承期ハワイ語の‘ana がどのような機能をもつものであったかを用例に基づいて考察し、以下のような結論を提示した。

- ① 統語的性質 : 内容語に付加され、「前部要素＋内容語＋ ‘ana」の形をとる。その句は全体では、前部要素（決定詞）のもとに名詞句として機能する（よって ‘ana が「名詞化」を起こしているとは見ない）。
- ② 意味機能的性質 : 句の中で、先行する内容語が、「動作性（行為・状態そのものを示す）」を持つものであることを、明示あるいは強調する働きをしている。その結果、同一の内容語により表される「行為・状態に関係するモノ」を指すという他の解釈の可能性を失わせ、曖昧さを打ち消す機能をもつ。

ある程度‘ana を記述できたものの、課題として残った点も多かった。そのうち、本研究での再考察にあたりはじめに問題としたことは、どちらも行為名詞句であるにも関わらず、‘ana がある場合と無い場合があるならば、両者の違いはなんであるか、ということである。

この点が説明できれば、‘ana が使用される条件・使用されない条件や、‘ana が使用された場合に果たす役割を明らかにすることにつながると考えられる。

よって‘ana の有無による違いがあるか、あるとすればどんな違いであるか、が記述の対象である。具体的な分析に当たっては、‘ana が無い場合に着目するより確実な方法として、まず‘ana がある場合の句の特性を一通り明らかにするところからスタートした。‘ana が名詞句に現れる要素であることは先行研究に共通することであるし、念のため動詞句中にのみ現れる機能語との共起関係もチェックした（後述）が、やはりそれらと共起することはなかった。

このように句の特性といっても、‘ana を含む句が名詞句であることはすぐ確認ができたため、実際に着目したのは句が現れる「環境」である。

このうち、‘ana と共起する語・共起しやすい語が結果的に検討の中心となった。‘ana と共起する要素のうち、‘ana 句の中核部となる内容語と、その内容語の前に置かれる決定詞などの前部要素とは、筆者自身の先行研究（岩崎 2009）でも着目し、取り扱った。今回はそれに加え、機能語同士の共起関係に着目することとした。そのほか、地の文（3人称文）・会話文（1・2人称文の頻度が高くなる）・チャント（祈祷）文など文自体の属性にも着目したが、‘ana の使用を促進・抑制している顕著な偏りは見つからなかった。

‘ana とさまざまな機能語との共起関係についてはのちにデータを提示するが、‘ana 句が全体としては名詞句として働くことから予想される通りの結果であり、一例の例外もなかった。ただし、動詞句にのみ現れる要素が出ないのは予想されていたとしても、名詞句にのみ現れる要素や名詞句・動詞句のいずれとも共起する要素について、何がどの程度出現するか、という具体的なデータをまとめて提示したものは管見の限りなく、その点では有意味であると考えられる。

‘ana と内容語との共起関係については今回も引き続き重視した。結果として一定の意味の傾向を抽出することはできたが、いずれの傾向も、実は ‘ana が現れない場合にも観察されるものであった。したがって、‘ana の使用上の特徴について述べる場合、個別の事例（＝具体的な語彙項目や、場合によっては用例のレベル）を一つずつ提示・説明することはできても一般化は難しいようである。

以上が結論の先取りを含めた、本研究における‘ana の分析・考察の概要である。元来、先行研究の不明点を解消し、‘ana を使用する条件をより明確にすることを求めてスタートした分析の結果としては、明確に述べられる事項はあまり得られなかった。ただし、本研究の‘ana に関する考察過程で明らかになった、‘ana と共起する語の特性や量的な情報については、整理し明示することで今後の研究に資するところがあると考え、現時点での研究結果として取りまとめ、経過を含め提示しておく。

5.2.2.1 ‘ana と他の語の共起関係

5.2.2.1.1 ‘ana と共起する機能語

実際に共起した語を見ると、内容語の性質が明らかに‘ana の出現に関連しているとは言えないが、機能語の場合はそもそも考えられる要素が限定されているため、もう少し明確に関連を示すことができる。

以下では、純粹に内容語との位置関係にのみ着目して、内容語の前・後に現れる要素にわけて共起関係を見る。

まず内容語の前に出る要素は、以下の通りである。

- 冠詞
- 指示詞
- k 所有形
- 否定辞
- TA マーカー

次の表にこれらの出現数を示したが、注記しておきたいことがある。それは、表にある要素がすべての機能語を網羅しているわけではない、という点である。表にあげた機能語は、いずれも一定数の出現回数があり、ハワイ語の機能語として珍しくない、むしろ主要な機能語であるが、3sg 以外の k 所有形⁵や、i・e のような TA マーカーなど、主要な機能語は、これら以外にもある。しかし、表に含まれていない機能語は、同音の異なる機能語が数多くあるなど、形だけから同定することができない。したがって、コーパス全体を対象に識別する作業をすると手作業でおこなわざるを得ず、非常に手間がかかるため、今回含めていない。もっとも、こうした機能語の識別に関する困難は、表中にある機能語のほとんど全てに当てはまるが、これらを見ずに‘ana の他の機能語との共起関係を考察することはできないため、一例ずつ確認を行ったうえでカウントしたものである。また今回は、位置的には内容語の前であるが、内容語との間に必ず決定詞を挟むことになる前置詞を考慮していない。

⁵ ko‘u (1sg.O), kou (2sg.O), ka‘u (1sg.A), kāu (2sg.A) については、‘ana との共起数については数えたが、総出現例の識別を行っていないため表には含めていない。ここに共起数のみを記載する： ko‘u 9 例、kou 6 例、ka‘u 3 例、kāu 9 例。表中にある 3 人称との差異はあるが、どのテキストも大半が 3 人称の語り手による文であり、総出現数の違いも大きいので、有意な差があるわけではないものと思われる。

表 15 ‘ana と内容語より前に出現する他の機能語との共起数

	機能語	‘ana との 共起数	総出現数	‘ana と共起する 割合
名詞句に 見られる機能語	ka (Det)	691	9548	7.24%
	ke (Det)	143	3258	4.39%
	kona (Poss/O)	71	618	11.49%
	kāna (Poss/A)	16	220	7.27%
	‘a‘ohe (Neg)	9	216	4.17%
	he (Det)	27	2387	1.13%
	ua (Dem)	2	692	0.29%
	kekahi (SOME)	3	487	0.62%
cf. 動詞句に 見られる機能語	ua (TA<完了>)	0	1346	0.00%
	‘a‘ole (Neg)	0	478	0.00%

以下に、各機能語と‘ana の共起している例を示す。下線部が‘ana 句であり、それぞれ、(5-50) は決定詞 ka との共起の例、(5-51) は決定詞 ke との共起の例、(5-52) は 3 人称所有形・O タイプ kona との共起の例、(5-53) は 3 人称所有形・A タイプ kāna との共起の例、(5-54) は否定辞‘a‘ohe との共起の例、(5-55) は決定詞 he との共起の例、(5-56) は指示詞 ua との共起の例、そして (5-57) は「いくつかの」の意を示す kekahi との共起の例である。

(5-50) **pau** **ka** **‘ai** **‘ana** **a** **Lohi‘au mā, ...**
 FINISH Det EAT Ana Poss.A L. pl
 「ロヒアウ達が食べるのを終わると…」 (Ho‘oulumāhiehie 2006: 13)

(5-51) **i lohe aku ai ‘o ia** **i ke kāhea ‘ana mai**
 TA HEAR Dir Dem Sub 3sg Obj Det CRY Ana Dir
 「彼女は呼ぶ【声】を聞いた」 (Ho‘oulumāhiehie 2006: 122)

(5-52) **me kona huli ‘ana a‘e a nīnau i ke aikāne**
 Prep Poss.3sg.O TURN Ana Dir AND ASK Obj Det FRIEND
 「友人に振り返って尋ねた (lit. 振り返ることとともに、友人に尋ねた)」
 (Ho‘oulumāhiehie 2006: 49)

(5-53) **ho‘āuau mai la** **kāna hele ‘ana**
 HASTEN Dir Poss.3sg.A GO Ana
 「彼女は急いで行って… (lit. 彼女の動くのを速めて)」 (Ho‘oulumāhiehie 2006: 64)

(5-54) ‘a’ohe ‘olena ‘ana i koe
 Neg NOTHIING Ana TA REMAIN
 「もう言うべきことはなく、」 (Ho‘oulumāhiechie 2006: 52)

(5-55) he lohe ‘ana kō Kona nei
 Det HEAR Ana Poss.O K. Dem
 「コナ【にいる彼】に聞こえている (*lit.* コナのは聞くことだ)」 (Elbert 1959: 61)

(5-56) ‘emo ‘ole ua miki ‘ana aku o ua lima ku‘i nei
 WAIT Neg Dem QUICK Ana Dir Poss.O Dem HAND SMITE Dem
 「打ち付ける手は素早く… (*lit.* 打ち付ける手の速さは遅れることなく)」
 (Ho‘oulumāhiechie 2006: 89)

(5-57) He kiwi kekahi huki ‘ana
 Det BEND SOME PULL Ana
 「【筋肉を】引っ張ると屈曲する (*lit.* 引っ張ることは曲がることだ)」 (Judd 2003: 26)

動詞句に見られる機能語との共起が一例も出ないのは、‘ana 句が全体としては名詞句として働くことから予想通りである。

定冠詞に相当することから総出現数自体も多い ka/ke が、‘ana と共起する回数においても圧倒的に多い。ただし、内容語ごとにどちらが使用されるか決まり、機能に違いはないはずの ka/ke で‘ana と共起する割合が大きく異なる理由は不明である。そのほか、否定辞も割合としては高くなっている (ただし否定辞は出現数自体が少ない)。

また、所有形 kona/kāna はどちらも‘ana と高い割合で共起すると言える。二つの形の違いは所有形のうち O 形・A 形のいずれであるかによる。これらの所有形は関係節中の主語⁶を表すために付加されるが、‘ana においても同様に、‘ana が付加される内容語の動作主や被動者 (主に内容語が受身形の場合) を表す。岩崎 (2009) では O/A の違いについて、先行研究が言及してきたように O 形が多いが、同時に A 形も少なくない数が出ており、どちらが支配的とは言えないとした。今回所有形については 3 人称単数の形のみを取り上げているが、状況は同じである。また、割合としては少ないが、同じ内容語が O/A 両方と共起する⁷例が見られた (hele 「行く」、ho‘i 「返る」、kāhea 「叫ぶ・呼ぶ」、‘ōlelo 「言う」など)。

次に内容語の後に出る要素であるが、

- 受身
- 方向詞

⁶ 関係節が修飾する名詞句が関係節の目的語であれば A タイプ、関係節が修飾する名詞句が場所・時間・理由にあたるか、関係節中の動詞が受動態または状態動詞であれば O タイプを使用するという違いがある。

⁷ 使い分け規則を導き出すにはデータ量が不足しており、本研究でも仮説の提示には至らなかったため、今後の課題とする。

が考えられる。このうち後置代名詞についてはその性質について判然としないところがあり、語形的にも総出現数のカウントに困難があるため、今回は考察対象から外している。これは今後加えるべきデータと考えている。

ただし受身の標識‘ia は、旧表記法で記された資料では、語形のみでは同定できず、検出・識別が難しい。そのため、これについては新表記法に範囲を限定して出現回数を調査した(述べ語数9万2215語)。

表 16 ‘ana と内容語より後に出現する他の機能語との共起数
(‘ia は新表記法による資料のみ)

機能語	‘ana との共起数	総出現数	‘ana と共起する割合
‘ia (受身)	22	507	4.34%
mai (toward)	184	2611	7.05%
aku (away)	150	2214	6.18%
a‘e (upward)	51	948	5.58%
iho (downward)	41	700	5.86%

以下に、各機能語と‘ana の共起している例を示す。下線部が‘ana 句であり、それぞれ、(5-58) は受身マーカー‘ia との共起の例、(5-59) は話者に近付いてくる方向を示す方向詞 mai との共起の例、(5-60) は話者から離れていく方向を示す方向詞 aku との共起の例、(5-61) は上に向かう方向を示す方向詞 a‘e との共起の例、そして (5-62) は下に向かう方向を示す方向詞 iho との共起の例である。

(5-58) no kēia ‘ōlelo ‘ino ‘ia ‘ana kā lākou milimili ali‘i aloha
Prep Dem SAY BAD Pass Ana Poss.A 3pl BELOVED CHIEF LOVE
「彼らの愛する大事な首長が悪く言われたことについて」(Ho‘oulumāhiehie 2006: 83)

(5-59) ‘ike akula ‘o Haili i ka pane‘e ‘ana mai
SEE Dir Sub H. Obj Det MOVE ALONG Ana Dir
「ハイリは【葉が】近づいてくるのを見た」(Ho‘oulumāhiehie 2006: 62)

(5-60) me ka mākaukau no ka ho‘olilo ‘ana aku iā Mahiki
Prep Det READY Prep Det CHANGE Ana Dir Obj M.
「マヒキを【だめに】変えてしまう準備ができて」(Ho‘oulumāhiehie 2006: 116)

(5-61) pau kāu paeaea ‘ana a‘e nei
FINISH Poss.2sg.A CHANT Ana Dir Dem

「あなたが歌うのをやめた」(Ho‘oulumāhiechie 2006: 51)

(5-62) **ma ka no‘ono‘o ‘ana iho,**
 Prep Det THINK Ana Dir
 「思えば (lit. 考えることには)」(Elbert 1959: 109)

次に、文献ごとの出現数を見る。これにより、書き手による偏りや、文章の分野による差異などが明確にできる可能性があると考えた。

以下の表では左から順に、初出年代の古いものから新しいものへと並べている。ただし、Pule Kahiko に関してはその点がはっきりしないため、必ずしも最も新しいというわけではない。

表 17 文献別：‘ana と内容語より前に出現する他の機能語との共起数

	Anatomia		Kumulipo		Hi'iaka		Fornander Selection		Pule Kahiko		合計	
	'ana	全体	'ana	全体	'ana	全体	'ana	全体	'ana	全体	'ana	全体
ka (Det)	128	1601	8	764	480	4798	68	978	7	1407	691	9548
ke (Det)	22	615	0	212	89	1639	26	340	6	453	143	3259
kona (Poss/o)	10	90	0	26	55	406	3	67	3	29	71	618
kāna (Poss/a)	0	16	0	36	15	107	1	55	0	6	16	220
'a'ohe (Neg)	0	2	0	2	9	167	0	36	0	9	9	216
he (Art)	0	341	0	268	26	1308	1	222	0	249	27	2388
ua(DEM)	0	26	0	2	2	611	0	37	0	16	2	692
kekahi ("some")	3	235	0	1	0	218	0	32	0	1	3	487
ua(TA)	0	230	0	5	0	853	0	139	0	119	0	1346
'a'ole	0	99	0	1	0	281	0	91	0	6	0	478
合計	163	3255	8	1317	676	10388	99	1997	16	2295	962	19252

表 18 文献別：‘ana と内容語より後に出現する他の機能語との共起数

	Anatomia		Kumulipo		Hi'iaka		Fornander Selection		Pule Kahiko		合計	
	‘ana	全体	‘ana	全体	‘ana	全体	‘ana	全体	‘ana	全体	‘ana	全体
‘ia (Pass)					22	478					22	478
mai (toward)	0	96	0	14	172	1295	0	229	0	195	172	1829
maila (toward)	0	16	0	3	12	621	0	129	0	13	12	782
aku (away)	1	73	0	7	141	1109	5	175	0	42	147	1406
akula (away)	0	9	0	0	3	572	0	211	0	16	3	808
a'e (upward)	1	28	0	3	50	430	0	41	0	18	51	520
a'ela (upward)	0	1	0	0	0	347	0	72	0	8	0	428
iho (downward)	0	18	0	0	37	225	0	32	0	7	37	282
ihola (downward)	0	27	0	0	3	264	1	126	0	1	4	418
方向詞 合計	2	268	0	27	418	4863	6	1015	0	300	426	6473

内容語の前に出る要素・後に出る要素の両方に共通して言えることとしては、Kumulipo と Pule Kahiko での‘ana の出現数が著しく低いことである。この2つは、一つの作品としての長さや性質は異なるものの、いずれもチャント文であるという点では同じである。

Kumulipo は創世神話として、世界にある様々な存在が誕生する様子を描いているため一概に言い切れないが、Pule Kahiko は神々など、主に何らかの点で「上位」に位置する存在に対して向けられる内容のものが多く、こちらは韻文であると同時に語りかけの文体であるといえる。

そのような場合には‘ana の使用が少ない、というのは傾向として言える。

一方、Anatomia での使用がやや多い点にも着目してもよいかもしれない。ただしこれは何かのテキストをハワイ語に訳したものではないが、基にあるのは西洋医学（解剖学）の

考え方であり、著者は非ハワイ語母語話者であることも確かである（ニューヨークで学位を取得しており、英語母語話者である）⁸。

5.2.2.1.2 ‘ana と共起する内容語の具体例

名詞でも「走り」「詠い」「泳ぎ」のように行為を示すものは多くある。こうした「行為名詞」といえるようなものは、名詞化接辞のようなものが必要な場合もあれば、明らかな形態の変化なしに動作動詞と同音形でこのような意味を示すことができるものもある。

そこで、‘ana 句の場合はどうなるかを見るため、‘ana と共起する内容語、さらにいえば‘ana 句の中核部になる内容語に着目した。各機能語と‘ana の両方と共起しやすい内容語については以下のようなものである。

各項目、共起回数の多い順に並べている。ただし、ka は6回、ke は3回、he は2回以上‘ana との共起があった語を挙げた。ua、kekahi、‘a‘ohe は例数が少ないため、全ての語を提示してある。

表 19 各機能語－内容語－‘ana の構文で出現数の多い内容語

機能語	内容語
ka (Det)	‘ōlelo 「言う」 pau 「終える」 hele 「移動する」 lohe 「聞く」 ‘ai 「食べる」 ‘ike 「見る」 holo 「動く」 ho‘omau 「続ける」 hana 「（何かを）する」 nīnau 「尋ねる」 hiki 「着く」 loa‘a 「得る」 noho 「住む・座る」 hānau 「産む」 hui 「繋ぐ」 huki 「引く」 lele 「飛ぶ」 hō‘ea 「着く」 make 「死ぬ」 pili 「結ぶ」 ho‘i 「戻る」 upa 「打つ」
ke (Det)	kama‘ilio 「話す」 kāhea 「呼ぶ・叫ぶ」 kaua 「戦う」 kani 「音がする・鳴く」 kū 「立つ」 komo 「入る」 kaha 「(波などに) 乗る・滑る、切る」 ola 「生きる」 paeaea 「謡う」 po‘i 「波が砕ける」 a‘o 「教える・学ぶ」 kipa 「訪ねる」
‘a‘ohe (Neg)	kā ⁹ 「打つ」 kū 「立つ」 ho‘okanahuha 「不機嫌にする」 ‘apa 「遅らせる」 ho‘ohewahewa 「誤解する」 kama‘ilio 「話す」 ‘au‘a 「我儘な」 ‘ōlelo 「言う」 ‘olena 「否定する」
he (Art)	wili 「曲げる・ねじる」 kuehu 「かき混ぜる、波立たせる」 kaha 「滑降する」 ‘ōlelo 「言う」 lohe 「聞く」 kiani 「はね飛ばす」
ua (Dem)	miki 「素早い」 pololei 「正しい」
kekahi (“some”)	ho‘omaka 「はじまる」 huki 「引く」 ‘ōlelo 「言う」

⁸ ただし、今回対象としている共時態において、まとまった分量のテキストの作成に携わった人々の多くは、そもそも文字記録化するという作業そのものから言語自体に至るまで、何らかの形で英語の影響を受けている点では同様であるともいえる。

⁹ 反対の気持ちを表す『間投詞』用法もあるとされる。

最も例数の多い ka/ke では、‘olelo や hele をはじめ、共起関係に関わらずそれ自体の出現頻度が高い内容語が見られる一方、例数の少ない he、‘a‘ohe や ua では、コーパス全体から見れば出現頻度が低い内容語が目立つ。語の意味に関しては、「発言」「飲食」「移動」を示す語が多いが、そうでない語に関しても物理的な動きや動きの特性（曲げる・波立たせる・跳ね飛ばす・素早い etc.）と考えることができるものが多い。しかし、発言・飲食・移動の意味を持つ内容語は、このコーパスではそもそもそれらの語自体の出現頻度が高く、‘ana やその他の機能語との共起が振る舞いに関係しているとは判断できない。

ただし、上に挙げた内容語と機能語の組合せは、大部分が‘ana を伴わないパターンでも現れる。‘ana が共起する割合が高いものと低いものがあり、ka ho‘omaka のように‘ana なしではほとんど現われなかった組合せもあれば、he kaha のように‘ana を伴わないほうが多いものもある。多くの語はそれほど極端ではないか、そもそも内容語自体がコーパス中に数例しか出ていないかのどちらかである。

5.2.3 考察：「名詞化辞」 ‘ana の冗長性と先行研究の指摘に対する対案

ここまで‘ana と共起する語に着目し、‘ana が使われるべき状況・使われやすい条件を統語的・意味的に明らかにするよう試みてきた。

統語的には、典型的な決定詞（定冠詞の ka/ke）と‘ana が共起しやすいこと、また一方では‘ana なしでも行為名詞として内容語が頻繁に使用されうる事実を考えると、‘ana が名詞化ではない何かほかの機能を担っていることを裏付けするものと考えられる。

ここまでは岩崎 (2009) で提示した、「‘ana は『動作性（行為・状態そのものを示す）』を持つものであることを、明示あるいは強調する働きをしている」と考えと矛盾しない。本研究はこれについて、データを拡充したといえる。

一方、機能語同士の共起関係など新規事項に着目して考察をしても、同じ Det+内容語の構造に対して、‘ana がある場合とない場合との差異を決定づける事項は見つけられなかった。同一の内容語が同一の（と少なくとも見た目上思われる）意味内容をもって、「Det+内容語」と「Det+内容語+‘ana」の両方で現れ得ることを岩崎 (2009) で指摘し、それは今回のデータでもやはり当てはまる。次に示す例文は、岩崎 (2009: 56) で提示したミニマルペアの例である。

(2-63) he ‘akeu a he ‘āwiki ka hele, ‘a‘ole he kupa‘eli
 Det QUICK AND Det HURRY Det GO Neg Det SLOW-MOVING

(2-64) he ‘akeu a he ‘āwiki ka hele ‘ana, ‘a‘ole he kupa ‘eli
 Det QUICK AND Det HURRY Det GO Ana Neg Det SLOW-MOVING

「(私達/彼ら)は急ぎ速やかに行き、のろのろ動かない」

(lit. 行く事はすばやく急いで、遅く動かない) (いずれも Ho‘oulumāhie 2006: 10)

これは形態的には‘ana の有無のみ、文脈を加えれば、前者が直接話法として、後者がその引用として間接話法として現れる点のみにおいて異なる文である。岩崎 (2009) では情報構造や談話構造を考慮に入れることで説明ができる可能性を示唆した。

今回見る限り、本研究でのコーパスとした文章中では基本的に直接話法中にしか出てこない、1 人称・2 人称所有形を決定詞としてもつ‘ana 句は 27 例出てきており、またそれ以外の決定詞を伴って台詞中に出てくる例もあるため、直接話法では‘ana が出にくい、というように、単純に話法が決め手になるとはいいがたい。関与しないことを明らかにするためには、テキスト分析をより細かく行う必要があり、本研究の範疇からは外れるが、形態的な条件が有用でないため、今後の可能性として指摘しておきたい。

これまでの用例から、筆者は‘ana に関し、以下のような経緯があったと推測している。

- ① PPN (ポリネシア祖語) では接辞が良く使用され、名詞化接辞も存在した。
- ② ハワイ語が成立し、自然変化をしていく中で (定住後もある程度の接触があったとしても、物理的距離が著しいため、それほど濃密ではなかったと考える場合)、接辞として語幹に付加され一語と見なされるケースと、のちに文字表記を行うようになるに際し、分かち書きを選択するようなケース (語幹と「名詞化辞」の間に修飾語句が入ることのできるようなケース) とに分化していった。
分化の方向としてはやや特殊であり、そうなった動機は不明である。
- ③ 接辞が付加された形で使用頻度も高かったものは次第にそのままの形で語彙化し、独立形の‘ana も、ある内容語が行為・状態名詞として働くときに省略される傾向にあった
- ④ 以上のような文法変化の途上でハワイ語が文字記録されるようになり、その後まもなく、ハワイ語の自然変化が途切れた。

現時点ではこれは想像の域を出ないものであり、それを裏付ける通時的研究を行うにしても資料的制約が多く、研究手法の工夫を様々に考えなければならない。とはいえ、5.2 節冒頭でも述べた通り、②までは現状妥当な想定であると考えられる。本研究が主眼とする自然言語期ハワイ語は③から④の段階であり、‘ana は元は名詞化辞だとしても、この時点で義務的なものではなくっており、形式と機能の並行性が崩れている状況であったと考えている。

なお、先行研究の述べた問題点である、Elbert and Pukui(1979)の「名詞付加の例」とされるものや、接辞形-na の後に‘ana がくるものについても最後に触れておく。

名詞に付加される例については、類似の例を探すのが難しいことからこの指摘の妥当性自体に疑う余地があり、仮に典型的には名詞として使用されることの多い語彙であっても、本研究の定義からして内容語はレキシコンにおいては、あくまで内容語 1 カテゴリーであり、ある語彙で量的に名詞としての用法が支配的だったとしても、それが動詞としての用法の出現を妨げるものではない。

また後者、すなわち接辞形-na と‘ana の重複については、-na がついた形が定着・慣習化し、新たな語彙素となったと考えることにより解消可能である。

5.2.4 おわりに

筆者はこれまで様々なポイントから‘ana’について考えてきた。そして本研究では共起関係、特に機能語同士の共起関係に注目し、何か‘ana’の出現を促進・抑制するパラメータがあるのではないかと考察してきた。しかし、まとまった数の用例を見ても、定義を（筆者自身のものを含めた）先行研究より踏み込んだものにするのは難しい。

基本に立ち返れば、現代のハワイ語文法における定義として、‘ana’を名詞化辞であると呼ぶことがいけないわけではもちろんない。ただ、この定義だけでは取りこぼすものがあり、それをまとまった形で提示することが、本研究の意図するところである。そのために、素朴に‘ana’のふるまいを観察しなおした結果が、この5.2でこれまで述べてきたものである。よって、先行研究と異なる‘ana’の定義を提示することにならなくとも、今までとは異なる形で‘ana’の実態を分析したことには一定の意義があると考えられる。

もちろん、これが新規の研究として訴えるところが乏しいのも事実である。筆者の大局的な目的は、ハワイ語文法を専門家以外の目にも参照しやすい形式で、かつ自然言語期の姿を反映させた形で再分析・再記述することであるため、傾向の提示が一定の意味を持つ一方、「このようなときには‘ana’を使う・避ける傾向にある」という形で行えなかった点は課題として残るものといえる。

5.3 mai, aku, a 'e, iho (「方向詞」)

5.3.1 方向詞に関する先行研究の記述

ハワイ語の先行研究は、mai, aku, a 'e, iho の4語を directional と呼んでいる。

最も典型的には、動詞句において定まった位置(動詞と動詞修飾の content words の後)に現れる語であり、その動詞句の中核になる内容語があらわす動作や行為について、それが実現する物理的・抽象的「方向」を示すものである。以下に典型的な例を挙げる。

(5-65) E hele mai 'oe ia'u!¹
Imp MOVE Dir 2sg Obj+1sg
「私の方に来なさい」

(5-66) E hele aku 'oe i Waikiki!
Imp MOVE Dir 2sg Prep W.
「ワイキキに行きなさい」

(5-67) E kū a'e 'oe!
Imp STAND Dir 2sg
「立ち上がりなさい」

(5-68) E noho iho 'oe!
Imp SIT Dir 2sg
「座りなさい」 (Hopkins 1992:22)

(5-69) Ke a'o mai nei nā haumāna.
TA TEACH/TAUGHT Dir Dem Det STUDENT.pl
「生徒たちは教わっている」

(5-70) Ke a'o aku nei ke kumu.
TA TEACH/TAUGHT Dir Dem Det TEACHER
「先生は教えている」 (塩谷 1999:49)

ただし、実際には名詞句にも等しく現れることができ、より広くあてはまる定義としては、句の中核なる内容語が何らかの形で有している、方向的指向性を表す要素といえる。

(5-71) ... i lawe 'ia mai e Hi'iaka mai Hawai'i mai
TA TAKE Pass Dir Prep H. Prep H. Dir

¹ 以下注記が無い限り、本章の例文のグロスと、英語・ハワイ語文献の和訳は筆者による。

a hō‘ea i Maui, ...
 AND ARRIVE Prep M. (Ho‘oulumāhiechie 2006: 125)
 「ヒイアカによりハワイから運ばれてマウイに着き…」

(5-72) ... i pane mai ai i kona pōki‘i
 TA REPLY Dir Dem Obj Poss.3sg YOUNGER SIBLING
 me ka ho‘omau **mai** nō i ke kama‘ilio ‘ana...
 WITH Det CONTINUE Dir Int Obj Det CONVERSE Ana
 「lit. 彼女のきょうだいに、会話することの続行により答えた」
 (彼女のきょうだいに、【…以下のように】会話を続けて答えた)
 (Ho‘oulumāhiechie 2006: 33)

一般に、方向詞によって示される意味内容には以下のようにさまざまな種類がある。

- ①内容語の示す動作が持つ向き（動的）：移動（行く・来る、走る etc.）
 - 具体的な空間移動を伴うもの
 - 概念上の移動（知識の授受、権利のやりとりなど）
- ②内容語の示す性質とある基準点の位置関係：比較、時間
- ③対であることの明示：eg. [Cont] aku, [Cont] mai)

①は典型的な場合である。②については、固有名詞（地名・まれだが人名にも）や位置名詞句に付加される場合を考えると、「動き」の指向とは厳密に言えば違うものである。③は同じ内容語に対になる方向詞を付加し、「行ったり来たり」「上へ下へ」のような表現にしたり、語調を揃えたりするなどの特殊な表現である。

次に、先行研究における具体的な記述を見る。Elbert and Pukui (1979: 95) では、方向詞は、最も典型的には5つのタイプの動詞と共に使用されるとしている。そこで提示された語例の一部と共に以下に挙げる（和訳は筆者による）。

自動詞：ea「起きる」 hā‘ule「落ちる・負ける」 hele「行く」 hiki「着く」 ho‘i「発つ・戻る」
 holo「走る」 kū「立つ・止まる」 noho「座る」 puka「現れる・言う」
 発言を表す有意思性他動詞：‘ae「肯定の返事をする・同意する」 ha‘i「言う」 hea「呼ぶ」
 ‘i「言う」 kāhea「呼ぶ・叫ぶ」 mele「うたう（詠唱する）」
 ‘ōlelo「話す」 paha「うたう（詠唱する）」
 動きを表す有意思性他動詞：hopu「掴む」 kāki‘i「打つ・叩く」 luku「壊す・殺す」
 nānā「(～を) 見る・世話をする」 pakele「逃れる」
 身体的な過程を指す自発的他動詞 (iho と共に)：aloha「(愛情と共に) 覚えている」
 maka‘u「恐れる」 mana‘o「思う・考える」 no‘ono‘o「思う・考える」
 Loa‘a 状態動詞：(動作主が目的語・被動者が主語にくる) 項の取り方が特殊な動詞の一群

また、それ以外にも非動詞文や名詞句中で「来る」「行く」の意味を持って使用されるとする。加えて、方向詞と、代名詞・所有形・指示詞とに共通する性質として、話者と聞き手の時間・空間的距離を示すことを述べている。

一方、Schütz, Kanada and Cook (2005)は、方向詞はある場所に向かっての、本来的な意味での、または比喩的な意味での「動き」を示すマーカーとしている。具体的には、方向詞には以下の2種類があるとされる。Elbert and Pukui (1979) が方向詞とし、本節で取り上げる方向詞はいわゆる方向修飾語にあたる。また、方向詞は時間を表すのにもよく使われるとしている。

- 方向修飾語 (modifier) ⇒mai, a'e, aku, iho
- 方向前置詞 (preposition) ⇒mai, i

Schütz, Kanada and Cook (2005) が触れているが、方向詞を理解するひとつのポイントは「ある地点に向けた」動きに着目している点であり、これはハワイ語の空間表現でよく使用される一群の位置名詞 (mua「前」、hope「後ろ」、loko「中」、waho「外」、luna「上」、lalo「下」など) が「行為等の行われている地点」に注目していることと対照的である。なお、位置名詞は前置詞を伴い前置詞句として使用されるもので、基本的に文の主たる構成要素にはならず、方向詞のように動詞句・名詞句の一部とはみなされないため、全く別の要素である²。

また、方向詞はそれぞれが la 形という形も有している。具体的には、maila、akula、a'ela、ihola の4つで方向詞の後ろに-la が付くと説明される。方向詞と-la は分かち書きをする場合とそうでない場合があり、複数のテキストを同時に扱う際には注意が必要である。今回使用したテキストでは、基本的に Ho'oulumāhie (2006) のみ一語として現れ、他のテキストでは分かち書きされて現れていた。この-la は元々代名詞の一種であり、例えば Schütz, Kanada and Cook (2005:110) は方向詞以外にも kēlā や pēlā のように別の要素と結びつくものや、ua N lā のように単独で出現することもあると説明している。

ただし Schütz, Kanada and Cook (2005) の la 形に関する記述でより注目すべきことは akula や maila の形が、特に narrative において、アスペクトマーカーとして働くという点である。ihola や a'ela という形は存在するが、アスペクトマーカーとして働くとは述べられていない。また ihola は reflexive marker でもあるとしている。

次に、方向詞の各語についての記述は以下の表にまとめる。ここでも、Schütz, Kanada and Cook (2005) は基本的に Elbert and Pukui (1979) の対応する箇所に言及したうえで追加の記述や独自の見方を述べる形になっている。

² この位置名詞は closed class であり、現れる位置も限定的なことから機能語の一種と考えてもよい。

表 20 先行研究における方向詞の記述

	Elbert and Pukui (1979:91-95)	Schütz, Kanada and Cook (2005:10, 16, 51-52, 86-87, 118)
mai	<p>「話者の近く・話者へ向かって」 ‘to me’</p> <p>-動詞マーカを伴わずに、動詞的なイディオムとして使用されることもある</p>	<p>「ここ（へ）：1人称へ向かって」 「談話の焦点に向かかって」 ‘here’ (toward first person), ‘in this direction’, ‘in the direction toward the focus of a narrative’</p> <p>-単独で、イディオム的に、命令文 「(私の方へ) 来い、持ってこい、くれ」として働く</p>
aku	<p>「話者から遠い または 離れる」 (未来を指すことも) ‘away’, future</p>	<p>話者から離れていく ‘away’</p> <p>-比喩的な方向でもよい (比較表現など)</p> <p>-時間を表すことも</p>
a‘e	<p>目に見える (聞き手の近くを指す場合も) 「上へ、近くの、隣接した、隣の」 (空間または時間的に) ‘up, nearby, adjacent, adjoining, next’ in space or time</p> <p>-比較級に使われる</p>	<p>「上へ、前後に、横に、ななめに」 *「(基準点へと) 直接的に向かってくる・離れていく・下へ向かう動き」以外の場合に使う ‘upward, back and forth, sideways, diagonally any direction not directly toward, away, or downward’</p> <p>-複数個所でおこる動きを表す -状態動詞の後：比較級を表す -イディオム的使用：「次」「別の」 -現在に隣接した時間を表す</p>
iho	<p>「話者の近く・話者へ向かって」 「下へ、自身」「近未来」 ‘downward, self’, reflexive, near future</p> <p>-身体的なプロセスを示す</p> <p>-名詞として、または代名詞・位置名詞の後で再帰の意味 (self) を示す</p>	<p>「下へ向かって」「自身」 ‘downward; self’</p> <p>飲食・思考に関する動詞と共に使用する (Hopkins1992: 25)</p> <p>時間表現と共に使用し… -比較的最近のこと - (前の) 状態・動作の直後のこと</p>

なお、方向詞の特徴として、どちらも「イディオムの使用が多いこと」、「時間表現や比較表現によく使用されること」の2つを挙げている。今回のデータでも、イディオムや時間表現は特に多く見られた。これらについては以下で紹介するように、近年の先行研究がそれぞれあり、本論では特別に論じることはしない。

Cook (1996) では時間表現について、方向詞が時間的隔たりの程度を表現できる点で特徴的と考えている。塩谷 (2007) では比較表現における方向詞の使用に分析を加えており、比較の場合、特定の「比較動詞」と共起する場合と、方向詞単独で比較の意を示す時とで使用可能な方向詞が異なり、また比較の性質により使用できる方向詞の種類が異なるとしている。例文 (73) は時間表現の例、(74) は塩谷 (2007) で Hawaiian laws³より引用している、方向詞のみによる比較の例である。

(5-73) **kēlā pule aku nei**

THAT WEEK Dir Dem

I kēia mau lā iho nei

Prep THIS pl DAY Dir Dem

ko‘u mua a‘e

Poss.O.1sg BEFORE Dir (Elbert and Pukui 1979:92)

「先週」「あさってに」「私の(ちょうど一人)前に生まれたきょうだい」

(5-74) **Ina i nui ka eha, alaila, nui aku ka uku,**

IF TA BIG Det WOUND THEN BIG Dir Det FINE

「もし傷が大きいようなことがあれば、罰金はより大きくなる」 (塩谷 2007:20)

なお、方向詞4語は、ポリネシア祖語 (Proto-Polynesian) の段階ではおおむね*mai、*atu、*ake、*hifoの形であったとされている。さらにそれより遡ることもできるとされ、POLLEX (Polynesian Lexicon Project) を参照すると、さらに、(i) upwards (*sake) / toward the speaker (*mai) をオセアニア祖語に、(ii) away from speaker (*atu) / downwards (*sipo) をその上のマラヨ=ポリネシア祖語に、(iii) mai 自体は更にさかのぼって come の意味でオーストロネシア祖語に*um-a (R) i として、それぞれ再建されている。

また、興味深い指摘として、ハワイ語を語彙供給言語とするピジンである Pidgin Hawaiian では、方向詞は残ってはいるものの、mai、aku と maluna、malalo の4語に変わっているという報告がある (Roberts 2013)。maluna と malalo はそれぞれハワイ語の「上に」「下に」にあたり、前置詞と位置名詞による複合語である。この変化は、語彙・文法の簡略化という観点から言えば経済性に適っているとさえも言えるとともに、mai、aku と a‘e、iho の2グループの間にある相違 (後述) を示す一例であるとも考えられる。

³ Hawaiian laws 1841-1842, reprinted by Ted Adameck (1994)。なおこの例文については、グロスが筆者が本稿の形式に合わせた形を提示し、和訳は塩谷 (2007) による。

5.3.2 本研究における方向詞の分析・考察の過程

ここまで見たような先行研究による記述を念頭に置き、以下では本研究独自の見解を、データとともに提示していく。それに先立ち、本節でも‘ana の場合と同様、一部議論の先取りも含めつつ、筆者による方向詞の分析過程を提示する。

まず、‘ana を分析する際には、先行研究の問題点を考えると、‘ana がどんな機能を有しているのかを根本から議論する必要があるのに対し、方向詞は先行研究の段階で分かりやすい機能が提示されており、そうした典型的な機能の記述には矛盾や明確な反例は特にない。つまり、方向詞が使用されている用例を見ると、基本的な例、すなわち動作の向かう方向を示している用例を意味的・統語的にどう分析するのが妥当かは、現状すでによく説明できている。

ただし記述に問題がないわけではない。例えば先行研究が触れている時間表現や比較表現などの用法、さらに非行為名詞に付加されている例などを見ると、必ずしも動作の方向を示しているとは言い切れない。空間表現と時間表現・比較表現との結びつきはよく見られるものではあるが、非行為名詞への付加の説明もできるようにするためには、動作の方向よりもより広く適用できる定義が望ましい⁴。

他に問題となる点は、「誰・何を基準点として方向を語るのか」である。1人称の場合や、語り手の存在が顕著であるときはそれを基準点と考えることができるが、3人称文の場合に誰を基準とするのかは定かではない。主語はその場において語り手が注目している人物であり、主語を基準点とすると事前の予想では考えた。

また、動きを表すときに必ず使われる要素ではないことにも留意したい。基本的には方向の明示が必要な時にのみ現れてきている、と考えればよいが、実際の例を見ていると、方向が明確な際に現れることもあれば、複数の登場人物がおり、その間での動作の方向が必ずしも明確ではないにもかかわらず方向詞が出ないこともある。もし使用されやすい・使用が義務的である条件や、反対に使用されにくい・使用してはいけない条件が説明できればよりよい記述にできるため、これも対象としたい事項である。

以上を踏まえコーパスより用例を集めてみると、出現頻度が高い要素であるといえる分量になった。4語の個々の特徴については、共起する内容語の意味傾向や文章のタイプなどからある程度記述をすることができる。また、方向詞と内容語の共起関係に着目したデータを見ると、内容語によって方向詞と共起する割合の高さに違いがあることがわかった。

また、筆者は、先行研究（岩崎 2014 など）において、ポリネシアの他の言語の記述状況を参考にしたうえで、aku-mai と a'e-iho の2組の間には様々な点で隔たりがあるため、前者2語を直示的表現、後者2語を絶対軸表現として方向詞の中に下位分類を認めるのが妥当であると主張をした。出現数や、表現の中で対になる傾向、さらに名前が表す通り何らかの焦点・基準点を必要とするか否かという点では、本研究のデータを見ても妥当であると思われる。

しかし、コーパスより得られたデータからは見えない点も少なからずあった。本研究では、データからはっきりわかること、すなわち「いつ使われているか」に関する情報をま

⁴ この点は方向詞の性質がさらに明らかになった段階で考察すべき課題として挙げているものであり、本研究内では結論には達していない。

ず明確に提示することを主目的とした。そのうえで、疑問として残った点に対し更に考察、記述をするためのヒントを用例中に探したものである。

まず全体的に関わるデータだが、コーパスにおける出現数は以下の通りであり、非常に良く用いられる要素だといえる。

表 21 コーパス全体における各方向詞の出現回数

	mai	aku	a'e	iho	合計
Token	2611	2214	948	700	6473

この表には、同音異義語や mai・iho の動詞用法、前置詞の mai は含まれない。ただし、イディオム・慣習的表現や、時間表現と考えられるものについては、方向詞の一部と考えて数えている。純然たる移動・方向を示すものを分けてみる考え方もあるが、今回は全体の傾向を見るため、詳細な識別には立ち入らない。

なお、データ中にイディオム・慣習的表現は確かに出現頻度は高いが、以下の論旨に関わることはない程度であると見なせる程度である。

また、時間表現については Elbert and Pukui (1979: 92) が触れており、方向詞の直後に後置代名詞の nei が付くことで「過去」を示すとしている。実際、これに当てはまる用法は今回の用例にも見られた。ke V nei や e V nei を除くと、具体的には aku nei (distant past) が 98 例、mai nei (past time and present place) が 154 例、a'e nei (recent past) が 63 例、iho nei (recent past) が 24 例である。nei と方向詞が共起する場合は必ず時間表現であると考えれば、これらを「方向」詞から抜いて考える立場もあるため数を提示したが、一方で、nei を伴う場合でも、内容語の示す動作の方向も明示されることが望ましい場合には、必ずしもどのような「時間」を表すかだけでどの方向詞を選択するか判断されているとは言い切れない。動作の方向を示す必要性和時間表現の必要性和のどちらが優先されるかは、今回は論じない⁵。

以下各語ごとに、用例から分かったことを中心に、その性質を記述する。

5.3.3 mai

向かってくる、<接近>の指向を示す。

- (5-75) E hā'awi mai 'oe i ka puke (ia'u)
 TA GIVE Dir 2sg Obj Det BOOK Prep+1sg
 'Give the book (to me) !' (Hopkins 1992: 25)

- (5-76) a hele mai lākou no Hawai'i nei.
 AND COME/GO Dir 3pl Prep H. Dem
 「そして彼らはこのハワイにやって来た」 (Ho'oulumāhie 2006: 51)

⁵ なお、方向詞による「過去」の表現は、TA マーカーの ua/i (完了) を伴うこともある。

基本的には「ある基準点に近付いてくる」具体的な空間移動および概念上の移動を示す。比較用法では、A<B (BがAより大きい) の関係を示す際に使用されるとされている

(5-77)	'a'ole	paha	e	emi	mai	ka	nui	o
	Neg	PERHAPS	TA	LESS	Dir	Det	NUMBER	Poss.O
	na	umeke poi	malalo	iho	o	nā	20	tausani
	Det	BALL POI	Loc	Dir	Poss.O	Det	20	1000

「ポイ (タロイモのもち) のボールの数は多分2万【の下になる】より少なくはない」

(塩谷 2007:20、訳の補足【】は筆者による。

またグロスとは本稿の形式に合わせて筆者が変更している。) ⁶

mai には同音で前置詞の用法があるとされる。意味は「<場所>から～」である。また、イディオム的なものではあるが、動詞用法 (命令の「来い!」) があるといわれている。

本研究のコーパスにおける用例を見ると、動詞用法は非常に少なく9例しかなかった。また、空間的・物理的移動の場合、具体的な地点が提示される場合には、前置詞と方向詞の **mai** が両方出る、**mai** <場所(地名が多い)> **mai** のようなパターンをよく示す。しかし、**mai-mai** だけでなく **mai-aku** の組み合わせも一定数見られた。**mai** と **aku** が正反対の向きを指向していることから一見奇妙にも見えるが、前置詞と動詞後続用法は着目しているところが違うことによって説明できる。具体的には、前置詞用法は起点フォーカスであり、一般的な用法は着点フォーカスであるといえる。

(5-78)	Holo	aku la	lākou	mai	Waikiki	aku	a	Waianae, ...
	MOVE	Dir	Dem.3pl	Prep	W.	Dir	Prep[TO]	W.

「彼らはワイキキからワイアナエまで移動する」

(Elbert 1959:63。グロスと訳は筆者による)

この例では、**mai-aku** の組はワイキキ (起点) からワイアナエ (着点) まで、を意味する。この移動を指すだけなら **mai** [起点] **a** [着点] 構造だけで十分だが、具体的な地名である **Waikiki** に **aku** が付加されている例である。この文の主語「彼ら」は **Waikiki** から離れていくので意味的に不自然ではない。Kamanā and Wilson (2012:15) でも、この類の例を挙げている。

(5-79)	mai	Hawai'i	nei	aku
	Prep	H.	Dem	Dir.
	“from here in Hawai'i (away from us toward someplace else)”			
	mai	Kapalakiko	mai	
	Prep	San Fransisco	Dir	
	“from San Francisco (toward us in Hawai'i)”			

⁶ Kepelino:151 からの引用。 Beckwith, Martha W. (1932). *Kepelino's tradition of Hawaii*, Bernice P. Bishop Museum Bulletin 95, New York, Kraus Reprint.

ちなみに、この **mai** <場所> [方向詞]の構造では、愛着のある「ここ」や具体的な土地を指す地名と、それ以外の土地とを対照させる例が少なくない。いずれにせよ、形が同じことから混同しがちであるが、前置詞の **mai** は方向詞の **mai** とは着目する点が異なることは明確である。

5.3.4 aku

離れて行く・<離脱>の指向を示す。

(5-80) ... **ua hele aku lākou nei ma ke ala hele...**

... TA MOVE Dir 3pl Dem Prep Det ROAD COME/GO

「【他に言うべきこともなく】彼らは【森へ】続く道を進んで行った」

(Ho‘oulumāhiehie 2006 :52)

(5-81) **E kū‘ai aku ana ‘o ia i kona hale**

TA BUY/SELL Dir Part Sub 3sg Obj Poss.O.3sg HOUSE

i Hilo.

Prep H.

「彼女はヒロにある彼女の家を売ろうとしている」 (Hopkins 1996: 91)

本研究のコーパスにおける用例の範囲では、**aku** のフォーカスは起点にあり、着点はその後に出る名詞句で示していることが多いといえる。なお、例にあるようにハワイ語で場所を表す前置詞は **i** と **ma** の 2 種があり、どちらも使える場合もあるが、より特定のな場合は **ma** を使い、移動の着点の場合は **i** を使うなど、完全に置き換え可能ということはない。

aku に先行する内容語、すなわち「起点」に当たる内容語は多様であり、具体的な地名や場所を表す名詞、場合によっては人名に後続する例もみられる。イディオムのなものもあるが、場所を表す名詞（位置名詞）に後続する例は特に頻度が高い。

このように、基本的には **mai** と対になる要素と考えてよい。ただし、先行研究でも指摘されている通り、現実に見られる用法の範囲は **mai** よりずっと狭い。**mai** との違いでは、具体的には次のような点がある。

- ① 動詞として働くことが **mai** より少なく、今回は見られなかった
- ② 前置詞 “**aku**”はない
- ③ ②より、**mai** では **mai** <場所> **mai** の形によく見られる、**aku** <場所> **mai/aku** の構造も現れない

またそれほど数は多くないが、時間的前後関係（「～の前」）、比較、または性質の強さを表すと思われる例もみられた。

5.3.5 a ‘e

上へ・<上昇>の指向を示す。

- (5-82) I ia wā i kū a‘e ai ‘o Hi‘iaka i luna, ...
 Prep Dem TIME TA STAND Dir Part Sub H. Prep UP (WARD)
 「ヒイアカは（上向きに）立ち上がって」 (Ho‘oulumāhiehie 2006: 67)

- (5-83) No laila, e kāhea a‘e au i ke kaikua‘ana haku o kākou
 THEN TA CHANT Dir 1sg Prep Det CHIEFESS/SISTER Poss.O 1pl.inc
 「そこで私は、私たちの姉（高貴な女性）に向けて謡うだろう」
 (Ho‘oulumāhiehie 2006:80)

「上下」は<接近><離脱>の両方を示すことができる。ただし、用例を見る限りでは実際に物体が垂直方向に移動するケースよりも、イディオム的と言われるものが多かった。なお、比較の用法は「どちらが上」ということが多いためこの a‘e が使われる方が多く、次節で扱う iho を使うケースはあまり見当たらない。

また、前方照応の要素として（「上述のように」という用法で）使用される例も見られた。

- (5-84)
 ..., ‘o ka pololei maoli o ka ho‘onohonoho ‘ana o nā ‘ōlelo
 Sub Det RIGHT TRUE Poss.O Det ARRANGE Ana Poss.O Det WORD
 o ka pule i hō‘ike ‘ia a‘ela, ‘o ia kēia.
 Poss Det PRAYER Prep SHOW Pass Dir Sub Dem.3sg Dem
 「先に紹介したチャントの本当に正しい語の並べ方は、この（以下の）ようである」
 (Ho‘oulumāhiehie 2006:107)

チャントにはいろいろなバージョンがあるのが一般的だが、ここではまずこの文の前にひとつのパターンを紹介し、この文の直後に別のパターンを紹介している。下線部では hō‘ike ‘ia a‘ela と「上」の意を持つ語を使っており、shown above のような表現との一致が見られる。もちろん横書きのため空間的にも上に来ることからいずれにしても自然と考えられる⁷。

共起する内容語について、飲食動詞は iho で出やすいと先行研究で指摘されているが、特定の語（‘awa⁸、主に儀式で使われる特殊な飲み物）が飲食されるモノの時には a‘e が使用されている例が複数見られた。

⁷ 一方、「次に／以下に述べる」のような用法は iho にあるかという点、「後で出てくる」のようなものも併せて、今回はあまり見られなかった。

⁸ the root being the source of a narcotic drink of the same name used in ceremonies (Neal 291), prepared formerly by chewing, later by pounding. The comminuted particles were mixed with water and strained, When drunk to excess it caused drowsiness and, rarely, scaliness of the skin and bloodshot eyes. Kava was also used medicinally. (Pukui and Elber 1986, “‘awa”の項)

- (5-85) ...a pau ka pule ‘ana a ua kanaka nei,
 AND FINISH Det PRAY ANA Poss.A Dem PERSON Dem
 inu a‘ela ia i ka ‘awa ona a pau, ...
 DRINK Dir Dem.3sg Obj Det AWA Poss.O.3sg ALL
 「祈りを終えると、彼はアヴァを飲み干して...」

(Ho‘oulumāhiehie 2006: 147)

また、a‘e 自体が動詞として働き、何らかの形で上方向に移動することを示す例は、チャント文ではしばしば見られた。

5.3.6 iho

下へ・<下降>の指向を示す。

先行研究では、共起しやすい語には飲食動詞があるとされている。また、これ自体が身体性や再帰性を持つ語であるともいわれる。

- (5-86) iā lākou i noho iho ai, ua pane maila ‘o Hi‘iaka
 Prep 3pl TA SIT Dir Part TA REPLY Dir Sub H.
 i ke aikāne, ...
 Obj Det FRIEND

「彼らが座ったとき、ヒイアカは友人に答えて言った」

(Ho‘oulumāhiehie 2006:102)

- (5-87)
 ā mo‘a ka moa, ‘ai iho la o Kahakaloa ā maona, ...
 AND COOKED Det CHICKEN EAT Dir Dem Poss.O K. TILL FULL
 「そして鶏が調理され、カハカロアは満腹になるまで食べた」 (Elbert 1959: 91)

コーパスでは、動詞としての用法が多く見られた (96 例)。mai の動詞用法はよく言及されるが、形容詞的の用法も含めれば、iho の動詞用法も頻出であるといえる。その他はこれと違って特徴的な例はなく、先行研究の記述の範囲に収まるといえる⁹。

5.3.7 用例に見る方向詞の性質

5.3.7.1 テキストの性質と方向詞の使用頻度

方向詞の出現数について、la 形を区別し、かつ文献ごとに提示したのが次の表である。

⁹ なお、「上」や「下」は接触している上下・接触していない上下・モノ自体に内在する上下が考えられるが、その違いについてはどう扱っているのかを考察対象と考えていたが、今回のデータからはわからなかった。

表 22 各資料における各方向詞の出現回数

資料	Anatomia [18872]	Kumulipo [9089]	Hi'iaka [92215]	Fornander Selection [19893]	Pule Kahiko [16539]	合計
分野	初等医学書	チャント	神話	神話・民話	チャント	
mai	96	14	1295	229	195	1829
maila	16	3	621	129	13	782
aku	73	7	1109	175	42	1406
akula	9	0	572	211	16	808
a'e	28	3	430	41	18	520
a'ela	1	0	347	72	8	428
iho	18	0	225	32	7	282
ihola	27	0	264	126	1	418
	268	27	4863	1015	300	6473

*[]内は各資料の総語数

‘ana 句と同じく、チャント文での出現数がやや少なくなっているように見える。ただし ‘ana の場合と比べれば、Kumulipo が特に少ないのに対し、Pule Kahiko はそれほど少くはない。むしろ目立つのは Anatomia での使用の少なさである。この点について考察する。

文章の分野は同じチャント文ではあるが、Kumulipo と Pule Kahiko とでは性質が異なる。Pule Kahiko におさめられているチャントは、基本的に「神」「天」など何らかの霊的存在に向けて具体的な何かの実現を祈る祈祷文である。前者に比べ、後者は祈りを捧げる対象（特殊な「聞き手」）が遠くにあり、そこへ向けて祈り、そこから利益が到来することを祈るようになっている。これは一種の対話であり、かつ抽象的な（心的な）方向性は強く意識されると予想される。一方、Kumulipo は創世神話を語るものである。さまざまな生き物や自然、その他霊的な存在などが現れ、現在の世界が形成されていく過程を語っているのであり、対話性はかなり低い。

加えて、Anatomia は物語文でもなく、淡々と事実の説明を行うテキストである。そのため、語りの性質はチャント文や神話・民話に比べてより低い。

こうしたことから考えると、「語り」であるかどうかや、その語りが対話の相手を想定しているかどうか効いているように思われる。

5.3.7.2 共起する内容語の性質

‘ana のときにはその文法的機能自体を根本から考えるため共起する機能語にも着目したが、方向詞に関しては基本的な統語的機能については特に問題なく定義できると考え、共

起する内容語に絞って検討する。まず、各方向詞と共起する割合の高かった内容語を次の表に挙げる。

表 23 各方向詞と共起しやすい語彙と、その主たる意味

mai	移動	hele 「行く・来る」、ho'i 「戻る、返す」、hō'ea 「到着する」、hiki 「着く、現れる、近づく」、lele 「飛ぶ」、holo 「行く（走る）」、komo 「入る」、kipa 「たずねる」
	発言	pane 「答える」、'ōlelo 「言う」、nīnau 「たずねる」、'ae 「肯定する」、'ī 「言う」、kāhea 「呼ぶ」、kau 「歌う」、ha'i 「言う」、kama'ilio 「話す」、
	知覚	'ike 「見る」、ho'olohe 「聞く」、nānā 「見る」
	その他	kū 「立つ」、loa'a 「得る」、huli 「振り向く、探す」、pā 「とる」、ki'i 「とってくる」 hō 「与える」、aloha 「愛する」、lawe 「とる」、eia 「～がある（特殊構文をとる）」、kau 「置く」、hō'ike 「示す」、kana 「*イディオム：とても、非常に」、puka 「現れる」、noho 「座る、住む」、hope 「(位置名詞) 後」、kani 「音がする、音を出す」、loko 「(位置名詞) 中」、hā'awi 「与える」
aku	移動	hele 「行く・来る」、ho'i 「戻る、返す」、holo 「行く（走る）」、hiki 「着く、現れる、近づく」、hō'ea 「着く」、komo 「入る」、ne'e 「動く」、waiho 「離れる」
	発言	'ōlelo 「言う」、pane 「答える」、nīnau 「たずねる」、ha'i 「言う」、'ī 「言う」、'ae 「肯定する」、kau 「うたう」、kāhea 「呼ぶ」、ho'ole 「否定する」、
	知覚	'ike 「見る」、lohe 「聞く」、nānā 「見る」、
	その他	hō'ike 「示す」、hana 「作る」、ho'omau 「続ける」、ha'awi 「与える」、hope 「(位置名詞) 後」、wahi 「場所」、ki'i 「とってくる」、laila 「(位置名詞) そこ」、lawe 「とる」、kū 「立つ」、kena 「命じる」、noho 「座る、住む」

a'e	移動	huli「振り向く、探す」、hele「行く・来る」、 ea「上がる、のぼる」
	発言	'ōlelo「言う」、kāhea「呼ぶ」、kau「うたう」
	思考	mana'o「思う」
	知覚	'ike「見る」、nānā「見る」、lohe「聞く」
	その他	'ē「*イディオム：別の」、ala「起きる」、kū「立つ」、 hō'ike「見せる」、ho'opuka「発する」、'alo「避ける」、 aloha「愛する」、ao「明るい、夜が明ける」、hala「過ぎる」、 hope「(位置名詞) 後」、lawe「とる」、lilo「～になる」、 loa'a「得る」、pa'a ¹⁰ 「とる」、pi'i「のぼる ¹¹ 」
iho	移動	ha'alele「離れる」、komo「入る」、waiho「外、離れる」
	発言	kāhea「呼ぶ」
	思考	mana'o「思う」、ho'omaopopo「わかる」、 no'ono'o「考える」
	知覚	'ike「見る」、nānā「見る」
	飲食	'ai「食べる」、kani「飲む、音がする」
	その他	noho「座る、住む」、ia「それ(代名詞)」、 eia「～がある(特殊構文をとる)」、 hope「(位置名詞) 後」、malalo「(位置名詞) 下」、 mua「(位置名詞) 前」、kaua「戦う」、lalau「つかむ」、 lilo「～になる」、li'uli'u「長時間が過ぎる」、 moe「寝る、横になる」、pēlā「そのよう(である)」

方向詞のどの語も、一般的に出現頻度の高い動詞と共起する例が多いため、基本的には万遍なく内容語につくことができると考えられる。

ただし、一応例外もある。

- ①特定の方向詞と共起しやすい語
- ②出現する際に方向詞を伴うことが多い語
- ③方向詞と共起してもおかしくないにも関わらず、方向詞を伴いにくい語

①は先行研究の指摘の通り、飲食を表す動詞で iho が出やすいことなどが当てはまる。ただし、基本的に先行研究が指摘しているような共起傾向が当てはまると見られるが、同じ発言動詞・思考動詞・飲食の動詞でも語彙によってバラつきがある。総出現回数が少なかったため表には含めなかったが、5.3.5 で触れた'awa の飲食には iho ではなく a'e が共起して

¹⁰ 非常に多義的な語である (Pukui and Elbert 1986: pa'a の項参照)。

¹¹ ここでは「巻き起こる」のような例が含まれるため、移動には含めない。

いるのが一例である。よって、特定の方向詞との共起のしやすさ・しにくさは、意味内容によるよりは、語彙的に決められるものと考えられる。

さらに、②・③については次の表を見ると明らかである。

表 24 頻出語彙と各方向詞の共起関係

	離脱 - 近接		垂直方向		計
	aku	mai	a'e	iho	
hele (come/go)	161	135	23	3	322[808]
'ike (see)	118	92	24	14	248[567]
nānā (see)	43	22	14	8	87 [-274] ¹²
kāhea (say,call)	33	35	21	6	95 [147]
'ōlelo (say)	155	129	37	13	334 [661]
pane (reply)	132	118	6	1	257 [275]
計	642 [2214]	531[2611]	125[948]	45[700]	1343

※ []内はコーパスでの総出現回数

内容語の中で特に出現頻度の高い語彙に着目して、各方向詞との共起関係をまとめると、pane のようにほとんどの場合方向詞を伴って出現するものもあれば、hele のように典型的な移動を意味にするにも関わらず半分以上の例で方向詞と共起しないものもあることがわかる。さらに、一見垂直方向との親和性が特別高いとは思われない内容語であるにも関わらず、nānā や kāhea は他の、しかも似た意味を持つ語彙に比べ、垂直方向を表す方向詞との共起割合が高くなっている。これらのことから、やはり特定の方向詞と特定の内容語との共起のしやすさが語彙的に決まることが推測される。

5.3.7.3 基準点の交替

先行研究に関し、本論で特に重要視するのは、「向き」を言語化する際に基準となる点の扱いである。Elbert and Pukui (1979) では、“speaker” (a'e についてのみ“addressee”) とされ、Schutz, Kanada and Cook (2005 : 10, 11, 16, 118) では項目ごとにやや異なるが、“speaker”に加え、“first person”、“focus of narrative”、“point of reference”などが使用されている。ハワイ語以外のポリネシア諸言語の研究を参照すると、例えばハワイ語に最も近い言語のひとつであるマルケサス語の記述の“deictic center” (Cabritz 2006:427) のように、いわゆる「ダイクティックセンター」や、前述の「参照点」「焦点」に類する語が現在では一般的と言える。本研究では、方向を決めるときの「基準点」というニュートラルな呼称を使用する。

実際にどのようなものが基準点として定義されるか、あるいはテキスト中の基準点の交替や決定の規則・傾向など、実質についての分析はこれまでほとんどされていない。

¹² これらの語は表記法の問題からテキストの一部で識別が複雑になっているため、概数で示している。ここでは最大で 274 例ということを示す。

用例を見ても、この点は非常に不明瞭である。以下に交替の例を挙げる。

- (5-88) ... i ia wā ‘o ia i ‘ōlelo **aku** ai iā Hi‘iaka,
 Prep Dem TIME Sub 3sg TA SAY Dir Part Obj H.
 "[...]." "[...]", i pane **mai** ai ‘o Hi‘iaka i ke aikāne.
 [...] [...] TA REPLY Dir Part Sub H. Obj Det FRIEND
 「そこで彼女はヒイアカに言った、『[あの女性は誰だ]』。『[彼女は同族だ]』と
 ヒイアカは友人に答えた」 (Ho‘oulumāhie 2006: 144)

- (5-89)
 i kēlā wā, ‘ōlelo **akula** ‘o Hi‘iaka i nā wahi
 Prep Dem TIME SAY Dir Sub H. Obj Det SOME
 kānaka Moloka‘i, "[...]." hō‘ole **akula** ua mau wahi
 PEOPLE M., [...] DENY Dir Dem pl SOME
 kānaka nei, me ka ‘ōlelo ‘ana **aku** iā Hi‘iaka, ...
 PEOPLE Dem, Prep Det SAY Ana Dir Obj H.
 「そこでヒイアカはモロカイの男たちに言った、『[食糧調達に寄ろう]』。男たちは
 こう言って否定した...」 (Ho‘oulumāhie 2006: 143)

(88) では、主人公の友人が主語であり、主人公である女神ヒイアカに対して「言う-aku」の形をとり、続くヒイアカを主語とする文では「返事をする-mai」となっている。この場合、語り手にとり基準点は友人で、「自分が話す (=離れて行く方向)」、「ヒイアカが答えてくる (=近づいてくる方向)」と説明できる。

しかし (89) では、同じくヒイアカが主語の文で「言う-aku」の形をとっているが、その直後で話し手かつ主語が“モロカイの男たち”に変わっても、「否定を示し-aku」「言う-aku」と、同じakuをとっている。

両方とも、場面の構造としては

[発言を導く動詞+方向詞]の文 - 直接話法の文 - [発言を導く動詞+方向詞]の文

となっているが、基準点の切り替わりの有無という違いが生じている¹³。このような例から、5.3.2 で述べた事前の予測、「基本的に主語を基準とする」では説明ができないことは間違いない。

5.3.8 おわりに

本節では方向詞の出現傾向について分析を行った。基本的には先行研究が記述した傾向を数字で裏付けることになったといえる。また、特定の内容語と特定の方向詞との間での

¹³ (88) のように、主語を切り替えても基準点が変わらない(一貫した基準点がある)例がある一方、(89) のように主語が切り替わるごとに基準点が変わる例もあり、いずれのケースになるかの条件が不明ということを示す。

共起関係については、内容語の意味特徴より語彙的に決まっている可能性が高いことを提示した。今回扱わなかった新聞記事や行政文書などとの比較によりさらなる検証を行いたい事項である。

一方で、積み残しとなった課題も少なくない。

事前に明らかにしたい点と考えていた「基準点」の決定や交替の規則については本研究の範囲では明らかにできなかった。また、方向詞を伴わない動作を表す内容語は非常に多くあるが、そのような場合のいわゆる「無標の向き」はあるかどうか、あるとしてそれは語ごとに設定されているのか、それとも認知的なものなのかといった点も関連付けて説明することが望ましい点であるといえる。また、‘ana の場合と同じく、使用の促進・抑制をしている条件があるかも不明である。

方向という性質上、文脈情報が効いている可能性が高いため、今回のようなマクロな見方よりは、ある程度分量を絞って細かく談話分析を行う必要があるものといえる。少なくとも、今回とったプロセスにおいては有効なパラメータが得られなかったため、今後手法を変え取り組むこととする。

6 二つのハワイ語

現代ハワイ語（現在の人々が使用しているハワイ語の共時態）は、同地域で使用されている支配的言語である英語の影響や、教師やどこで学ぶかなどの学習環境により影響を受けている。それに加え、ハワイ語の文法記述もまた、この現代ハワイ語への影響力をもつという点で、一般的な、いわゆる活力のある言語の場合と比べると特殊である、と筆者は考える。

そのことを説明するためにはハワイ語・ハワイ語研究の歴史を考えなければならないため、必要な点に絞って以下に概説したあと、5章で見た‘ana および方向詞を取り上げ、「現代ハワイ語」について考える。

6.1 前提

6.1.1 ハワイ語・ハワイ語記述の略史¹

ハワイへの移住は西暦 500 年前後と言われている。また、1000 年頃には諸島の周縁部にも人々が住むようになったという。

ハワイ語はハワイ諸島で 8 世紀以降には使用されていたと考えられているにも関わらず、それが記録されるのは西洋との接触を待たねばならない。1778 年にクック船長率いる船団が訪れた際、船員 William Anderson が記録した語彙リストがそのはじめと考えられている。

こうした語彙リストについてはその後も多く見られるが、表記法を策定しハワイ語の記述に貢献したのは当時太平洋地域に進出していた宣教師である。1820 年代以降、先行していた近隣の記述（タヒチ語の表記やマオリ語の文法記述・辞書など）を参考に、ハワイ語のアルファベット表記がある程度規則化²されるようになり、1822 年には、ハワイ語表記に使用する文字の小冊子が出版された。ある程度本格的な辞書（Andrews 1836 など）も 1830 年代以降編纂され始めたが、文法記述については短いスケッチ以上のものは 1837 年に簡潔なものがようやく出版された。

これよりのち、初期の研究は後の時代に比べれば盛んであり改訂もこまめに行われた³が、翻訳聖書に資料が偏ったり、ラテン語や英語の文法記述の影響が色濃かったりと、現代の言語学的研究からみれば、貴重な示唆を含む一方で不十分な点も少なくない。また 1864 年を最後にこうした研究も途絶え、1950 年代初頭にハワイ語音韻論研究の一環として再び部分的なスケッチが現れるまで、本格的な現代言語学の知見に則る記述は現れなかった。

次に、西欧との接触以降の社会的背景について述べる。1795 年にハワイ諸部族を統一したカメハメハ一世以降のハワイ王朝（1810～1893）時代からすでに、白人系の人々の政治・経済的影響力は強く、特に英語話者の存在感は大きかった。彼らの力の増大が後の王朝転覆・アメリカ併合に繋がった。フラなどハワイ特有の文化やハワイ語もその中で軽視され、1870 年以降は公文書作成が英語となり、アメリカ併合の 1898 年には学校教育（厳しい場合には家庭においても）における使用が禁止されるに至った。

¹ Schütz (1994) で詳しく述べられている。また、ハワイの略史については後藤、松原、塩谷 (2004) 参照。

² 声門閉鎖音や一部子音の混同など、現代からみて問題を含んでいるものではある。また、声門閉鎖音の表記に関しては、この後も長く問題として残存し続けた。

³ Chamisso (1837), Andrews (1838, 1854), Alexander (1864) など。

また、初期にハワイを訪れたのは宣教師以外に、商船・捕鯨船の寄港などがあったが、いずれも欧米出身者たちであった。1830年代以降は、プランテーションが設立されたことから、中国・日本・ポルトガル・その他の太平洋諸島などから大量の移民が流入した。ここではハワイ語や英語を主な語彙供給言語とするピジンが発生したが、後にまで残存したのは英語を基とするものである。移民の言語はもちろんハワイ語にも影響したと考えられるが、これまでその種の研究はほとんどなされていない。

ハワイ語が危機的状況を迎えた主な理由は複数あり、上述の王朝転覆などが挙げられるほか、松原 (2004) によれば、ひとつには生活環境変化や伝染病の侵入によるハワイ人人口の激減が挙げられる。もうひとつは王朝の言語政策の失敗であり、指導層の英語傾倒や経済面でのハワイ語の弱さが国家語としてのハワイ語の定着を失敗させたという。こうしたことから、1900年時点で3万7000人程度だった母語話者が、1970年頃には2000人まで減少したといわれている。

しかし、1970年代にハワイ文化再興運動（ハワイアン・ルネサンス）がおこり、言語もまたその中心になり、1978年には州憲法によりハワイ語は州公用語になった。その後もハワイ大学ヒロ校 Hale Kuamo‘o (Hawaiian Language Center: *lit.* House Backbone) をバックボーンに教育が広まり、イマージョンプログラムも定着し、近年ではハワイ語を L1 と意識する話者数が増えている。同時期の言語研究として、ハワイ語-英語辞書 (Pukui and Elbert 1957。60年代の数回の改訂のほか、1971・1986年に大規模改訂・増補されている) が復興に先立って発表されていたが、何より長らく古いものしかなかった文法書のリストに、1979年になり Elbert and Pukui (1979) が加わったことが大きな成果であった。この後は言語復興に対する研究に比べれば分量的には散発的ではあるが、個別事項を取り上げる文法研究が続けられている。

6.1.2 「自然継承期ハワイ語」と「現代ハワイ語」

前節を踏まえると、途切れた時期は上述の「学校における教育禁止 (1898)」から「ハワイアン・ルネサンス (1970年代)」以前までであり、そこにハワイ語研究の断絶を並べて示すと、おおむね以下のようなになる。

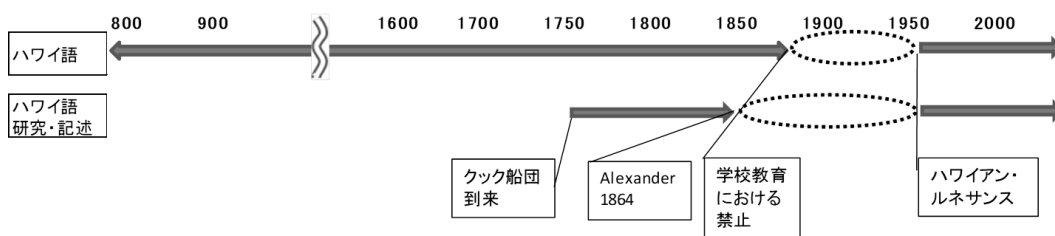


図9 ハワイ語およびハワイ語記述の略年表

図中の点線で囲まれた期間では、「ハワイ語の自然継承の断絶」とともに「自然変化の断絶」が起こっていると考えられる。ここで言う自然継承とは、元々近代的な学校制度が整って

いなかった状況下でも、家庭やコミュニティで親世代から子世代へ言語が滞りなく継承されていたことを指す。そうした状況がなく、学校やコミュニティでの使用言語がハワイ語から英語に変化して、日常生活で使用される言語ではなくなることを「断絶」と呼ぶとする。この断絶期においては、ハワイ語が使用される機会は激減、ほとんど無くなってしまおうと言ってもよいから、自然な言語変化も起こりにくいのではないかと考える。

こうした断絶期を挟んで、本研究では「二つのハワイ語」の存在を想定する。

①自然継承期ハワイ語：自然継承が行われていた時期の（かつ記録が残っている）

ハワイ語

②現代ハワイ語：自然継承の断絶後、1970年代以降の復興を経て現在使用される

ハワイ語

ハワイ語が公的に禁じられ、教育されなかった期間はそれほど長くはなかったため、第二次大戦後は高齢の話者が中心ながら母語話者がハワイ諸島に残っていた。そういう意味では「完全な自然継承の途絶」ではない側面もあるが、生活の中心が英語になっていたのは明らかであり、大多数のハワイ人はハワイ語を学ぶメリットを見出せなかったのは確かであろう。

元来ハワイ語は文字を持たない言語であり、自然継承期は長きにわたったと考えられるものの、残存する資料は1節で触れた通り19世紀以降に限られる。一方現代のハワイ語の話者は民族文化としての言語保存に意欲的であり、過去の文字資料の再編にとどまらず、現代の「話者」が新たに書き起こす種々の文章や、ハワイ語で書かれた学術研究も存在する。ただ、こうした新しいハワイ語資料を生み出す人々は、Elbert and Pukui (1979) を規範としてハワイ語を習得した可能性が非常に高く、その点で現代ハワイ語には規範文法の影響が多少なりともあるのではないかと考えられる。

より具体的には、現代ハワイ語の性質について、分析や考察に先立ち、次のように仮説を立てた。現代ハワイ語は、1970年代以降の高等学校教育による伝承が始まりであり、その後のイマージョンプログラムにおいても、子供たちがそうした学習者を教師としてハワイ語を習うという事情から、話者は習得に際し、母語話者の知識や直感に頼ることができないため、「教科書」に頼ることになる。そして、現代ハワイ語に該当する時期に使用されている教科書は、基本的にハワイ語言語学研究的知見、特に Elbert and Pukui (1979) に則っている⁴。

従って、レファレンスグラマーの規範意識が働くが、ハワイ語文法記述にはまだ不足も多く、頻出の機能語に限っても、その出現条件や機能の記述・定義が明確でないものも少なくない。その結果、自然継承期のハワイ語が示していた特徴や自然な言語変化の流れは

⁴ 発行年は1979年だが、Elbertによるハワイ語研究はそれ以前から行われており、Elbert and Pukui (1979:viii) も、その出発点は Hawaiian-English Dictionary (Pukui and Elbert 1957) にあるという。また現在使用されている代表的教科書のひとつ、Hopkins (1992:ix) の Preface では、次のように記されている。“This book is the culmination of thirty years of studying Hawaiian that started in Samuel Elbert’s class at the University of Hawai‘i at Mānoa in 1958.”

途絶え、現代ハワイ語は自然継承期ハワイ語とは別の性質をすでに示し始めているのではないかと推測する。

これを踏まえ、次節以降で‘ana と方向詞の現代ハワイ語における性質を見る。それぞれの時期のハワイ語の資料として用いたのは以下のテキストである。

自然継承期ハワイ語：*Ka mo‘olelo o Hi‘iakaikapoliopole* (Ho‘oulu māhiehie 2006)

Selection from Fornander’s Hawaiian antiquities and folk-lore (Elbert 1959: 6-113)

現代ハワイ語：*Na hana kupanaha a ‘Āleka ma ka ‘Āina kamaha‘o.*

(Carroll 2012, 『不思議の国のアリス』のハワイ語版)

これらのテキストを選んだ理由は以下の2点である。

- ①基本的に3人称視点で進行する物語文であるという共通した特徴を持つ
- ②現代ハワイ語のテキストについては、英語原典があるものである

①については、二つのハワイ語を比較することが目的であるため、物語文とそれ以外とを比較することで文章形式による差異を見てしまう可能性を排除するために形式を揃えた。

②に関して、もちろん現代ハワイ語テキストには、はじめからハワイ語で書かれたもの(他言語による原典を持たないもの)が数多く存在するが、本節の目的が‘ana と ing 形の関係を見ることであるため、「英語原典の ing 形を見る → 話者が‘ana を想起する」という結びつきになっているかどうかを確かめやすいものとして採用した。

6.2 ‘ana と-ing 形

現在ハワイ語教育において最もよく使用されているテキストのひとつ、Hopkins (1992) は Elbert の教え子が著者で、序文には Elbert に始まったハワイ大学マノア校のクラスの成果の集積であるとあり、参考文献リストにも文法書⁵は Elbert and Pukui (1979) のみが挙げられている。

このテキストでは‘ana を説明する際、“‘Ana is a nominalizing particle that turns verbs into nouns describing actions.” (Hopkins 1992:186)として用例(異なり語数11語)を挙げているが((6-1)参照)、そのほとんどが名詞の-ing 形⁶の対訳を与えられている。

⁵ 文法書ではなく語学学習のテキストであればいくつか他にも挙げられているが、出版時期は1980年代である。

⁶ 英語の ing 形といっても、動名詞以外に現在分詞や形容詞などもあるが、これと関連するかどうかは不明であるものの、初期のハワイ語文法記述でも、‘ana が進行相に対応する ana と混同されるケースもあった。

こうした事情も含め、今回は明らかに ing 形ではないもの(king, something など)を除いたものを、それ以上分類せず“-ing 形”という語形に注目して一体として扱っている。そのため、表26の-ing や表27の-ing の列の数字には実際には動名詞以外のものも多く含まれている。なお、明らかに動名詞であろうものは約270例であり、その他進行相・修飾語としての分詞・分詞構文・判別しにくいものなどが約400例である。

対訳が-ing 形ではない例も 3 例あり、そのうち 2 例は、「前置詞+‘ana 句」で when 節に対応する従属節を作るタイプの文である。これはハワイ語文では非常によく見られる表現だが、(6-1c) に示した Hopkins (1992) の説明では、一般的な英語訳である when he went とは別に、at his going とも記されている。これは、ハワイ語で when 節に対応する表現を作る際の考え方を、英語話者である学習者に説明するため、直訳的には英語の「前置詞+ -ing 形」に対応する「前置詞+‘ana 句」を使用する、としているものである。よって、when 節を対訳とする場合でも、英語の-ing 形が学習者の念頭にあるといえる。

(6-1) [Det- V – ‘ana]

- a) **hele** → **ka hele ‘ana**
 GO ‘go’ Det GO Ana ‘the going’
- b) **ho‘omaka** → **ka ho‘omaka ‘ana**
 BEGIN ‘begin’ Det BEGIN Ana ‘the beginning’
- c) English: When he went,
 Hawaiian: At his going, **I kona hele ‘ana**
 Prep Poss.3sg GO Ana

(Hopkins 1992: 86 グロスのみ筆者による)

こうした対訳の在り方は、Elbert and Pukui (1979)、後続の研究でも概ね同様であり、いずれも英語の-ing に対応するとはっきり書かれているわけではないが、‘ana の訳に-ing 形を当てることが慣習化しているようである。

このことから、その大多数が英語を母語とする学習者たちの意識の中では、2 言語の二つの形式、‘ana と-ing が結びついて記憶されることを想定するのは自然と考える。

なお、現象として「‘ana と ing 形の結びつきが慣習化していること」と、「(少なくとも‘ana に関しては) 規範文法が現代ハワイ語に影響を与えていること」とは別のことである。ただし、結びつきの慣習化の動機のひとつとして規範文法が存在がある、と考えることは、上述のような経緯から不自然ではないため、今回は可能性の一つとしてこの 2 形式の結びつきに注目した。

また、繰り返し触れてきた通り、筆者は‘ana は自然継承期ハワイ語のうち記録が残っている時期、すなわち自然継承期ハワイ語末期には、‘ana がポリネシア祖語の段階で持っていた名詞化辞としての機能を失っていたか、少なくとも名詞化辞としての機能を失う変化がかなり進行していた、と考えている。一方で、この語は周辺の言語やそれに基づく祖語の再建を考慮すると、やはり元来は名詞化の機能を持っていたと考えられるためか、現在のレファレンスグラマーの記述では nominalizer という定義を与えられている。もしこの見方が正しければ、ハワイ語のなかでは一度名詞化辞でなくなったものが、周囲の言語や祖語の影響を受け、再び名詞化辞としての性質を取り戻す変化が起こった、ということになる。

以下では‘ana と ing 形の対応について、具体的な数を見ていく。

6.2.1 二つのハワイ語の ‘ana

まず、各資料における‘ana の出現数を提示する。

仮説として、‘ana が祖語の段階で持っていた名詞化の機能を失い、使用が必須である場合が考えにくかった自然継承期（の末期）に書かれたテキストよりも、名詞化辞という定義や、従属節を作る際に使用するという記述を意識する現代のほうが、出現がやや増えるのではないかと考えた。

表 25 自然継承期ハワイ語・現代ハワイ語の物語文における‘ana 出現回数の比較

資料名	自然継承期		現代
	Hi‘iaka [92215]	Selection from Fornander [19893]	‘Āleka [35916]
‘ana 出現回数	988	176	461
総語数に 対する割合	1.071%	0.884%	1.284%

[]内はコーパスの総語数

実際、同じ3人称視点の物語文での頻度を見ると⁷、単純な割合だけでいえばやや現代の方が高くなっており、ある程度は予測と一致している。とはいえ、それほど大きい相違でもないため、規範意識が機能しているというには十分ではない⁸。

6.2.2 現代ハワイ語の ‘ana と-ing 形

次に、より現代ハワイ語に注目して、テキスト中に現れた‘ana 句が英語原典ではどのような用法であったかをチェックした。結果と用例を以下に示す。

⁷ 違うタイプの文として祈禱文や医学書などからも‘ana の出現数をカウントしたが、今回取り上げた物語文形式での頻度が高いのに対し、祈禱文ではかなり出現数が減ることが分かっている。

⁸ なお、現代ハワイ語の副資料として(1) ハワイ語文書データベース Ulukau (<http://ulukau.org/>) で検出できる現代ハワイ語によるテキストデータのうち、総語数が 500 語を越えるもの、(2) 新約聖書 2012 年版の“Acts”(<http://baibala.org/cgi-bin/bible>)、(3) リリウオカラニの伝記 Lowe(1994)について‘ana の出現数を採ったところ、次のようになった。

資料名	総語数	‘ana 出現回数	総語数に対する割合
Wilson(1994)	1237	14	1.13%
Keolanui (2006)	1140	28	2.46%
Stender (2004)	829	6	0.72%
Kawa‘i‘ae‘a, Ka‘awa, Keolanui and Kruger (2009)	1556	14	0.90%
Wilson(1992)	782	7	0.90%
Avelino (2006)	1858	42	2.26%
Wilson (1993)	589	7	1.19%
Kruger (2007)	578	6	1.04%
The students and Teachers of Ke Kula ‘o Samuel M. Kamakau (2008)	532	3	0.56%
Mattoon (2004)	818	14	1.71%
Baibala Hemolele, Acts (2012 ver.)	34009	278	0.82%
Lowe(1994)	4602	70	1.52%

表 26 “Āleka”に見られる‘ana 句に対応する原典の用法

	-ing 形	従属節用法 (86)				その他	総数
		when	before	after	as		
用例数	140	30	12	3	6	235	461
総数に対して 占める割合	30.4%	18.7%				51.0%	100%

(6-2) -ing 形に対応する例

布： ...e no‘ono‘o ai i **ke kū ‘ana**, ... (Carroll 2012 :8)

TA THINK Dem Prep Det STOP` Ana

英： ...to think about stopping herself... (Carroll 2008b: 8)

(6-3) 従属節用法に対応する例

布： ... a i **ka pau ‘ana** o kāna ha‘i‘ōlelo

AND Prep Det FINISH(ED) Ana Poss.O Poss.A.3sg SPEECH

iki, ...

SMALL (Carroll 2012 :29)

英： ... and, when it had finished this short speech, ... (Carroll 2008b: 28)

‘ana の総数に対し、約 30%が-ing 形で出現しており、また同じく‘ana の基本的な用法としてよくいわれる従属節構造も含めるとほぼ半数になる。それ以外のものについては行為名詞で出るもののほか、特に対応しない構文によるもの・別の言い回し以外にも、そもそも対応する表現と思われる語や文が全く見つからなかったものも少なくなかった。

結果として「その他」に含まれる要素が多くなり、現時点では解釈の難しい数字ではあるが、同じく英語との対応の慣習化が考えられる他の語の場合などと比較することが今後望まれる。

最後に、ハワイ語・英語双方の『アリス』における、章ごとの‘ana・-ing 形の出現回数を見た。なお、0 章は序文の詩を指している。

表 27 『アリス』 章ごとの‘ana (ハワイ語)・-ing (英語) 出現回数

章	‘ana			-ing		
	出現回数	総語数	総語数に 対する割合	出現回数	総語数	総語数に 対する割合
0	3	337	0.89%	2	232	0.86%
1	49	2809	1.74%	54	2151	2.51%
2	25	2625	0.95%	55	2352	2.34%
3	23	2155	1.07%	42	1928	2.18%
4	36	3486	1.03%	71	2932	2.42%
5	31	2806	1.10%	51	2511	2.03%
6	39	3414	1.14%	78	2933	2.66%
7	39	3333	1.17%	60	2761	2.17%
8	35	3420	1.02%	81	2798	2.89%
9	56	3096	1.81%	46	2720	1.69%
10	32	2596	1.23%	41	2414	1.70%
11	42	2744	1.53%	36	2713	1.33%
12	51	3095	1.65%	61	2406	2.54%
計	461	35916	1.28%	678	30311	2.24%

ハワイ語にしても英語にしても、章ごとの偏りが大きい。-ing 形の用法の内訳をさらに細かく見ること分布の見え方が変わる可能性が大いにあるが、今回の取り扱いでは‘ana と -ing 形の章ごとの増減は必ずしも一致していない。むしろ 9 章のように、ハワイ語では平均よりずっと出現割合が高くなるのに対し、英語では平均より大きく低くなるなど、相反するふるまいも見られる。今回の結果からは‘ana と -ing 形の相関関係を見出すことは難しいが、両者の関係をより精緻に考察するため、判断が難しい例への対応を考えつつ英語の -ing 形の用法の内訳をさらに細かく判断し改めて割合を出すことや、同じような条件をもつ他のテキストとの比較などが次段階として必要である。

6.3 方向詞

方向詞と‘ana とでは、英語との対応関係において差異がある。それは、ハワイ語の方向詞に対応する英語の形式や語、すなわち「‘ana に対する-ing」と同様の関係にある語形や機能語が確立できないことである。方向詞には mai (<話者などの基準点>に向かって)、aku (<基準点から>離れて)、a’e (上に)、iho (下に) の 4 語と、maila、akula、a’ela、ihola のように、それぞれに代名詞的要素の la が付加された形⁹とがある (何もつかない形を ∅ 形、la が付加された形を la 形と呼ぶ)。

⁹ 詳細はまだ明らかになっていないが、∅ 形と la 形には機能の違いがあるといわれることもある。例えば Schütz, Kanada and Cook (2005)は akula、maila にはアスペクトマーカとしての機能があると述べている。

このうち、a'e と iho についてはそれぞれ up、down のように分かりやすく対応する語が考えられる。一方、mai と aku は 'hither'、'thither' が対応する語としてあてられていることが多いが、これらは英語の文章においてそれほど頻度の高い語ではなく、ハワイ語の文章においてそれなりに高頻度である a'e や iho との対応が慣習化しているとは考えられない。'ana と ing 形のように対応する形式らしきがある訳でもなく、形態上確かめにくく、意味上必要な場合に意識して使用することが求められているのみである。ここにもまた、5.3 で見た mai-aku の組と a'e-iho の組との間での非対称性が見られるといえる。

方向詞の場合の仮説は、上記のような対応関係のため 'ana の場合とは異なる。方向詞は、'ana と -ing 形のように形態上分かりやすい明確な対応関係が示されておらず、それが特に mai と aku で顕著である。つまり「(話者の多くにとって第一言語か、そうでなくとも馴染み深い言語である) 英語において形態上表出する対応要素がない」ことから、話者にとって使いどころがわかりにくい要素であると予想される¹⁰。よって次のように考えた。

- ① 意味上動作の方向性を明確にしなければ解釈に誤解が生じると想定される場合や、英語とは関係なく、ハワイ語イディオムの場合では使用が義務的になる
- ② 一方、それ以外の場合には総じて方向詞が使用される頻度はむしろ低くなる

以上を踏まえ、まず 6.2.1 で示した 'ana の場合と同じように、二つの時期のハワイ語における、3 人称視点物語文での出現数を比較する。なお、ここでは maila と akula にアスペクトマーカとしての用法がある、という報告 (Schütz, Kanada and Cook 2005 など) に留意し、la 形は別項目としてカウントした。

¹⁰ 方向詞の使用のうち、比較や時間用法などその後研究が進んだところもあるが、Elbert and Pukui (1979) においては次のような記述がされていることからこのように述べることができると考えられる。"In conclusion: It is difficult or impossible to fashion hard and fast rules for the use of dicretionals. The safest course is simply to follow examples slavishly." (Elbert and Pukui 1979: 95)

表 28 自然継承期ハワイ語・現代ハワイ語の物語文における方向詞の出現回数の比較

資料名	自然継承期				現代	
	Hi'iaka [92215]		Selection from Fornander [19893]		'Āleka [35916]	
	出現回数	総語数に 対する割合	出現回数	総語数に 対する割合	出現回数	総語数に 対する割合
mai (toward)	1295	1.40%	229	1.15%	362	1.01%
maila (toward)	621	0.67%	129	0.65%	173	0.48%
aku (away)	1109	1.20%	175	0.88%	173	0.48%
akula (away)	572	0.62%	211	1.06%	292	0.81%
a'e (upward)	430	0.47%	41	0.21%	54	0.15%
a'ela (upward)	347	0.38%	72	0.36%	68	0.19%
iho (downward)	225	0.24%	32	0.16%	77	0.21%
ihola (downward)	264	0.29%	126	0.63%	66	0.18%
合計	4863	5.27%	1015	5.10%	1265	3.52%

[]内はコーパスの総語数

今回の範囲では、合計で見れば方向詞の総語数に対する割合は、自然継承期ハワイ語に比べ現代ハワイ語で下がっていると言えそうである。しかし個別の語を、 \emptyset 形と la 形を区別せずに見ると、aku は自然継承期と現代で出現割合の違いが比較的大きい一方、iho のように、現代になり使用頻度は下がっているが、それほど大きい違いを示してはいないものもあり、ふるまいは一様ではないことがわかる。

次に \emptyset 形対 la 形の比較でみると、そもそも同じ自然継承期でも Hi'iaka と Selection from Fornander とで傾向が異なる。特に aku-akula は二つの資料が真逆の傾向を示しており、iho-ihola でも二つの形の使用割合を見ると、Hi'iaka ではほぼ同じ割合で出ているのに対し、Selection from Fornander では la 形が明らかに多い。このような状況から、今回採用した自然継承期ハワイ語の二つの資料を単純に現代ハワイ語の資料と比べることは難しく、両者に違いがあるとすれば、現時点では資料による差異だと考えるのが妥当である。

なお、‘Āleka ではアスペクトマーカの機能を持つというもののうち akula は確かに比較のよく表れているようであるが、同じくアスペクトマーカの機能を持つという maila が多く出たともいえない。

また、‘Āleka における各方向詞のふるまいに特徴があるかどうかに着目したところ、原典における表現との対応については以下のような特徴がみられた。

まず mai だが、362 例中 98 例が名詞句中に現れた。この中には位置名詞に後続するものと、その他場所を表す内容語とが含まれている。また、15 例は先行研究の言うイディオム的な用法であった。意味の面に注目すると、分かりやすく方向が関係するものである、明らかに移動を示していると読める内容語との共起は 74 例であった。その他では、全体のうち 115 例は発言を示す内容語との共起であるが、全体としては様々な内容語と共起しており、これ以外には目立った偏りはない。

同じく mai の la 形に着目すると、maila は 173 例見られたが、名詞句での出現は 9 例で \emptyset 形よりも明らかに少ない。一方、共起する内容語の意味では、明らかに移動を示しているものが 30 例、発言を示す内容語がやや多く 45 例みられた。そのほか、知覚（見た、聞いたなど）を示す内容語が 19 例で多かったのに加え、先行研究では iho と共起することが指摘されている思考に関する内容語との共起も 5 例見られた。

次に aku では、173 例中 54 例が名詞句中に現れた。mai と同じく、位置名詞・その他場所を表す名詞の両方を含むが、割合としては mai よりもやや高い。また、イディオム的な用法は 4 例であった。意味の面では、明らかに移動を示している内容語との共起が 35 例みられた。その他では、発言を示す内容語が 37 例、知覚を示す内容語が 25 例であった。また、比較を表す内容語との共起が 11 例みられた。

一方 akula は、 \emptyset 形より la 形の出現数が非常に多いという点で他の方向詞とは異なる特徴を示している。291 例中 16 例が名詞句中に現れており、mai とあわせてみると la 形は \emptyset 形に比べて名詞句中では現れにくいといえる。意味の面では、明らかに移動を示している内容語との共起は 60 例、発言を示す内容語が 49 例、知覚を示す内容語が 33 例見られた。また、maila の場合と同じく、iho と共起するとされる、思考を示す内容語との共起が 13 例見られた。なお、 \emptyset 形で見られた、比較を表す内容語との共起は見られなかった。

このように、mai と aku では移動（すなわち、物理的な方向が存在する内容語）を示す内容語との共起以外では、発言や知覚を示す内容語が多いように見える。しかし、この点についてはテキストの性質に注意しなければならない。『アリス』は全体として登場人物の台詞が多く、その前後に「～が言った」「～は答えた」のような表現が伴いやすい。また、主人公であるアリスの目を通して、現実ではありえないような不思議な出来事を描写するシーンが多く、「(何か奇妙なものを) 見た」「(不思議な音を) 聞いた」のような状況もよく見られた。このことから、今回の結果はテキストの性質によるものであり、本研究では、5.3 で行った自然継承期ハワイ語の場合に比べ、現代ハワイ語では mai や aku が発言や知覚を示す内容語と特に共起しやすいとは考えない。

また、Schütz, Kanada and Cook (2005) では maila、akula がアスペクトマーカとしての機能を持つとしている。これについて考えるため、TA マーカーとの共起関係にも着目した。maila・akula の全てが TA マーカーとの共起を示した一方、TA マーカーも方向詞もない文で

あり、そもそもテンス・アスペクトを明示していない地の文も少なくなかった。今回コーパスとした『アリス』の原典は、地の文は基本的に過去形で書かれている。しかし、英語におけるテンス・アスペクト標示の義務性に比べ、ハワイ語ではテンス・アスペクトの標示は必須ではないと言われる。それをあわせて考えると、今回の結果からは *maila / akula* が TA マーカーとして働いているかどうかの判断はできない。

次に垂直方向を示す *iho* と *a'e* に着目すると、*mai · aku* とは用法が明らかに異なった。それを説明するため、以下では共起する内容語ではなく、*iho · a'e* 自体の用法に着目する。

iho は、77 例中 61 例が再帰代名詞 (*herself, itself* など) に対応する形で、ハワイ語においても再帰用法で使用されていた。残りの例は時間的近接性を表す用法が 8 例見られたほかは性質的に共通するところは特になく、先行研究でほかに指摘されていた飲食・思考に関する動詞との共起は見られなかった。

他方、先行研究で再帰用法をもつとされていた *ihola* は 66 例中 5 例しか再帰用法が見られず、思考 (18 例) が突出して多いほかには明確な移動や方向性を提示する例が 10 例ある以外、特に多くみられる意味・用法上の傾向は無かった (時間的近接性を表す用法は 4 例あったが、飲食の用法は見られなかった)。

最後に *a'e* だが、先行研究ではイディオム的使用・比較・時間的近接性を示す用法の多さが指摘されている。それを踏まえてまず *a'e* を見ると、イディオム (15 例)・(時間的¹¹) 近接性 (21 例)・比較 (7 例) が大半を占めており、また時間的近接性についても一部は「翌日」のように定型表現と考えられるものであった。それ以外の例では、位置名詞 *luna* (「上」) と共起するものはあったが、文脈を含めても「上」と関連付けて説明できる用法はほぼなかった。

一方、*a'ela* ではイディオムらしきものではなく、時間的近接性は 1 例、比較 1 例と \emptyset 形の場合と全く振る舞いが異なった。その代わり立ち上がる・見上げるなど「上」を指向する用例が 17 例と多く、それ以外では Hopkins (1992) が *iho* と共起しやすいと述べていた、思考に関する動詞との共起が 14 例見られた。

やや特異な例として、*sat down* に対応して *noho a'ela* が当てられているものがあつた。単に「座った」と示したいのであれば、*a'ela* ではなく *iho(la)* の使用が予想され、方向としては正反対である。ここで、先行研究とは異なるが、*a'ela* が完了のテンス・アスペクトマーカーとしての用法を持つ、と仮定する。すると、思考に関する動詞が、先行研究のいう「下」指向の *iho* ではなく「上」指向の *a'ela* の方とより多く共起した理由を、意味上の理由ではなくテンス・アスペクトを示すためである、と説明することも可能になる。もっとも、これは先行研究の指摘が正しいという前提とした可能性のうちのひとつであり、現代ハワイ語の特徴として方向詞の記述に加えるには、更なる裏付けを必要とする。

以上要素ごとに特徴を述べてきた。全体として、方向詞については話者 (書き手) による差異もありそうであり、現代ハワイ語の特徴といえるかどうかは分からないが、事前の予測とおおよそ一致して減少している可能性がある。このことと、従うべき規範が少な

¹¹ 細かく見ると、時間的近接性を表す用法 (「次の日・次の瞬間」など) 10 例と、必ずしも時間的とは言えないが近接・隣接を示す用法 (「次の詩・次の証人」など) 10 例が含まれた。

いこととも関係しているかどうかは今後見る資料を増やし検討する価値があるかもしれない。

6.4 おわりに：本章の位置づけ

本章では、先行研究では扱われてこなかった二つの時期のハワイ語の違いについて試験的に取りあげ、前章までに注目してきた機能語と関連付け、現時点で挙げられる事項をいくつか述べた。決定的な差異が見出せたとはいえないものの、両者の間に何らかの違いがある、という想定のもと、今後質・量を向上させてさらに検討するに値することは示せたと考える。

この「現代ハワイ語」に当たる時期のハワイ語に見られる新たな特徴が全く記述されていない訳ではなく、例えばShionoya (2004:242) は、ハワイ語母語話者へのインタビュー調査を行う過程で、イマージョンプログラムでハワイ語を習得する子供が、元来のハワイ語文法では生成されない文を発話したことを報告している。

(6-4) He aha kēia mea no?

what this thing for ‘What is this for?’

Cf. He aha kēia? ‘What is this?’

(Shionoya 2004:242)

元来のハワイ語文法に則る場合、前置詞で終わる文は許容されない¹²。Shionoya (2004) はこの発話を英語の影響によるものではないかと述べており、英語の対応する文のことを考えると、確かにそのように思われる。その場合、発話者である子供は、英語の前置詞 for とハワイ語の前置詞 no を対応させており、英語文で必要になる前置詞に対応するハワイ語の前置詞を、ハワイ語文でも文末に置いたということになる。

現時点では個別の報告であり、使用の実情はともかくこうした報告の数は多いとは言えないが、イマージョンプログラムに参加して育つ子供たちが増えていくにつれ、主に英語やその他の言語の影響を受けて元来の用法から逸脱する表現が増え、将来的にハワイ語の文法に適った文として定着するようになる可能性はある。上の例で言えば、対応する英語文で前置詞が文末に来る表現に、ハワイ語文でも文末の前置詞を置くことを繰り返すうち、ハワイ語文法においても特定の場合には前置詞を文末に置くことを許容するようになるかもしれない。

言語変化の予測はできないが、今後のハワイ語話者数増加は統語的変化の可能性につながるとは言えそうである。一方で、イマージョンプログラムでも、教育で使用される文法は「教科書」的、オーセンティックなハワイ語文法であり、そうした文法の影響力が強い状況を見ると変化が抑制されるようにも思われる。

¹² 現実にはあり得る発話として提示しているが、非文であるため、実際には教師が聞けば答める文であることを補足しておく。

いずれにしても、新世代のハワイ語話者がハワイ語を使用する生活場面が増える¹³ことで、「現代ハワイ語」と「自然継承期ハワイ語」との差異が一層拡大することが考えられるため、今後一層コミュニティにおける発話の観察が実施されることが期待される。

このような状況を踏まえたうえで、本章を論文に含めた意図について、最後に述べておきたい。

本章冒頭に述べた通り、筆者は、ハワイ語は特殊な言語状況であると考えている。L1としてハワイ語を挙げる人口が増えていると述べたが、一方でハワイ語の使用されている地域では一部の例外的事例をのぞき基本的に英語が支配的であり、またイマージョンプログラムが確実に成果を挙げる一方で、ハワイ語主体で生活し、ハワイ語主体で仕事をするのできる人の割合は決して高くはなく、英語主体の生活への転向を余儀なくされることもある。このような状況は、現実的に考えて当面続くものと考えられる。

よって、現代ハワイ語は家庭やコミュニティなどにおける自然継承よりも、学校教育を通じての継承が主であり続けるものとする。そしてこのような継承の在り方の場合、自然継承に比べてより「規範意識」が強く作用することが予想される。イマージョンプログラムであれ高等教育であれ、現在の教育そのものが基づいているのは、ハワイアン・ルネサンス期に発表された **Elbert and Pukui (1979)** を代表とする、ハワイ文化・ハワイ語研究の知見である。そして、仮に今後実際にハワイ語で生活することのできる人々が増えてきたとしても、一度自然継承および自然変化が途絶えたことは変わらず、やはり 20 世紀初頭までのハワイ語と新しいハワイ語の間には、音声的・統語的・意味的のいずれかの点において、あるいはこれらの全ての点において、何らかの性質の違いが生じていると考えるのが妥当である。

ハワイ語のレファレンスグラマーは更新を要する時期に来ているが、そうした言語学的研究の成果が、今の人々が学び習得する「現代ハワイ語」の性質そのものに対して影響を与える可能性がある。このことは良いことでも悪いことでもないが、それ自体が興味深い現象であると同時に、ハワイ語コミュニティに研究者という立場から参与する者として自覚しておくのが望ましいと考えている。

¹³ イマージョンプログラムの卒業生が、学校教育を終えた後にどのような職業に就き、どのような生活を送るかという点は、ハワイ語イマージョンプログラムの大きな課題である。現状では、ハワイ語を主に使用して生活するには、ハワイ語・ハワイ文化の教師など限られた職種を選ぶことになり、その他大多数の職業に就く場合にはやはり英語コミュニティに入り、英語を使用する必要性に迫られる。家庭はその限りではないが、配偶者のハワイ語能力によってはやはり英語を使用する可能性があり、本人のハワイ語能力の高さが、次世代に自然継承されるようになるには大きな社会的変化が起こらねばならず、その道は険しいものと考えられる。こうした状況下で自然な言語変化が起きるか、起きるとしたらどのような変化なのかは言語学的観点からは興味深いといえる。

7 結び

7.1 本研究で明らかになった点

本研究では、ハワイ語文の基礎的単位である動詞句・名詞句において現れ、さまざまな統語的役割を担う機能語について、その性質を考察・記述することを試みた。そしてその際、特に‘ana と方向詞の 2 カテゴリーに着目した。また、各要素の性質を明らかにするためにあたっては、ハワイ語が日常的に使用されていた時期の文献資料から用例を採った。

第一に、ポリネシア祖語の名詞化接辞に由来するとされ、一般に名詞化辞と定義される‘ana だが、本研究で提示した、内容語の「動詞」「名詞」というカテゴリは統語的なレベルのものであり、語彙素の性質ではないというハワイ語の品詞観と名詞化というプロセスはそもそも噛み合わない。そのうえで、‘ana が名詞化以外の機能を担っているか否か、あるいは‘ana が句に含まれるかどうかで統語的・意味的な違いがあるかについて、それぞれ機能語・内容語との共起関係に注目して考察を行った。

その結果、‘ana の使用を促進する、あるいは抑制する要素は明確ではない、と述べた。共起する機能語・内容語は特定の偏りを示すことはなく、コーパス中にはミニマルペアのようなものまで見られた。そしてこのことが、自然継承期ハワイ語において、‘ana が機能と形式の並行性を失う途上にあったことを示唆すると結論付けた。

ただし、チャント文での出現割合が他のジャンルの文章における場合に比べ少ない、という点は新規に明らかになった。また、決定的な条件が明らかになった訳ではないものの、まとまった量の用例から量的な‘ana の分布の傾向を提示することはできたものといえる。特に、機能語との共起関係に着目したデータを提示できた点は先行研究にない成果である。本研究の段階では決定的な、あるいは新規の条件や規則を提示するには至らなかったが、具体的な分布を示すことで、‘ana をいつ使うことができるのか、いつ使われにくいのかを理解するのに貢献するものと考え。よって、本研究は岩崎 (2009) とあわせて、対象とした時期 (19 世紀～20 世紀初頭) のハワイ語における状況を一定程度説明できたものと考え。

第二に、方向詞については、先行研究で主たる役割は説明されており、本研究のデータもそれらに矛盾しないものであった。本研究が考察対象としたのは、説明されていない部分であり、特に方向を考えるうえでは重要である、誰・何を基準として方向を決定し、マークするのかや、‘ana の場合と同じくいつ使うことができ、いつ使われにくいのかという点である。

分析の結果、方向の基準点については明確にはできなかったが、各方向詞の特徴を記述したほか、aku <離れていく>/ mai <近付いてくる>の組と、a'e <上へ> / iho <下へ> の組との間には分布・ふるまいの違いを見た。また、共起する内容語への着目により、似た意味特徴を持つ内容語でも方向詞との共起関係においては異なる傾向があることが明らかになった。そのため、方向詞を伴いやすいかどうか・伴う方向詞の偏りがあるかどうかは、内容語の意味的性質というより、語彙的に決まっている可能性が高いことを提示した。加えて、‘ana の使用にある程度影響を及ぼしていると考えられた文章のジャンルによる出現頻度の違いは方向詞においてもある程度当てはまるが、方向詞ではそれ以上に「対話性」の影響を受けており、文章の書き手にとって聞き手が意識されるかどうかの方がより重要

であると述べた。方向詞の記述全体としては上で述べたように基準点が今後明らかにすべき課題として残るが、‘ana の場合と同様、やはり具体的な分布を示すことで、使用されやすい状況を理解する一助となるものとする。

また、‘ana と方向詞以外の要素については、受身マーカ―が名詞句中で現れ、かつその頻度も低くないことを提示した。その他の要素については、本研究のコーパスの傾向と、先行研究の記述が矛盾しないことを確認した。

以上に加えて自然継承期ハワイ語とは別に、1970年代のハワイアン・ルネサンス以降のハワイ語を「現代ハワイ語」と定義し、それがどのような性質を持つか、特に英語やレファレンスグラマーとの関係に着目しつつ考察を行った。現時点では現代ハワイ語の統語的研究はほとんど行われておらず、本研究での考察は現代ハワイ語の統語論研究の第一歩と位置付けられる。こちらもやはり決定的な違いやその要因を提示するには至らなかったが、ハワイ語教科書で対応させられる‘ana と ing 形、反対に英語に対応する文法要素のない方向詞の出現数について、それぞれ量的なデータを提示した。特に、方向詞の出現割合は僅差ながら減少しており、これが話者による差異なのか、それとも他のデータからも同様の傾向が見られるか、今後繋がる結果を提示したと考えている。

7.2 今後の課題

今回取り上げたハワイ語の機能語について、更なる考察を必要とする点は少なくない。特に今後の課題とすべきことについて最後に挙げておく。

‘ana については、所有形を内容語の主語として付加する場合、O/A形のどちらの形が選択されるか不明瞭なままである。関係節の場合にも類似の選択があり、援用できる部分もあるが、いずれにしてもこの点に注目するのであれば所有形と‘ana の共起する用例をより数多く、かつそれぞれの例の文脈や内容語の性質を細かく見る必要がある。

方向詞については、5.3でも取り上げたが、基準点がどこに置かれるか、その選択・切り替えの規則や傾向が明らかになっていない。特にダイクティックな aku / mai については、談話構造・語りの構造との関係を考慮しつつ考察することが肝要である。加えて、6章でも触れたが、方向詞 la 形が TA マーカ―として機能しているかどうかも課題である。

‘ana や方向詞以外の要素では、指示詞の使用について取り上げる余地がある。「指示詞」と呼ぶものの中には多様な語があり、それらの間の相違点に注目したい。また、強意詞も数種類あるが、これが実際に「強意・強調」の要素であるのか、それ以外の何か別の機能も持っているのかなど、記述を充実させるべき点が多い。

また、本研究ではハワイ語に限定して議論を進めたが、ポリネシアの他の言語との比較研究ももちろん重要である。特に近年ではマルケサス語の空間表現を詳細に取り上げた

¹ 最後に付け加えておきたい点だが、「現代ハワイ語」を提示することは、「今のハワイ語がかつてのハワイ語とは変わってしまった」というようなネガティブな意味合いを持たない。言語学的観点から言えば、どのような言語も変化を当然のものとするからである。また、ハワイ語を「大切なもの」・文化的財産として重要視する観点からいっても、むしろ言語変化が存在するという事実自体が、ハワイ語が現在において、一定程度生きた言語として存在している証左であるともいえる。いずれにせよ、筆者としては「現代ハワイ語」という定義に関して、何ら否定的な意図を持たないことを強調しておく。

Cablitz (2006) が発表されており、ハワイ語に系統関係が非常に近い言語であるため、ハワイ語文法記述の進展のためにも注目すべきものである。

さらに手法の観点からは、本研究では全体像を明らかにすることを意識して、大きなデータから得る量的な傾向を主としたが、ここまでに挙げた今後の課題には、ある程度対象とするテキストデータの量を絞って、一つずつの例を詳細に見ていく方法が適していると考えられる。

話者へのインタビュー調査が難しい状況は今後も変わらないが、豊富なテキストデータを最大限活用し、様々な手法を交えて、ハワイ語文法のすがたを詳らかにする継続的な努力が望まれる。

参考文献

- Alexander, William De Witt (1864) *A short synopsis of the most essential points in Hawaiian grammar: For the use of the pupils of Oahu College*. Honolulu: Whitney.
- Andrews, Lorrin (1836) *A vocabulary of words in the Hawaiian language*. Lahainaluna: Press of the High School.
- Andrews, Lorrin (1838) Peculiarities of the Hawaiian language. *The Hawaiian Spectator* 1(4), pp392-420.
- Andrews, Lorrin (1854) *Grammar of the Hawaiian language*. Honolulu: Mission Press.
- Andrews, Lorrin (1865) *A dictionary of the Hawaiian language, to which is appended and English-Hawaiian vocabulary and a chronological table of remarkable events*. Rutland, Vt.: Charles E. Tuttle Co.
- Andrews, Lorrin and Henry H. Parker (1922) *A dictionary of the Hawaiian language*. [Revised by Henry H. Parker.] Honolulu: Board of commissioners of the public archives of the territory of Hawai'i.
- Blust, Robert A. (1999) Subgrouping, Circularity and Extinction: Some Issues in Austronesian Comparative Linguistics. In: Elizabeth Zeitoun and Paul Jen-kuei Li, (eds.) *Selected Papers from the Eighth International Conference on Austronesian Linguistics*, pp.31-94. Taipei: Institute of Linguistics (Preparatory Office), Academia Sinica.
- Cablitz, Gabriele H. (2006) *Marquesan: a grammar of space*. Berlin: Mouton de Gruyter.
- Chamisso, Adelbert von (1837) *Über die Hawaiische Sprache*. Leipzig: Weidmannischen.
- Chung, Sandra (1973) The syntax of nominalizations in Polynesian. *Oceanic Linguistics* 12, pp.641-686.
- Cook, Kenneth William (1996) The temporal use of Hawaiian directional particles. In: M. Putz and Rene Dirven (eds.), *The Construal of space in language and thought*, pp.455-466. Berlin/ New York: Mouton de Gruyter.
- Elbert, Samuel H. and Mary Kawena Pukui (1979) *Hawaiian grammar*. Honolulu : University of Hawaii Press
- 後藤明、松原好次、塩谷亨編著(2004)『ハワイ研究への招待』 関西学院大学出版会.
- Green, Roger C. (1966) Linguistic subgrouping within Polynesia: the implications for prehistoric settlement. *Journal of the Polynesian Society* 75, pp.6-38.
- Green, Roger C. (1988) Subgrouping of the Rapanui language of Easter Island in Polynesian and its implications for East Polynesian prehistory. In: Claudio Cristino, Patricia Vargas, Roberto Izaurieta and Reginald Budd (eds.), *First International Congress, Easter Island and East Polynesia*, vol. I: Archaeology, pp.37-57. Isle de Pascua (Easter Island): Universidad de Chile, Facultad de Arquitectura y Urbanismo, Instituto de Estudios.
- Hawkins, Emily A. (1979) *Hawaiian sentence structures*. Canberra: Department of Linguistics, Research School of Pacific Studies, The Australian National University.
- Hawkins, Emily A. (2003) Distribution and function of Hawaiian *ana*. *Rongorongo studies* 12 (1), pp. 3-19.

- Hawkins, Emily A. and University of Hawaii at Manoa, Hawaiian Studies Program. (1982) *Pedagogical grammar of Hawaiian: recurrent problems*. Mānoa :Hawaiian Studies Program, University of Hawai‘i.
- Hopkins, Alberta Pualani (1992) *Ka lei ha‘aheo: Beginning Hawaiian*. Honolulu : University of Hawaii Press.
- 岩崎加奈絵 (2009) 「ハワイ語神話テキスト資料における‘ana の分布および機能」 修士論文, 東京大学.
- Kamanā, Kauanoë and William H. Wilson (2012) *Na Kai Ewalu Book2: Beginning Hawaiian lessons*. Hawai‘i: Hale Kuamo‘o.
- Kōmike Hua‘ōlelo, Hale Kuamo‘o, ‘Aha Pūnana Leo (2003) *Māmaka kaiao: a modern Hawaiian vocabulary: a compilation of Hawaiian words that have been created, collected, and approved by the Hawaiian Lexicon Committee from 1987 through 2000*. Honolulu: University of Hawaii Press.
- Marck, Jeff (2000) *Topics in Polynesian Language and Culture History*. Canberra: Pacific Linguistics.
- 松原好次 (2004) 「ハワイ語復権運動の現況」 後藤明、松原好次、塩谷亨編著(2004), pp.91-101.
- 松原好次 (2008) 『ハワイにおける先住民族言語再活性化運動の成果と今後の課題』 平成 17 年度～平成 19 年度 科学研究費補助金基盤研究 (C)、研究成果報告書.
- Pawley, Andrew (1966) Polynesian languages: a subgrouping based upon shared innovations. *Journal of the Polynesian Society* 75, pp.39-64.
- Pawley, Andrew (1967) The relationships of Polynesian Outlier languages. *Journal of the Polynesian Society* 76, pp.259-296.
- Pukui, Mary Kawena and Samuel H. Elbert (1957) *Hawaiian-English dictionary*. Honolulu: University of Hawai‘i Press.
- Pukui, Mary Kawena and Samuel H. Elbert (1965) *Hawaiian-English dictionary (Third edition)*. Honolulu : University of Hawaii Press.
- Pukui, Mary Kawena and Samuel H. Elbert (1986) *Hawaiian dictionary: Revised and enlarged edition*. Honolulu : University of Hawaii Press.
- Ross, Malcolm (2009) Proto Austronesian verbal morphology: a reappraisal. In: Adelaar, K. Alexander and Andrew Pawly, *Austronesian Historical Linguistics and Culture History: A Festschrift for Robert Blust*, pp. 295–326. Canberra: Pacific Linguistics.
- Schütz, Albert J. (1994) *The voices of Eden: a history of Hawaiian language studies*. Honolulu: University of Hawaii Press.
- Schütz, Albert J., Gary N. Kahāho‘omalū Kanada and Kenneth William Cook (2005) *Pocket Hawaiian grammar: A reference grammar in dictionary form*. Waipahu: Island Heritage Publishing.
- 塩谷亨 (1999) 『ハワイ語文法の基礎』 大学書林.
- 塩谷亨 (2000) 「動詞類と名詞類の区別の普遍性について : ハワイ語における品詞分類への適用」 『室蘭工業大学紀要』 Vol. 50, pp.141-148.

- Shionoya Toru (2004) The current situation of the Hawaiian language. In: 柴田紀男・塩谷亨 (編) 『環太平洋の言語』 第3号, pp.237-245.
- 塩谷亨 (2007) 「ポリネシア諸語の比較表現における方向詞」『室蘭工業大学紀要』 Vol. 57, pp.17-24.
- Tabrah, Ruth M. (1987) *Ni‘ihau: The Last Hawaiian Island*. Honolulu: Press Pacifica.
- Wurm, Stephen Adolphe (2007) Australasia and the Pacific. In C. Moseley (ed.), *Encyclopedia of the world's endangered languages*, pp. 425–578. London: Routledge.

URL

- Blust, Robert and Stephen Trussel (2013) The Austronesian comparative dictionary: A work in progress. *Oceanic Linguistics* 52, pp. 493-523. Honolulu : University of Hawaii Press. <http://www.trussel2.com/ACD> (2017/8 アクセス)
- Greenhill, S.J. and Clark Ross (2011). POLLEX-Online: The Polynesian Lexicon Project Online. *Oceanic Linguistics*, 50, pp.551-559. Honolulu : University of Hawai‘i Press. <https://pollex.shh.mpg.de/> (2017/8 アクセス)
- Greenhill, S.J., Blust, R., & Gray, R.D. (2008). The Austronesian Basic Vocabulary Database: From Bioinformatics to Lexomics. *Evolutionary Bioinformatics*, 4:pp.271-283. <https://abvd.shh.mpg.de/austronesian/> (2017/8 アクセス)
- Ka Haka ‘Ula O Ke‘elikōlani College of Hawaiian Language and ALU LIKE, Inc.. *Ulukau: The Hawaiian Electronic Library*. <http://ulukau.org/> (2017/8 アクセス)
- Partners In Development Foundation (2003-2008) *Baibala Hemolele: Hawaiian Bible*. <http://baibala.org/cgi-bin/bible> (2017/8 アクセス)
- Simons, Gary F. and Charles D. Fennig (eds.). 2017. *Ethnologue: Languages of the World, Twentieth edition*. Dallas, Texas: SIL International. Online version: <http://www.ethnologue.com>. (2018/1 アクセス)
- 塚本聡 KWIC Concordance for Windows Ver.5 http://www.chs.nihon-u.ac.jp/eng_dpt/tukamoto/kwic.html (2017/8 アクセス)

コーパスに使用した資料

- Beckwith, M. W. (1951) *The Kumulipo: a Hawaiian creation chant* [translated and edited with commentary by Martha Warren Beckwith; with a new foreword by Katharine Luomala], Honolulu: University of Hawai‘i Press.
- Carroll, Lewis (2008a) *Alice’s Adventures in Wonderland* [Originally published in1865]. In: Project Gutenberg. <http://www.gutenberg.org/files/11/> (2017/07/01 Accessed)
- Carroll, Lewis (2008b) *Alice’s Adventures in Wonderland* [Originally published in1865]. Evertype.
- Carroll, Lewis (2012) *Na hana kupanaha a ‘Āleka ma ka ‘Āina kamaha’o* [Translated by R. Keao NeSmith]. Evertype.

- Elbert, Samuel H. (1959) *Selections from Fornander's Hawaiian antiquities and folk-lore*, Honolulu: University of Hawaii Press.
- Gutmanis, June (1983) *Na pule kahiko: Ancient Hawaiian prayers*, Honolulu: Editions Limited.
- Ho'oulumāhiehie (2006) *Ka mo'olelo o Hi'iakaikapoliopole*, Honolulu; Awaiaulu Press.
- Judd, Gerrit Parmele and Esther T. Mookini (2003) *Anatomia, 1838*, Honolulu: University of Hawaii Press.

コーパス<ULUKAU 収録分 : 6 章注にのみ使用>

- Avelino, Kawehilani (2006) *Ma Uka, Ma Kai*. Hilo, Hawai'i: Hale Kuamo'o.
- Keolanui, Joshua Kawehi (2006) *E Kū'u Hiapo*. Hilo, Hawai'i: Hale Kuamo'o.
- Kawa'i'ae'a, Kulamanu, Emilia Ka'awa, Kawehi Keolanui and Malia Kruger (2009) *'O Kaina ke Kumu Koa*. Hilo, Hawai'i: Hale Kuamo'o.
- Kruger, Malia (2007) *No Ka 'Ūlili Niu*. Hilo, Hawai'i: Hale Kuamo'o.
- Mattoon, Cathleen Pi'ilani (2004) *He Aha Ka Mea 'Ai No Ka 'Aina Awakea?* Hau'ula, Hawai'i: Nā Kamalei Ko'olauloa Early Education Program.
- Stender, Joshua Kaiponohea (2004) *Nā Makana a Nā I'a*. Hoolulu: Hale pa'i o nā Kula 'o Kamehameha.
- The students and teachers of Ke Kula 'o Samuel M. Kamakau (2008) *He Ka'a'o no Hauwahine lāua 'o Meheanu*. Honolulu: Kamehameha Publishing.
- Wilson, William H. (1992) *Ko Pele Hiki 'Ana Mai I Hawai'i*. Hilo, Hawai'i: 'Aha Pūnana Leo.
- Wilson, William H. (1993) *No Haunui Lāua 'O Hauiki*. Hilo, Hawai'i: 'Aha Pūnana Leo.
- Wilson, William H. (1994) *'A'ohē Inoa Komo 'Ole O Ka 'Ai*. Hilo, Hawai'i: 'Aha Pūnana Leo.

資料編について

以下では、コーパスとした各テキストのサンプルを提示する。

分量は元となった冊子の本文第 1 ページ目とする。基本的に表記などは変更していないが、新表記法である Ho‘oulumāhiehie (2006) については、電子データ作成に当たり以下のような変更を加えた。

- ① 長母音は大文字表記とする
- ② ①を分かりやすくするため、文頭や固有名詞の 1 文字目が本来大文字のものも小文字表記とする
- ③ 声門閉鎖音はシングルクォーテーション (‘) のまま入力する

資料 番号	発行年 (原本 発行年)	タイトル	著者・編者	分野	のべ 語数
1	2003 (1838)	Anatomia	Judd, G. P. and Esther T. Mookini	初等 医学書	約 19000
2	1951 (1889)	The Kumulipo: a Hawaiian creation chant	Beckwith, M. W.	チャント	約 9100
3	2006 (1905 -1906)	Ka mo‘olelo o Hi‘iakaikapoliopele (冒頭～151 頁)	Ho‘oulumāhiehie	神話	約 92200
4	1959 (1916 -1919)	Selections from Fornander's Hawaiian antiquities and folk-lore	Samuel H. Elbert	神話 ・民話	約 20000
5	1983	Nā pule kahiko	Gutmanis, June	チャント	約 16500

資料 1. Anatomia

2¹. ANATOMIA.

O ke ano o keia olelo, Anatomia, oia ka olelo hoakaka i ke kino, i kona ano, a me na mea a pau i hoonohoia maloko; o na iwi, o na io, o na olona, o na ami, o na aa, o na puupuu, o na naau, a me na wai. O ia mau mea a pau, a me ka lakou hana maloko o ke kino e pono ai ke kanaka, oia ka keia palapala e hoakaka aku ai.

3. Aia ma na aina naauao, ua nui ka poe i ao ikaika ma ka Anatomia, mai ka wa kahiko mai. Ua nana pono lakou i na iwi, ua kaha i na kupapau he nui wale, a noonoo pono ka naau i ke ano o kela mea keia mea a ka maka i ike ai. Ua maopopo ka nui i keia manawa. Nolaila, mahalo ka poe naauao i ke akamai o ke Akua ka mea nana i hana, a i malama hoi i na mea kupaianaha o ko lakou kino. Aole loa e hiki ia lakou ke olelo me ka poe aia, "aohe Akua" no ka mea, ua ike pono lakou ia ia maloko o kana mau hana io. Eia hoi kekahi mea pono o ko lakou imi ana; ua loa ia lakou ke ano o na mai, a me na eha; a ua ike i ka lapaau ana: ua akamai loa na kahuna lapaau i neia wa, aole e like mamua. O Iesu, a me ka poe hana mana no ke kokuia mai e ke Akua, o lakou wale no ka poe i oi aku ko lakou akamai i ka lapaau ana.

4. NO NA IWI.

He nui ke kuleana o na iwi maloko o ke kino. Oia ka mea e maloeloe ai, a e oolea ai. Ina ua hanaia ke kanaka me ka iwi ole, e like me ka loli, pehea la e hiki ia ia ke ku ae iluna? Pehea la e hele? Pehea la e hana? He pale kekahi iwi; me na iwi poo e pale ai i ka lolo, a me na iwi aoao e pale ai i ke ake mama. He une ka nui o na iwi: e like me ka laau e mahiki ai i ka mea kaumaha, pela na iwi; a o na io ka mea e huki ai.

¹ Anatomia は4節で述べた通り、電子版を元に、冊子版を参照して適宜修正を加えたものを使用している。資料中には電子版に付加されていた段落番号が含まれるが、段落番号が付加されていない箇所もあり、それを新たに加えるなどの処理はしていない。

資料 2. The Kumulipo: a Hawaiian creation chant

o ke au i kahuli wela ka honua
o ke au i kahuli lole ka lani
o ke au i kuka'iaka ka la
e ho'omalalamamai ka malama
o ke au o Makali'i ka po
o ka walewale ho'okumu honua ia
o ke kumu o ka lipo, i lipo ai
o ke kumu o ka po, i po ai
o ka lipolipo, o ka lipolipo
o kalipoo ka la, o ka lipo o ka po
po wale ho'i
hanau ka po
hanau Kumulipo i ka po, he kane
hanau Po'ele i ka po, he wahine
hanau ka 'Uku-ko'ako'a, hanayu kana, he 'akoako'a, puka
hanau ke Ko'e-enuhe 'eli ho'opu'u honua
hanau kana, he Ko'e, puka
hanau ka Pe'a, ka pe'ape'a kana keiki, puka
hanau ka Weli, he Weliweli kaa keiki, puka
hanau ka 'Ina, ka 'Ina
hanau kana, he Halula, puka

資料 3. Ka mo'olelo o Hi'iakaikapoliopele

'o hi'iaka ikapoliopele ka mea nona kEia mo'olelo e pane'e 'ia aku nei i mua o nA hoa aloha a me nA makamaka heluhelu o ka na'i aupuni.ua 'Olelo 'ia ma kEia mAhele e ho'opuka 'ia aku nei, 'o ia ka panina hope loa o nA kaikaina o pele, ka mO'I wahine kaulana o ke aupuni ahi o kIIauea.

ma ka mo'olelo o pele e 'ike 'ia ai, ua hele mai 'o ia mau kaikunAne a me nA kaikaina mai kahiki mai, 'o ia ho'i, mai ka 'Aina 'o polapola, a e 'ike 'ia ana ka 'oia'i'O O KEia ma ka pule a hi'iaka i kAhea ai ma loko o ka ulu lehua o pana'ewa, ma ka wA a pane'ewa i ho'onahoa mai ai e make 'o hi'iaka a me wahine'Oma'o. e hO'ike 'ia aku ana kEia pule kAhea a hi'iaka ma hope a'e nei.

ma kEia mo'olelo, eia nA kaikaina o pele i hele pU mai ai me ia mai polapola:'o hi'iakaika'ale'I, hi'iakaika'alemoe, hi'iakapaikauhele, hi'iakaikapuaaneane, hi'iakaikapualanu'I, hi'iakanoholae, hi'iakawAhilani, a me hi'iakaikapoliopele.

wahi ho'i a kekahi po'e pa'a mo'olelo hi'iaka, he lehulehu loa kA nei po'e hi'iaka, ua piha ke kanahA a 'oi. a ma ka mAhele ho'i a kekahi po'e, he 'ewalu nO hi'iaka e like a'ela nO me ia i hO'ike 'ia a'ela, a eia ko IAKou mau inoa: hi'iakamAkolewAwahiwa'a, a 'o ka lei hala a me ke Anuenue kona mau hO'ailona;hi'iakawAwahilani, 'o ia nO 'o hi'iakawAhilani i hO'ike mua 'ia a'ela, 'o ke kuAua ko ia nei hO'ailona;hi'iakanoholani, 'o ka 'Onohi 'ula a me ka uakoko ko ia nei hO'alina;hi'iakaka'alawamaka, 'o ka 'Ohiki maka loa ko ia nei hO'ailona; hi'iakaikapoliopele, 'o ka pala'A o ke kuahiwi ko ia nei hO'ailona, a 'o ka 'ai i ka i'a mai ke po'o a ka hi'u ko ia nei kAnAwai;hi'iakakapu'ena'ena, 'o kEia nO paha 'o hi'iakaikapuaaneane i hO'ike 'ia a'e nei, a 'o ko ia nei hO'ailona he wela nono 'ula ke kanaka a 'o ka wahine ke pili 'ia e kEia hi'iaka; hi'iakalei'ia, 'o nA lei a pau ma waho o ka lei hala, 'o ia ko ia nei hO'ailona;a 'o ka hope loa, 'o hi'iaka'Opio.

'O nA hi'iaka a pau, he po'e wAhine u'i wale nO IAKou, a 'o ka 'oi aku na'e o ka u'i ma waena o IAKou a pau, 'o ia nO 'o hi'iakaikapoliopele, ka mea nona kEia mo'olelo. ua 'Olelo 'ia ma kEia mo'olelo, ua like ka nono 'ula o nA pApAlina o kEia wahine me ka wai 'ula liliko o ka 'Ohelo; a 'o kona 'ili, ua like me ka pua hala melemele maika'i; a 'o kona 'Oiwai a pau, he u'i ho'oheno e nopu hulili ai ka houpo o ka 'ao'ao 'o'ole'a, a hiki nO ho'i ke "lala iho i ka wai" ka 'Olelo 'ana-

'o ka u'i paha ia
he lawena na kalihilihi
pA iho i ka ipu kapu a ka 'aumakua
he hone mai ho'i kau a koe.

資料 4. Selections from Fornander's Hawaiian antiquities and folk-lore

Kaao no Punia.

Ike Punia oia ma ka lua ula i ka moe o na mano.—Me ke akamai make Umi iaia.—Koe o Kaialeale ke 'lii mano.—Olelo Maalea Punia i wahi e komo ai i ka opu.—I ka hamama ana, hoa oia ia loko me ke ahi.—Owahi ka mano a ohule o Punia.—Hui Punia me na uhane lapu.—Alakai ia i ko lakou make iloko o ka wai, koe hookahi.

O ka aina i noho ai o Punia, o Kohala i Hawaii, make ka makuakane, ola o Punia me ka makuahine me Hina, o ka laua hana ka mahi i uala, a loa ka ai, aohe ia.

Ka lua ula.

I aku o Punia ia Hina: "E iho au i ka luu ula na kaua i ka lua ula a kuu makuakane." Olelo mai o Hina: "Aole, o na lua ula, aohe kanaka ola. Iho aku no ke kânaka e luu pau no i ka mano."

No Kaialeale. He mano ia, oia ke 'lii o na mano e ae, e noho ana i ka lua ula. He umi mano malalo ona, oia ka umikumamakahi.

I ka lua o ka olelo ana a Punia i ka makuahine, iho keia a maluna pono o ka lua ula, e moe ana o Kaialeale a me na mano e ae. Kahea iho la keia: "Ke moe nei no paha ua mano nui nei, o Kaialeale ka inoa. Kuu luu aku no auanei ia a ma kela lae la, ea ae, loa no na ula elua, ola no wau me kuu makuahine, hoi aku no me na uala ola no ka noho ana o uka." Ia Punia e olelo ana, ala na mano a pau loa a me Kaialeale. I aku o Kaialeale i ka nui mano: "E nana pono kakou i kahi a Punia e luu ai alaila, luu aku kakou." Aia ma ko Punia lima he pohaku. Nou aku la ia ma ka lae ana i olelo mua ai i na mano, a haule ka pohaku i lalo o ke kai. Popoi aku la na mano ma ia wahi, hakahaka ka lua ula. Luu iho la o Punia a loa elua ula, ea ae la a kau i luna, olelo aku i na mano. "A-ha-ha! luu iho nei no o Punia loa na ula elua, ola." "Ola no maua me kuu makuahine, na ke kahi o ka mano, na ka lua, na ke kolu, na ka ha, na ka lima, na ke ono, na ka hiku, na ka walu, na ka iwa, na ka umi, na ka umikumamakahi o ka mano au i hai mai nei. Na ka mano hiu wiwi, nana au i hai mai nei." Lohe o Kaialeale i keia olelo a Punia

資料 5. Nā pule kahiko

1² Na Pule

1-1

O na Kumuakua apau i hanauia i ka Po i ka Lahiki ku;

Ea mai ke kai mai!

O na Kumualii apau i hanauia I ka Po i ka Lahiki ku.

Ea mai ke kai mai!

O na Lala alii apau i hanauia i ka Po i ka Lahiki ku.

Ea mai ke kai mai.

O na Welaualii apau i hanauia i ka Po i ka Lahiki ku.

Ea mai ke kai mai!

O na Pua alii apau, eku eola

A kau a kanikoo pala lau hala

Liau makaiole Kolopupu

² 章番号は原典ではローマ数字。また、1-1 などの下位番号は筆者が閲覧の利便性のため独自に付したものである。

論文の内容の要旨

論文題目 句の中核部を形成するハワイ語の機能語

—‘ana と方向詞を中心に—

氏 名 岩崎加奈絵

本研究では、ハワイ語文の基礎的単位である動詞句・名詞句に現れ、さまざまな統語的役割を担う機能語について、その性質を考察・記述することを試みた。そしてその際、特に‘ana と方向詞の 2 カテゴリに着目した。また、各要素の性質を明らかにするにあたっては、ハワイ語が日常的に使用されていた時期に書かれた文献資料から用例を採った。

第 1 章では、本研究の目的、およびハワイ語の基本情報を述べ、考察対象である「自然継承期ハワイ語」を、20 世紀初頭に使用が禁じられる頃までのハワイ語、すなわちネイティブスピーカーが数多く存在し、ハワイ語が自然に継承されていた時期のハワイ語と定義した。加えて、本研究で文献を使用する理由、さらに本研究がしばしば言及する「規範」としての文法記述について説明した。

第 2 章では、まず 1 節と 2 節で、議論に関係する事項を中心に、主に先行研究における記述に基づき、ハワイ語の音韻・語類・句構造・文の種類について概観した。続いて 3 節では、先行研究にコンセンサスのない点を中心に、本研究で用いる用語の定義を明示した。特に重要な点として、ハワイ語において「動詞」「名詞」などは、内容語の下位分類としての語彙的カテゴリではなく、文で使用された場合に明らかとなる、統語的なカテゴリであることを述べた。

第3章では、ハワイ語の主な先行研究と、ハワイ語以外のもので本研究に関連する重要な研究について整理した。そのうえで、ハワイ語文法記述が抱える問題点、特にレファレンスグラマーの更新が1970年以降行われていないことについて言及した。

第4章では、本研究における記述・考察の材料であるデータが、どのような性質のものであるかを紹介した。具体的には、用例を検索する際に使用したテキストデータのタイトル、それらの発行年・分野・分量・表記法といった基礎情報、さらに判明している範囲で、どのような経緯で、どのような人物の手によって書かれたものであるかを述べた。原本発行年代が19世紀～20世紀初頭のテキスト5編をメインコーパスとし、分量は延べ語数で約15万7000語である。

第5章は本研究の主たる章である。まず、1節では句に出現する機能語の記述をカテゴリごとにおこなった。特に受身のマーカーに関しては、名詞句でも少なからず出現することを具体的な用例数とともに提示した。

続く2節では‘anaを取り上げた。‘anaは、ポリネシア祖語の名詞化接辞に由来するとされ、ハワイ語研究者の間でも一般に名詞化辞と定義される。しかし、第2章で明らかにしたように、内容語の「動詞」「名詞」というカテゴリが統語的なレベルのものであり、語彙的なレベルで「動詞」「名詞」というカテゴリが存在しないとすれば、名詞化という派生プロセスは、そもそも想定のしようがない。筆者は自身の先行研究において、①ある内容語が名詞として機能するために必要な要素は、冠詞や指示詞などの決定詞である、②‘anaは名詞化辞ではなく、先行する内容語が行為・動作そのものであることを明示する機能を有すると考えられる、という点を明らかにした。そこで、②の検証を念頭に、‘anaが名詞化以外の機能を担っているか否か、‘anaが句に含まれるかどうかで統語的・意味的な違いがあるか否かの2点について、機能語・内容語との共起関係に注目して検討した。

その結果、‘anaの使用を促進する、あるいは抑制する要素は明確ではない、と判断するに至った。共起する機能語・内容語は特定の偏りを示すことはなく、コーパス中には、同じ機能語や内容語であっても‘anaを伴う場合と伴わない場合の両方が見られたためである。このことは、自然継承期末期のハワイ語では、‘anaは祖語の段階ではあったはずの名詞化という機能を失いつつあった、すなわち‘anaが機能と形式の並行性を失う途上にあったことを示唆すると結論付けた。加えて、‘anaの分布上の特徴について、チャント文での出現割合が他のジャンルの文章に比べ少ないことにも触れた。

‘anaの使用について決定的な条件が明らかになった訳ではないものの、まとまった量の用例から量的な‘anaの分布の傾向を提示することはできた。特に、機能語との共起関係に着目したデータを提示することができた点は、先行研究にない成果である。具体的な分布を示すことで、‘anaをどのような場合に使うことができるのか、どのような場合に使われにくいのかを、以前より正確に予測できるようになったと考える。

5章3節では方向詞を論じた。‘anaに比べ、方向詞については先行研究による機能の説明がうまくいっており、本研究のデータもそれらに矛盾しないものであった。次に、方向

詞について未だ説明されていない、①誰・何を基準として方向を決定し、マークするのか、②いつ使うことができ、いつ使われにくいのか、という2点を検討した。

用例分析の結果、方向の基準点(①)については十分明確にはできなかったが、各方向詞の特徴が明らかになった。第1に、aku<離れていく>/mai<近付いてくる>の相対的方向表現と、a'e<上へ>/iho<下へ>の絶対軸的方向表現の2カテゴリがあることを示した。第二に、共起する内容語に着目することにより、類似する意味特徴を持つ複数の内容語が、方向詞との共起関係においては異なる傾向を示すことを明らかにした。ここから、方向詞を伴いやすいかどうか・伴う方向詞の種類に偏りがあるかどうかは、内容語の意味的性質によってではなく、語彙的に決まっている可能性が高いことを示した。最後に、'anaの場合にある程度認められた文章のジャンルによる出現頻度の違いは、方向詞においてもある程度当てはまるが、方向詞ではそれ以上に「対話性」が出現頻度の違いに影響しており、文章の書き手にとって聞き手が意識されることが、方向詞の使用を促進することを明らかにした。'anaの場合と同様、具体的な分布を示すことで、使用されやすい状況を理解するためのデータを提示できたと考える。

第6章では、自然継承期ハワイ語とは別に、1970年代のハワイアン・ルネサンス以降のハワイ語を「現代ハワイ語」と定義し、それがどのような性質を持つか、特に英語やレファレンスグラマーとの関係に着目しつつ考察を行った。

まず、ハワイ語とハワイ語の記述が辿ってきた経緯を、歴史・社会的背景を交えて概観した。学習による継承が主たる継承方法となった現代ハワイ語は、学習の過程で曖昧な点や不明点が生じた際、母語話者の直感に頼れない場合がほとんどである。したがって、現代ハワイ語には、教科書の記述や、その元にもなっているレファレンスグラマー(換言すれば、文法研究の知見)の記述の影響があると考えられる。本章では、これまでのハワイ語の記述や英語からの影響の有無を明らかにするため、5章で扱った'anaと方向詞を題材とし、現代ハワイ語と自然継承期ハワイ語との間に差異があるかどうか、あるとすれば、現代ハワイ語に固有の性質とはどのようなものなのかを検討した。

ここでも決定的な違いやその要因を明らかにするには至らなかったが、ハワイ語教科書でしばしば対応させて説明される'anaと英語の-ing形について、また、英語には対応する文法要素のない方向詞について、それぞれ量的なデータを提示した。特に、方向詞の出現割合は僅差ながら減少しており、これが話者ごとの変動なのか、それとも他のデータからも同様の傾向が見られるか、今後繋がる結果を提示できたと考えている。現時点では現代ハワイ語の統語的研究はほとんど行われておらず、本研究での考察はその第一歩と位置付けられる。

第7章では、全体の総括と今後の課題について述べた。

なお、巻末の資料編では、本研究が使用したハワイ語テキストデータがどのようなものであるかを提示するため、メインコーパスに含んだテキスト5編の各冒頭1ページ分を参考資料として提示した。